

---

# 彩炎の魔女

千風

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

彩炎の魔女

### 【Nコード】

N5593X

### 【作者名】

千風

### 【あらすじ】

強力な魔炎をその身に宿す“魔女”と、魔女が魔炎を使うための手段となる人間“魔士”。“最下級魔士”という不名誉なあだ名を持つマルク・クラウドは、パートナーとなってくれる魔女を探すも、現在、九十九人連続で断られ中。そんなマルクはある日、謎めいた一人の魔女、ルビィネルと出逢う。この世界で一番の魔女“彩炎の魔女”を目指すというルビィネルとの出逢いにより、マルクの運命は、大きく動き出していく。

## 1 (前書き)

こんにちは。千風です。

新しく連載を始めました。

長々とした話になるかと思いますが、最後までお付き合いいただければ、幸いです。

では、『彩炎の魔女』。

どうぞ。

『魔女は儂い生き物だ』。  
それは、昔の偉人の言葉だっただろうか。  
だが、それは真実ではない。

魔女は、強かな生き物だ。

「パートナー？」

流れるような金糸の髪、海のように透き通る青色の瞳。

「冗談！ あんたみたいな最下級魔士とパートナーになるくらいなら、ブタとでも組んだ方がマシよ」

目を見張るほどに美しい顔立ちをしたその魔女は、その美しい顔を、少しも歪めずに、目の前の彼へと言い放った。

### レイール聖魔院

「ギャハハハハ！」

上品とは言えない笑い声が、雲一つない青空へと、高々と響き渡る。

「いやあ、ブタは凄げえな！ 俺の予想以上の、見事な振られっぷりだぜ、マルク！」

目の前で大笑いする友人とは対照的に、明るさも楽しさも一切感じさせない、陰気な表情を見せる、マルクと呼ばれたその青年。少し癖のある柔らかかそうな黒髪に、まだ、どこか幼さを残す赤色の瞳。整っていないわけでもないが、取り分けて目立つところもない、普

通の青年だ。まだ止まることのない友人の笑い声に、マルクの顎が、徐々に下方へと落ちていく。

「んでも、これで何人目だあ？ パートナー断られたの。この前が九十八人目だったからあ、お！ 次でついに大台、おめでとう！」  
祝つかのように拍手をする友人。肩ほどまである長めの茶髪に、緑色の瞳の、こちらはどちらかという、人目を引くような整った顔立ちの青年だ。その友人の拍手を聞き、マルクの顎は、ついに目の前のテーブルへと落ちる。

「ポンドさ……」

テーブルへと顎をつけたまま、マルクがゆっくりと口を開き、友人の名を呼ぶ。中庭のような場所にある、白いテーブルを囲むようにして座る、マルクとポンドは、揃いの服を着ていた。赤色の枠取りのある、横二つ、縦に三つずつ並んだ、六つボタンの黒色の上着に、黒色のズボンを履いている。堅苦しいその服は、若者が好んで着る服には見えない。マルクたちが居る中庭を行き交う、他の者たちも、同じ服を着ている。それは、このレイール聖魔院に通う者たちが、着ることを定められている服、つまりは制服であった。

「仮にも俺の友達なら、少しくらい、優しい言葉を掛けてくれても良くない？」

「優しいねえ。“次の魔女はきつと、パートナーになってくれるさ”ってえ？ 俺あ、そういうの、友情じゃないと思うねっ」

拗ねたように言うマルクに対し、ポンドはその笑みを止めることなく、軽い口調で言葉を続ける。

「だいたい、他人事みたいに笑ってるけど、ポンドだって今、パートナーいないだろ」

「俺は心に決めた、たった一人の魔女を、口説き落としてる最中なの。誰彼構わず行った上に、全部に振られてくるお前とは違うのっ」  
「うっ」

指摘するようなポンドの言葉に、思わず苦い表情を見せるマルク。  
「別に俺だって、好きで、誰彼構わず行ってるわけじゃ……」

「お疲れ様」

背後から聞こえてくる、涼風のような美しい声に、マルクが言葉を止めて、振り返る。

「アメジエス」

振り返ったマルクへと軽く右手を上げながら、二人の居るテーブルへと、ゆつくりと歩み寄って来るのは、腰ほどまである、まつすぐ長い黒髪に、深い紺色の瞳の、何とも美しい少女。白過ぎる肌はどこか神秘的で、人間離れしている。若く見えるが、ひどく落ち着いた雰囲気纏っており、実際のところ、幾つなのか見当がつかない。アメジエスと呼ばれたその少女は、マルクたちと同じ黒色の制服は着ておらず、薄い紫色のワンピースを身に纏っていた。白く細い首には、董色のリボンが巻かれている。

「おう、終わったのか？ 魔族歴史の講義」

「ええ、死ぬほどつまらなかつたわ」

どこか、うんざりしたような笑みを浮かべて、アメジエスが、座っているポンドのすぐ傍へと立つ。

「二人は何してるの？ 中庭のベンチなんかで」

「マルクの失恋話聞いて、笑ってた」

「何、また振られたの？ マルク」

「ああ、うん。まあ」

アメジエスの問いかけに、マルクがアメジエスから視線を逸らしながら、歯切れ悪く答える。

「そ、そうだ！ アメジエスのクラスで、誰か、俺のパートナーになつてくれるような魔女って……！」

「いないわね」

「うっ」

即答するアメジエスに、マルクから、呻き声のようなものが漏れる。

「だってあなた、魔女の中でも有名なもの。“最下級魔士”って「アメジエスが言葉を続けながら、ポンドの横の椅子を引き、ゆっ

くりとそこへと腰掛ける。

「誰も好き好んで、そんな魔士をパートナーになんか選ばないわよ」

「違いねえ!」

「ううう」

アメジエスの言葉に、ポンドが笑顔で頷くと、マルクがその呻き声を長くする。

「だあああああ!」

「うおっ」

突然、叫び声をあげるマルクに、ポンドが驚く。

「どうせ、俺は最下級魔士だよお! 魔士試験だって、百九十回の落第の末に、奇跡的に受かって、自分でも何で、魔士になれたのか、わかんないしさあ!」

「随分、追い込まれてんな。今回は」

テールへ顔を押しつけたまま、胸の内を爆発させるように、大きな声を張り上げるマルクを、ポンドはどこか感心するように見つめる。

「奇跡的に受かったんじゃないわよ、マルク」

「へ?」

声を挟むアメジエスに、マルクがどこか、期待するように顔を上げる。

「あれは、試験官の採点ミス」

「だあああああ!」

アメジエスの容赦ない一言に、マルクが頭を抱え、またしても叫び声をあげる。

「トドメ、突き刺すねえ! お前も」

「甘いこと言って励ますのって、私、友情じゃないと思うわ」

呆れたような視線を向けるポンドに、アメジエスが、先程、ポンドが言っていたのと同じような言葉で主張する。

「もうダメだ……俺みたいダメ魔士の、パートナーになんか行ける魔女なんかいないんだ……俺は一生、マフレイヤになんて、行け

ないんだっ……」

「ああ、あ、マルクのネガティブスイッチが入っちゃった」

「ポンドのせいじゃないの？」

「お前のせいだろ」

テーブルに突っ伏したまま、陰気な言葉を続けるマルクに、ポンドとアメジエスは互いを見合い、互いに責任を擦り付け合う。

「ほら、そういった悩みとは、無縁の魔士様が来たわよ」

別方向を見て、そつと言いつつアメジエスに、見合っていたマルクとポンドが同時に振り向く。皆が、中庭から続く、大きな煉瓦の建物の入口付近を見やった。

「シリングくうーん！ 私、今日の講義でわからないところがあったえー！」

「ちよつと、私が先に聞くんだから！」

「あなたたち！ シリングくんだって、自分の講義で疲れてるんだから、少しは遠慮しなさいよね！」

煉瓦の建物から、中庭へと出て来たのは、色取り取りの髪色に、色取り取りの服を身に纏った、美しい顔立ちの女性陣。黄色い声や、少し怒ったような声を発する女たちに囲まれ、そこから出て来たのは、マルクたちと同じ、黒色の制服を纏った、一人の青年であった。銀色に近い白い短髪に、あまり感情のない、少し冷たい印象も覚え、細い青色の瞳。高い鼻に、上品な口元は、まさに絵に描いたような端正な顔立ちだ。女たちと比べると、頭二つ分は余裕で背が高い。

「かぁー、相変わらず魔女にモテモテだなあ。シリング・ウェーガツト様は」

女たちに囲まれたその青年を見ながら、どこか感心したように呟くポンド。

「まあ彼は、このレイール聖魔院で一番の魔士、“最上級魔士”だもの。パートナーになりたい魔女なんて、山ほどいるわよ。おまけに、あの顔だし」

アメジエスがあまり興味なさそうに、肩を落としながら、シリングを見つめる。

「その割には、まだパートナーいねえよな？ あいつ」

「彼ほど有能な魔士は、そうはいないから、魔院が今、彼のパートナーと成り得る魔女を、厳選してるそうよ」

「かぁー、最上級魔士様は、パートナー選びも特別扱いつてか」

驚きを越え、どこか呆れたように眉をしかめるポンド。

「同じ年に、同じ国に生まれて、同じようにこの魔院に通ってるのになぁ。なのに、どうしてこうも違っちゃったのかねえ？ 最上級魔士様と、ここに居る最下級魔士はっ」

「……………」

ポンドの言葉を聞きながら、マルクが、魔女たちに囲まれているシリングを見つめ、険しい表情を見せる。逃げるように目を逸らすと、マルクが静かに、椅子から立ち上がった。

「帰る」

「へ？ けど、午後から魔炎技術講習っ……………」

「どうせ出ても恥かくだけだし。だから、帰る」

「あ、おい、マルク！」

ポンドが引き止めるのも聞かず、マルクは足早に、その場から去っていった。マルクが背中に背負った、あまりにも暗い雰囲気を見て、ポンドはそれ以上、止めることも出来ず、軽く溜め息を落としながら、マルクへと伸ばしていた手を下ろした。

「マルクのネガティブ、今回は重症じゃない？」

「いつつも重症だろ？ あいつは」

問いかけるアメジエスに、ポンドは呆れたように答えた。

レイール聖魔院には、二つの種族の者が通っている。

一つ目の種族は、マルクたち、“人”と呼ばれる者たちだ。聖魔

院に通う人間を、特に“魔士”と呼ぶ。魔士は、人の中でも選ばれた、少数の者だけがなれるもので、魔士養成学校に通い、卒業試験を合格した者だけが、聖魔院へと足を踏み入れることが出来る。聖魔院では、魔士たちは皆、同じ制服を身に纏い、日々、勉強に励んでいる。

そして、もう一つの種族は、“魔女”。

魔女は、人に非ず、“魔族”と呼ばれる種族の者で、その身に“魔炎”と呼ばれる、強力な炎を宿している。だが、魔女は、その身に宿す魔炎があまりに強く、自らで炎を使い過ぎると、自身の寿命を縮めてしまう。

そのために作られたのが、“魔士”という制度であった。魔女は、“人”である魔士をパートナーとし、自身の魔炎を使わせる契約を行うのである。

レイール聖魔院は、魔士を育て、魔女と出会わせるための場所。また、契約した魔士と魔女が、その強力な魔炎を使えるようになるための、鍛錬の場所でもある。

であるからこそ、魔女とパートナーになれなければ、何の意味もなさない場所なのである。

そんな場所に通い始めて数ヶ月。

まだ、パートナーとなってくれる魔女を見つけることの出来ないマルクにとって、聖魔院はまだ、何の意味もなさない場所となっていた。

レイール聖魔院のあるレイヤという名の国は、“人”と“魔族”が共存する、この世界唯一の国であるが、その境界線は明確だ。国の中心を流れる大きな川、レイヤ川をラインとして、川から西側が“ヤール”と呼ばれる、人間たちの住む領域。東側が“レイール”と呼ばれる、魔族の住む領域として、はっきりと分けられている。聖魔院があるのは、魔族たちの住む東側の領域だが、人であるマルクの家は、ヤールの、それもかなり外れの山奥の奥にあった。周りには木々しかない場所に、不釣り合いなほどに立派な、二階建ての木製の屋敷。ここが、マルクの育った家である。

「ただいま」

「お帰りなさいませ、マルク様」

重みのある鉄製の扉を開けて、屋敷の中へと入ったマルクを、すぐに玄関へと出て来て出迎えたのは、マルクよりも十程年上に見える、二十代半ば頃の年齢の男であった。色素の薄い、水色の髪に、宝石のような青色の瞳は、とても優しい。立派な体躯にはあまり似合わぬ、簡素な紺色のエプロンを纏ったその男は、満面の笑みでマルクを迎えた。

「随分と早い、お帰りでしたね」

「午後の講義、サボったから」

「ええ！？ サボった！？」

男の問いに素っ気なく答えながら、マルクが玄関を上がり、廊下を進んで、すぐさま二階へと続く階段を上っていく。男は焦ったような表情を見せながら、必死にマルクの後を追っていく。

「どこか、お体の調子でも悪いのですか！？」

「別に。出たくないから、出なかっただけ」

階段を上りきると、マルクが、二階の廊下に出てすぐある、右側の扉を開ける。扉の向こうには、寝台と机、それに本棚が置かれた、

簡素な部屋。マルクは部屋に入り、机の上へと鞆を置くと、制服の上着を脱ぎ、手慣れた様子で、机の横のラックへと制服を掛ける。

「魔炎操作の授業なんて、パートナーも居ない俺には、必要ないし」「マルク様……」

部屋の外から、不貞腐れた様子のマルクを眺めながら、男が少し困ったように目を細める。

「また、パートナーを断られたのですね。これで九十九人目ですか」「落ち込んでるんだから、みなまで言うなよ。っていうか、人数まで、すっごい、しつかり覚えてるんだね」

軽く頭を抱え込むようにして、その場で俯く男に、マルクは思わず呆れた視線を送る。

「このラピスラズ、女でさえあれば、魔女となって、マルク様のパートナーとなったというのに……!!」

「気持ち悪いこと、言わないでよ」

涙を拭くような動作をしながら、言葉を続けるラピスラズに、マルクが、着替えをしながらも、顔をしかめる。

「魔族に生まれながら、マルク様のお役に立てないとは……!! まったく自分が、情けない……!!」

「ラピスが気に病むことじゃないよ」

制服から、動きやすい部屋着となったマルクが、嘆くラピスラズに言葉を掛ける。

「どの魔女もパートナーになつてくれないのは、俺が最下級魔士だからなんだし」

暗い表情で俯くマルクを見て、ラピスラズが眉間に皺を寄せる。

魔女にパートナーを断られ続けて、九十九人。最初は、まだ冗談のように笑い飛ばし、からかうポンドにも威勢よく怒鳴り返していたマルクだが、徐々にその勢いはなくなり、諦めの雰囲気が始まっていることを、ラピスラズは感じ始めていた。そんなマルクを励まそうと、ラピスラズが大きく笑みを浮かべる。

「だ、大丈夫ですよ、マルク様!」

上ずっているとなさえ思えるほどの明るい声で、ラピスラズがマルクへと声を掛ける。

「次の魔女はきつと、パートナーになつてくれますよ！」

笑顔で言い放ったラピスラズを見つめ、マルクがしばらくの間、真顔で固まる。やっとのことで視線を外し、軽く息を吐くと、マルクは困ったように微笑んだ。

「そういうのって、友情じゃないんだって」

「へ？」

マルクの言葉に、ラピスラズが大きく首を傾げる。

「あの、マルク様、それって……」

「ちよつと散歩、行ってくる」

「あ……」

ラピスラズの問いかけに答えることなく、マルクは足早に、帰ったばかりの部屋を後にした。

「最下級魔士、か……」

自身につけられた呼び名を口にしながら、マルクがそつと、平原に寝そべる。屋敷から少し歩いた、森の木々のひらけた、小高い丘の上。ここから見下ろす、ヤールの町と、その向こうに広がるレイールの町々、そして、さらに向こうに広がる山脈。この場所で、この景色を見ることが、マルクは昔から好きであった。

何が違っちゃったのかねえ？ 最上級魔士様と、ここにいる最下級魔士はっ

聖魔院でのポンドの言葉と、数えきれないほどの魔女に囲まれた、最上級魔士、シリングの姿を思い出し、マルクが右側へと体を傾け、地面に程近いところへ顔を向けて、そつと目を閉じる。

「俺だつて、あいつみたいに、なりたかったよ……」

心の奥底からの声を発したと同時に、マルクは、意識を手放した。

「ん……」

その赤色の瞳を、マルクが少しずつ開いていく。平原で寝そべったまま、いつしか眠ってしまったようだ。来た時と比べて、空の色が赤い。もう夕方なのだろうか。帰らなければ、と思い、体を起こそうとするが、気持ちよく眠ってしまったためか、体はなかなか言うことを聞いてくれなかった。ゆつくりと体を覚醒させていきながら、マルクが顔を上げる。まだ、霞がかった視界の中に、森の緑とは対照的な、赤色が飛び込んできて、マルクが思わず首を傾げた。

「赤……?」

戸惑うように呟きながら、徐々に視界をはつきりとさせていく。森の緑の中に浮かび上がる、その、炎のような燃える赤色は、風に柔らかくなびいている。どうやら、ワインレッドのような、深い赤色をした、長い髪のような。その髪の持ち主の後ろ姿が、徐々に見えてくる。白く細い手足は、女性だろう。髪と同系色の、真っ赤なワンピースも、大きく膨らんだスカートが、赤い髪と同じように、風に揺れている。髪が大きく揺れると、その細い首に、赤色のリボンが巻かれているのが見えた。

「“魔女”」

そのリボンを見て、マルクが思わず呟く。

「誰だ!??」

マルクのその小さな声が耳に届いたのか、赤い髪を揺らしていたその者が、勢いよくマルクの方を振り返った。警戒するように輝いた銀灰の瞳が、とても印象的な、美しい顔立ちの少女だった。年は、マルクと同じくらいか、少し幼くも見える。腰ほどまで伸びた赤い髪も、この山の中では、よく映えていて、とても綺麗だった。

「あ、ごめん。驚かせちゃっ……」

「そなたも、サードニツクの手の者か!？」

「へ?」

ゆっくりと体を起こしたマルクが、少女へと謝罪の言葉を投げかけようとしたその時、少女が荒々しく声をあげ、白く細いその右腕を、マルクの方へと突き出した。

「な、何っ……」

「何度来ようとも同じだ! 私はそなた等の思い通りには、ならぬ

ぞ! “火発”!

「いいい!？」

わけのわかっていないマルクに対し、威嚇するように叫びあげた少女が、突き出した右手をほんのりと赤く光らせると、次の瞬間、その光輝いた右手から、真っ赤な炎を放った。向かってくる赤々とした炎に、マルクが目の玉が飛び出しそうなほどに、大きく目を見開く。

「うわ、わわわ!」

草むらに転がりこむようにして、何とか炎を避けるマルク。だが、マルクの避けた炎は、マルクのすぐ傍の草むらを直撃し、草花に燃え移って、激しく焼け始める。

「あ!」

焼けていく草花に、険しい表情を見せるマルク。すぐにその場で立ち上がり、着ているシャツを脱ぎ捨てたマルクが、必死にそのシヤツを振り下ろし、草花に燃え移った炎を消そうとする。

「こんなところで炎を使うなんて、何考えてんだよ! 山火事にでもなったら、どうするんだ!」

「え?」

必死に消火にあたるマルクを見て、少女が戸惑うような表情を見せる。

「ふうー、やっと消えた!」

「そなた……」

何とか炎を消し、ホツとした様子で額の汗を拭うマルクの姿に、少女が途端に、警戒の色を薄くする。

「そなた、は……うっ」

「へ？」

マルクへと何かを言おうとしていた少女が、突然、その瞳を細め、その場に倒れ込んでいく。

「姉、上……」

「ええ！？ ちょ、ちよっと！」

小さな呟きを最後に、瞳を閉じ、力なく倒れ込む少女に、マルクは焦りの声をあげた。

山奥で出会った少女に、突然、炎で攻撃されたマルクであったが、倒れてしまった少女を捨て置いていくわけにもいかず、とりあえず少女を屋敷へと連れ帰った。

「特に外傷は見当たりません。恐らくは、魔炎を使った影響でしょう」

客間の寝台に寝かせた少女を前に、ラピスラズは落ち着いた口調で言い放った。

「魔炎を？」

「はい」

客間の出入口付近に立ち、ラピスラズへと聞き返したマルクに、ラピスラズが大きく頷く。

「魔女って、ホントに魔炎使ったら、寿命縮むんだね。一回使っただけで、ぶっ倒れちゃうなんて」

「通常は、それほど強くない魔炎一発程度では、倒れることはありませんが、元々、疲れが溜まっていたのでしょう。そこに魔炎を使ってしまったので、倒れられたのではないかと」

「ふうーん」

「栄養剤を打ちましたので、しばらく休めば、問題ありませんよ」

ラピスラズが、安心させるような穏やかな笑みを、マルクへと向ける。

「別にそこまで、心配してないけど」

「え？　ここで恩を売って、パートナーになってもらう作戦なのは？」

「そんな作戦、練ってないよ！　っていうか、そんな方法でパートナー得たって、嬉しくも何ともないし！」

「もう手段を選んでる場合じゃないと、思いますけどねえ」

「うるさいー！」

指摘するような鋭い視線を向けてくるラピスラズから、マルクが勢いよく視線を逸らし、拗ねるように口を尖らせる。

「けど、ラピスが居てくれて良かったよ。ヤールじゃ、魔族診てもらえるような病院もないし」

「お役に立てて、良かったです」

マルクの言葉に、ラピスラズが嬉しそうな笑みを浮かべる。

「けど一体、何者なんだろう。こいつ」

「そうですねえ。人間領であるヤールに、魔族の方がいらっしやるのは、実に珍しいですし」

「お前も魔族だけだね」

「私は特別製なのですよ」

二人の視線が、寝台で深く瞳を閉じたままの、少女へと向けられる。

「まあ、目を覚まされたら、色々とお話をつかがいませう。さあ、夕食の準備、出来ていますよ」

「うん。そういえば、腹減っ……………」

「ん、んん〜」

「ん？」

ラピスに景気よく返事をし、ラピスと共に客間を出ようとしたマルクが、漏れ聞こえてくる小さな声に気付き、振り返る。その声は確かに、寝台で眠る少女のものであった。声と共に、体を揺れ動かしている。

「あ、気が付いたか？」

「んっ……………」

マルクが興味津々に見つめる中、少女が未だ瞳を閉じたまま、布団の中から右手を出し、その右手を寝台の横へと勢いよく伸ばす。伸ばされた右手は、寝台のすぐ横の台の上に置かれている、空の花瓶を掴んだ。

「もうすぐ目え、覚めるぞおおー！」

「だああああー！」

「おっと」

瞳を閉じたまま、掴んだ花瓶を、力強くマルクの方へと投げ放つ少女。マルクが背中をそり返して、何とか花瓶を避けると、マルクを通り過ぎた花瓶を、ラピスラズが見事に掴み止める。

「どんな寝相してるんだよ、一体！」

「んん？」

予告の言葉通りに、その銀灰色の瞳を大きく開いた少女が、開いたばかりの目を擦りながら、寝台の上でゆっくりと起き上がり、怒鳴っているマルクを戸惑うように見つめる。寝起きだからか、その瞳はまだ虚ろで、先程のような力強さはない。

「ああ、すまない。その辺りにある物を投げながら、目覚め予告をするのが、私の癖で……」

「どんな癖だよ」

「ん？ そなた……」

「はっ！」

少女からゆっくりとした視線を向けられたマルクが、どこか焦ったように身構える。

「べ、別に俺たち、怪しい奴じゃないからな！」

「そう言う人ほど、怪しいんですよね」

「うるさい！ 余計なこと、言うな！」

少女へと弁明するマルクが、茶々を入れるラピスラズに、強く怒鳴り返す。

「お前に危害とか加えるつもりないから！ だからもう、魔炎とか使うなよ！？ ってか、使ったら、またお前、倒れちゃうかもだし！」

弁明しながらも、少女の体を気遣うような発言をするマルク。必死に言葉を続けるマルクの様子を見て、少女がそっと、口元を緩める。

「ああ、わかった」

「へ？」

笑顔を見せ、そつと頷く少女に、マルクが戸惑うように首を傾げる。

「そなたが、悪意ある者でないことは、わかった。先程は、私の早とちりで、そなたを攻撃して、すまなかった」

「そ、そうか」

少女の言葉に、マルクが安心したように肩を落とす。誤解が解けたのであれば、もう魔炎で攻撃される心配もないだろう。

「ここは？」

「我々の屋敷です。魔炎を使って倒れられたあなたを、マルク様がお運びしたのですよ」

「そうか。重ね重ね、すまない」

「あ、いやっ」

深々と頭を下げる少女に、マルクがどこか慌てた様子で、首を横に振る。いきなり魔炎で攻撃されたため、少女は気性の荒い性格なのだとはかり思っていたが、素直に頭を下げるところを見ると、そうでもないようである。

「俺はマルク・クラウド。で、こっちがラピスラズ。お前は？」

「私はルビィネル」

「ルビィネル」

自分の中で確かめるように、マルクがその名を繰り返す。

「ルビィネル様は、随分とお疲れだったようですね。魔炎一発で、倒れられてしまうなんて」

「ああ。道がわからなくて、三日間ずっと、飲まず食わずで、迷い歩いていたからな」

「そりゃ、倒れるわ」

ルビィネルの言葉に、マルクがどこか呆れた様子で肩を落とす。

「それでこの西側にいらしたんですね。魔女の方がこちら側に居るなんて珍しいと、先程もマルク様と話していたのですよ」

「西側？」

微笑みかけたラピスラズに、ルビィネルが戸惑った表情を見せる。

「何だ？ 西側というのは」

「へ？」

問いかけるルビィネルに、目を丸くするラピスラズ。レイヤに住んでいる者であれば、魔族であれ、人間であれ、東西で町が分離され、それぞれの種族で住む場所が決まっていることなど、知っていて当然のはずである。

「あの、失礼ですが、ルビィネル様は、どちらから……？」

「フレイヤだ」

「隣の国じゃないか！ どれだけ迷ってたんだよ！」

ルビィネルの答えを聞き、マルクが思わず大きな声をあげる。フレイヤは、レイヤの隣にある、魔族のみが暮らす、レイヤよりも五倍ほど大きな国である。フレイヤとレイヤの間には、大きな山脈があり、その山を越えなければ、レイヤ側にはやって来れない。

「ここはレイヤの西側、人間たちの住む領域、ヤールです」

「ヤール……」

ラピスラズの解説を聞いたルビィネルが、少し考えるように首を捻る。

「つたく、どんな旅して来てんだよ」

「ここはレイヤなのだろう？ 私はレイヤに用があつて来たのだから、私の進んだ道は正しかったではないか」

「だからって、フレイヤからなら、火車かしゃとか、炎列車えんれっしやとか、色々と移動手段があつただろうが！」

「公共のものを使えば、見つかるだろう」

「誰に？」

「う……」

率直に問いかけるマルクに、ルビィネルが眉をひそめ、言葉を詰まらせる。

「何でもない」

「はあ？」

大きく首を横へと向け、マルクたちから視線を逸らすルビィネル。

誤魔化したつもりだろうが、まったく誤魔化せてはいない。顔をしかめるマルクの後ろで、ラピスラズが訝しむように、そつと目を細める。

「何か、温かい飲み物でももって来ましようかね。軽い食事も」

「ああ、ごめん。頼む」

「その間に、ルビィネル様に変なことをしてはダメですよ？ マルク様」

「しないよ！」

客間に流れる気まずい空気を感じ取ってか、ラピスラズが提案するように言う。マルクの怒鳴り声に送られるようにして、ラピスラズは、足早に客間を後にした。部屋にはマルクとルビィネルだけが、残される。

「ええーっと……」

二人きりになると、マルクが何を話そうかと、戸惑いながら、言葉を探す。

「なんで、三日も彷徨い歩いて、わざわざ、レイヤに来たんだ？」

「夢を叶えるためだ」

「夢？」

「ああ」

聞き返したマルクに、ルビィネルは、晴れやかな笑顔で頷いた。

「私は、“<sup>さいえん</sup>彩炎の魔女”になる」

「……っ」

そのルビィネルの言葉に、驚いた様子で、大きく目を見開くマルク。

「彩炎の、魔女？」

「ああ」

この世で一番の魔女に与えられる称号、“彩炎の魔女”。あらゆる炎を宿す魔女たちの、頂点に立つ魔女であるからと、その名が付けられた。レイール聖魔院に通う魔女は勿論、すべての魔女が目指すもの名である。だが、その称号を与えられる魔女自体が、百年

に一度、現れれば奇跡とされているので、目指すものと言うよりは、伝説に近い存在であった。

「私は彩炎の魔女となって、聖地マフレイヤに行く」

「聖地マフレイヤ……」

「ああ。すべての炎が生まれたとされる、この世界の始まりの場所だ」

繰り返したマルクに、説明するように言葉を続けるルビィネル。

「数多い魔族の中でも、彩炎の魔女と、そのパートナーだけが、足を踏み入れることを許されているという、禁断の聖地で……」

「知ってる」

「え？」

言葉を途中で遮るマルクに、ルビィネルが、不思議そうに首を傾げる。

「マフレイヤ、か」

その聖地の名を繰り返し、マルクがそっと、目を細める。

「コーラル！ 俺、大きくなったら、マフレイヤに行くんだ！」

それは素敵な夢ですね、マルク……

思い出される、幼い頃の自身の姿。

「俺も、行ってみたかったな……」

「え？」

マルクの小さな呟きを耳に入れ、ルビィネルが、戸惑うようにマルクへと視線を送る。

「しかし、随分と壮大な夢だなあ。彩炎の魔女に、聖地マフレイヤって」

「私が決めた夢だ」

どこか遠くを見つめるような表情を一転させ、明るく微笑んだマルクが、まるで茶化するようにルビィネルへと言葉を掛ける。すると

ルビィネルは、少し怒ったように口を尖らせ、はつきりとした口調で主張した。

「どんなに壮大であっても、私が叶える」

何の迷いもなく言い放つルビィネルを見て、マルクは何か眩しいものでも見るように、目を細める。

「そつか。じゃあ、頑張れよ」

そつと微笑むマルクの表情に、ルビィネルの夢を馬鹿にした様子はなかったが、どこか切なさのようなものが漂っていた。そのマルクの表情を見て、ルビィネルが少し眉をひそめる。

「そなた……」

「マルク様ー！ 扉を開けて下さーい！」

「へえへえ」

ルビィネルが何かを言う前に、マルクはルビィネルへと背を向け、客間の扉の方へと歩いていった。マルクが扉を開けると、料理やら飲み物に乗せたトレーを両手に、ラピスラズが再び姿を現す。

「さあ、ルビィネル様。遠慮なく、召し上がって下さいね」

「あ、ああ。すまない」

「ラピスは、料理の腕だけはいいから、味は保証するよ」

「“だけ”は余計ですよ。マルク様」

あれこれと言葉を交わすマルクとラピスラズを見つめながら、ルビィネルはどこか、考え込むような表情を見せていた。

翌日、レイール聖魔院。

「お！ 珍しく、もう来てんじゃ〜ん」

朝一番の講義の教室で、一人、座っていたマルクのもとへと、明るく歩み寄って来たのは、ポンドであった。何の悩みもなさそうな明るい笑みを浮かべて、ポンドが自然と、マルクの横の席に座る。

「いつつも、遅刻ギリギリのくせによ」

「今日は、ちよつとな」

ポンドの言葉に、マルクが疲れたように肩を落とす。昨日出会った魔女、ルビィネルは、今朝、ラピスラズが目を覚ました時にはすでに、客間から姿を消していた。ラピスラズに起こされ、そのことを知らされたマルクは、まだ日も昇らぬ内から、近くの山の中を探したのだが、結局、ルビィネルを見つけることは出来なかった。ルビィネルが、マルクの屋敷に留まる理由もないので、恐らく、出て行ったのだろう。引き止める義理はないが、助けたり、食事を振る舞ったりしたのだから、挨拶の一つくらい、あっても良かったのではと思う。

「結局、何だったんだろ……」

「ああ？」

「何でもない」

ポンドに話す気力すらなく、マルクが机の上に突っ伏す。

「よお、お前等。聞いたかあ？」

「んあ？」

そこへ、別の魔士の青年が、マルクとポンドのもとへとやって来る。

「今日、魔女科の赤炎クラスせきえんに、新しい魔女が入るんだってよ！」

青年の言葉に、マルクが突っ伏していた顔を、ゆっくりと上げていく。

「ふうーん。別に新しい魔女なんて、ちよくちよく入って来てんだろ」

「それが、今回の魔女は別物なんだって！ フレイヤの聖魔院からの編入らしいぜ！？」

特に興味なさそうに答えたポンドに、青年は、熱い口調で言葉を続ける。

「フレイヤ？ フレイヤからなんで、わざわざ、格下のレイールの魔院なんか」

「だから珍しいんじゃない！ フレイヤ出身の魔女なんて、エリートだろ！？ この聖魔院に通ってる魔女たちとじゃあ、天と地ほどの差があるぜ！」

「おっ前、そのうち、その辺の魔女に刺されるぞ？」

興奮気味に話す青年に、ポンドが呆れた視線を向ける。

「まあ、あのシリング・ウエーガットのパートナーにするために、わざわざ、フレイヤから呼び込んだって噂もあんだけどなあ」

「あああ、それなら納得。最上級魔士様は、何でも特別扱いだもんな」

二人の会話を聞きながら、マルクが昨日見かけたシリングの姿を思い出し、そつと目を細める。

「いいよなあ、最上級魔士様は。俺だって、エリート魔女のお近付きになりてえぜ」

「お前じゃ無理じゃね？」

「んだよ、冷てえなあ。お前も、エリート魔女のお近付きになりてえとか、思わねえの？」

「思わねえよ。俺、パートナーにする魔女はたった一人、心に決めてんだもん」

「また、それがよ」

心を示しているのか、左胸を指差すポンドに、青年は呆れたように肩を落とす。

「なあ、マルクは……！ って、まあ、マルクは思わねえか。最下級

魔士とは、無縁の話だもんな」

「放つとけ」

その言葉に、マルクが顔をしかめる。遠い話すぎるためか、ルビイネルのことが気になっていたからか、馬鹿にしたような笑みを浮かべる青年にも、不思議と、腹は立たなかった。

「まあ確かに、無縁の話だなあ」

まるで興味を持っていない様子で、マルクがそっと、呟いた。

朝一からは眠気が相当にきつい、魔炎基礎学という堅苦しい授業を終えると、マルクはポンドと共に、教室を出た。

「次、魔炎の実技演習だけど、どうする？」

「どうするって、パートナーいない俺たちじゃ、実技授業に出たって意味ないだろ」

「だよなあ」

マルクの言葉に、ポンドが軽い笑みを浮かべて頷く。

「ああー、昼まで暇時間かあ。もういつそ、帰っちゃまう？」

「いや、今日は午後には、マフレイヤ概論があるから居る」

マルクの答えに、ポンドが目を丸くした後、困ったように笑う。

「相変わらず好きだねえ、“聖地マフレイヤ”」

「最下級魔士だって、憧れんのは自由だろ」

「そりゃそうさ」

廊下を進みながら、言葉を交わすマルクとポンド。少し拗ねたように口を尖らせるマルクに、ポンドはそっと笑みを向ける。

「お前も一途だねえ。俺と一緒に」

「ポンドと一緒にされたら、俺の一途の価値が下がる」

「酷でえなあ。俺、結構、一途くんよお？」

「はいはい……って、うわー！」

「キヤっ！」

ポンドの言葉を軽くあしらいながら、マルクが廊下の曲がり角を曲がったその時、曲がり角の向こう側から歩いて来た者と、思いきりぶつかってしまった。高い声の悲鳴と共に、マルクのぶつかった人物が、その場に尻もちをつく。

「あつ、ごめん！ 大丈夫でっ……！うっ……」

慌てて、座り込んだその人物へと声を掛けようとしたマルクであったが、その人物の顔を見て、思わず言葉を止めてしまう。

「大丈夫！？ トーパー！」  
「痛たあ〜い！」

一緒に歩いていたのでろう、明るい色の洋服に身を包んだ魔女たちに声を掛けられながら、甘えたような声をあげたのは、長い金色の髪に、青色の瞳の、美しい少女。それは昨日、マルクを、“ブタとパートナーになったほうがマシ”と言つて、こっぴどく振り払った魔女であった。

「もう、どこ見て歩いて……！つて、あんた……」

顔を上げたその魔女、トーパーも、昨日振ったばかりのマルクに気付いたのでろう。その美しい表情を、見る見るうちに歪めていく。「何？ また性懲りもなく、パートナーにしてくれとか、言いに来たわけ？」

立ち上がりながら、大きく顔をしかめ、トーパーが非難するようにマルクを見る。

「俺はっ……」

「あのねえ、俺たちはただ、廊下を歩いてただけ。変な言いばかりは、よしてよね」

主張しようとしたマルクを庇うように、ポンドが一步前へと出てトーパーへと強い口調で言い放つ。

「だいたい、自分がそんなに、追いかけるほど、いい魔女だと思ってるわけ？ 思い上がり、きついんじゃない？」

「んな！？」

「ちよ、ポンド……！」

挑発するような言動を取るポンドに、思いきり表情を引きつるトウーパと、焦ったようにポンドの方を振り向くマルク。

「ケンカ売って、どうすんだよ！」

「だって俺、ああいうタイプ、一番嫌いだし！」

注意するように言い放つマルクに、まるで反省した様子なくポンドが答える。揉め事を嗅ぎつけてか、近くの教室から、魔女や魔士やらが続々と、廊下を覗き込み始めていた。

「マルク？」

教室の一つから、他の魔女と共に、アメジエスも顔を出す。

「ん……？」

「あらあ？ あれ、何の騒ぎかしらねえ？ シリングくん」

今日も魔女たちに囲まれ、廊下を歩いてきた最上級魔士、シリングも、マルクたちの様子に気付き、その場で足を止める。

「何よ……！」

マルクとポンドが言葉を交わす中、険しい表情を見せたトウーパが、先程までよりも低い声を発する。

「あんななんてねえ、この魔院の魔女、全員の笑いや者なのよ！？」

物凄い剣幕で、捲し立てるように叫び、マルクを睨みつけるトウーパ。

「何の才能もない、最下級魔士！ あんたにパートナー申し込まれたって、皆で笑ってんの！ パートナーになんか、なってやるはずがないのにつてー！」

トウーパの容赦ない言葉に、マルクが厳しい表情で、眉をひそめる。

「そりゃ、そうよね！ あんたなんかとパートナーになったら、その時点で、魔女人生、終わりだもの！」

どんどんと向けられる言葉に、言い返すことも出来ずに、ただ拳を握り締め、きつく唇を噛み締めて、徐々に俯いていくマルク。

「あんたみたいな最下級のパートナーになる魔女なんて、この魔院のどこにも居ないわ！ いい加減、諦めて、とっとと魔院を出てっ

てくんない!？」

多くの者が注目する廊下に、トゥーパの甲高い声が響き渡る。

「うっわぁ」

「何もあそこまで……」

トゥーパとマルクの様子を見つめていた魔女たちから、トゥーパを非難するような声が漏れる。その中で、一際険しい表情を見せたアメジエスが、マルクたちのもとへ行こうと、教室の出口へと向かう。

「え?」

教室を出て行こうとしたアメジエスが、目の前を横切っていく姿に、言葉を止めて、目を奪われる。

「あんだねえ」

表立ってはあまり表情を変えていないが、纏う雰囲気からは、確かに怒りを感じさせるポンドが、さらに前へと出て、トゥーパと距離を縮めようとする。

「いい加減にっ……」

「少し、退いていてくれるか」

「へ?」

前へと出て行こうとしたポンドの肩を掴み、後ろへとさがらせ、代わりにマルクのすぐ横へと出て行く人物。振り返ったポンドが、自分の代わりに前へと出て行く人物を、戸惑うように見つめる。そして、マルクもまた、その人物を見て、驚きの表情を見せた。

「お前……!」

マルクの横に立った、長い赤髪の少女が、そつと微笑む。

「ルビィネル!？」

そこに現れたのは、昨日出会い、今朝、屋敷から姿を消した、ルビィネルであった。微笑みかけるルビィネルとは対照的に、マルクはわけがわからないといった様子で、ただ戸惑いの視線を、ルビィネルへと向ける。

「な、なんで、お前が」

「あんだ、確か、今日来たっていう、フレイヤの……」

「フレイヤ？　じゃあルビィネルが、編入してきたっていう……」

トウーパもどうやら、ルビィネルを知っている様子で、戸惑いの視線を送る。

「そなた、名はマルク・クラウドでよかったか？」

「へ？　なんで今、名前なんて」

「いいから、答えろ」

「そ、そうだよ。マルク。マルク・クラウド」

今、聞かなくてもいいこととは思うがと、考えを巡らせながらも、答えないわけにもいかず、マルクが気まずい表情のまま、渋々名を名乗る。

「マルク・クラウドだな。よし」

「へ？　つて、痛つてええ！」

マルクの名を確認し、満足した様子で頷いたルビィネルが、何の前振りもなく、突然、その拳を突き上げ、マルクの顎下を、思いきり殴りつける。まさか、拳が向けられるなど、夢にも思っていないかったマルクは、口が開いたままだったところを殴られ、強く唇を噛み、大きくその表情を歪めた。噛んでしまったため、唇の端から、赤い血が流れる。

「いきなり、何す……!!」

「貰っぞ」

怒鳴りあげようとしたマルクの唇の端を、右手の親指で拭い、流れ落ちたマルクの血を、親指の表面へとつけるルビィネル。ルビィネルのその行動に、マルクが頬を少し、赤く染める。

「な、何を……」

マルクが戸惑うように見つめる中、ルビィネルが、左手の親指を自身の口元へと持っていく。ルビィネルが親指へと歯を立てると、親指から、マルクと同じ赤い血が流れた。ルビィネルが両手を交差させ、マルクとルビィネル、それぞれの血のついた両親指を、上下から、重ね合わせる。

「我が炎の神、マフルよ。今ここに、血と血の契約を行う」

「え……？」

ルビィネルの口から奏でられるその言葉に、驚いたように、目を見開くマルク。

「汝の偉大なる炎により、我が身に宿りし赤炎を、我が選びし者に託せ」

「あれって……」

「魔唱？」

廊下に凜として、響き渡るルビィネルの声を聞きながら、マルクとルビィネルの様子を、ポンドやアメジェスも、戸惑った表情で見守る。

「ちょ、ちょっと待てよ！ その魔唱って……！」

「今、ここに、我がパートナーを決する！」

マルクが慌てて声を出すにも関わらず、ルビィネルは言葉を続け、そして、胸の前で重ね合わせていた両手を、高らかと天井へ突き上げた。

「その者の名は、マルク・クラウド！」

ルビィネルが誇らしく、マルクの名を叫びあげると同時に、天井へと突き上げられたルビィネルの両手から、真っ赤な炎のような、強い光が飛び出した。あまりに強い輝きに、見守っていた者たち全員が、思わず目を伏せる。ルビィネルの両手から飛び出した光は、天井のすぐ下で二つに分かれ、マルクとルビィネルの方へと、それぞれ降り落ちた。

「熱ち！」

降り落ちた光が、右手の甲を直撃し、マルクが思わず声をあげる。あまりの熱さに、火傷でもしたのではないかと、マルクが目を開けた時には、先程までの強い光は収まっていた。そして、マルクの右手の甲には、火傷の痕はなかったが、円の中に十字架の描かれたような、黒い紋様が刻みこまれている。

「何だ？ これ」

「う、嘘、でしょ……?」

紋様に気を取られていたマルクが、正面を向くと、トゥーパが、どこか青ざめた表情で立っていた。

「パートナー、契約?」

驚きを隠せない様子のアメジエスが、茫然と呟く。

「しかも今の魔唱は、“本結”<sup>ほんけつ</sup>の契約だぞ」

「本結?」

同じく啞然とした様子のポンドの声に、マルクが振り返りながら、首を傾げる。

「魔女試験の為とか、そういう期間限定のパートナー契約が“偽結”<sup>ぎけつ</sup>。逆に、一切期間のない、どちらかが死ぬまで続く、血と血で結ぶパートナー契約が“本結”」

「どっちかが、死ぬまで……?」

ポンドの解説を受け、マルクがその表情を青ざめさせる。

「本、結……」

マルクがやつと事態を呑み込み、険しい表情となる。目の前に立つトゥーパが、こんなに青ざめた表情をしているのは、恐らく、本結の契約であることが、わかっていたからなのだろう。

「ちよ、ちよつと! お前、何やって……!」

「しよ、正気!? あんた、フレイヤから来た魔女でしょ!? 最

下級魔士なんかと、本結の契約なんて……!」

「これで、マルクが魔院を辞める必要はないな」

問いかけようとしたマルクの声を、勢いよく遮るトゥーパ。契約を行った本人以上に、慌てふためいているトゥーパに、ルビィネルは、一切焦った様子なく、穏やかに微笑みかける。

「今後は、私のパートナーを、最下級などと言って、笑い者にするのは止めてくれ。頼むぞ」

余裕たつぷりに微笑むと、ルビィネルはトゥーパから視線を逸らし、未だ、茫然としているマルクと向き直った。

「では、行こうか。マルク」

「え？ あっ」

「“移り火”」

ルビィネルが左手で、マルクの右手を取ると、二人の周囲を赤い炎が包み、一瞬にして、二人の姿を掻き消した。二人が居なくなり、静まり返った廊下で、トウーパが、力なく座り込む。

「こりゃ、困ったことになったもんだな」

腕を組んだポンドは、少し楽しげに微笑む。

「……………」

一連の出来事を見つめたシリングは、どこか厳しい表情で、目を細めた。

自分の体を真っ赤な炎が包んだが、まるで熱さはなく、炎が消えたと思うと、そこはもう、魔院の廊下ではなく、屋外であった。何度か見回していると、見覚えのある場所であることに気付く。そこは、魔院の建物の一つの、屋上であった。広い屋上の中心に、マルクとルビィネルが、手を繋いだ状態で立っている。

「あ、あれ？ 俺……」

「移動の炎、“移り火”。魔炎の一種だ」

「お前、また魔炎使って……！ あっ」

解説するように言うルビィネルに、言い返そうとしたマルクが、まだ繋いだままの手に気付き、少し頬を赤らめて、慌ててルビィネルの左手を振り払う。自分の右手と、振り払ったルビィネルの左手の甲に、同じ黒い紋様があることに気付き、マルクは眉をひそめた。「これって……」

「“本結”のパートナー契約の証、“魔紋”だ」

紋様を見つめるマルクに気付き、ルビィネルが自身の左手の甲に刻まれた紋様を見せるようにしながら、マルクへと説明の言葉を投げかける。

「魔紋の刻まれた同士の手を重ね合わせれば、魔唱なしに、炎を共有することが出来る。つまり、先程の“移り火”は、私ではなく、そなたが使ったのだ」

「俺が、魔炎を？」

「ああ。これが本結の契約だ」

「本、結……」

ルビィネルの口から放たれるその言葉に、一気に険しい表情となるマルク。先程のルビィネルとのやりとりや、ポンドの言葉は、すべて現実で、マルクが夢を見ていたとか、そうだったわけではないようである。

「マジ、かよ……」

マルクが、魔紋の刻まれた右手で、頭を抱える。

「なんでっ……なんで、俺とパートナー契約なんか、したんだよ！？」

顔を上げたマルクが、まるで責めるように、ルビィネルへと怒鳴りあげる。

「へ？」

「へ」じゃない！

惚けたような声を出すルビィネルに、マルクがさらに声を荒げる。

「もし、昨日のことで恩とか感じて、それで契約したっていうんなら……！」

「心配するな。そこまで恩に感じていない」

「それはそれで、どうだろ……」

あっさりと答えるルビィネルに、引きつった表情を見せるマルク。

「そなたは魔士で、パートナーとなってくれる魔女を探していた。私は魔女で、パートナーとなってくれる魔士を探していた。だから契約した。何か、問題があるか？」

「大有りだ、馬鹿野郎！ さっき、会話聞いてなかったのか！？」

俺は……！！

「最下級魔士」

ルビィネルが発した自分の呼び名に、マルクが思わず表情をしかめ、言葉を詰まらせる。

「そうだよ。俺は、最下級魔士なんだっ……」

ルビィネルから視線を逸らし、深く俯いたマルクが、苦々しく言葉を落とす。不名誉極まりない呼び名ではあったが、その呼び名は事実であった。

「魔士試験だつて、試験官のミスで合格しちゃっただけだし、魔女九十九人にパートナー断られて、魔院皆の、笑い者、で……」

徐々に勢いのなくなっていくマルクの言葉を聞きながら、ルビィネルがそっと目を細める。

「だったら何だ？」

「何だじゃないよ！ お前、彩炎の魔女になるんだろ！？ 聖地マフレイヤに行くんだろ！？ だったら何で、俺と本結の契約なんかしたんだよ！」

大したことではないと言わんばかりのルビィネルに、マルクは再び顔を上げ、畳み掛けるように、次々と言葉を発していく。必死に叫ぶマルクを、ルビィネルは真剣な表情で、まっすぐに見つめていた。

「俺とパートナーになったりなんかしたら、お前の夢が……！」

「叶わないとでも、言いたいのか？」

遮るルビィネルの声に、マルクが言葉を止める。

「そうだよ。俺みたいなの最下級魔士とパートナー組んで、彩炎の魔女になんか、なれるはず……！」

「何故、そう決めつける？」

またマルクの言葉を遮ったルビィネルが、強い視線を、マルクへと向ける。

「何故、踏み出してもいないのに、その足を止めようとする？」

荒々しくはない、落ち着いた声だが、その言葉はまるで、マルクを責め立てているようであった。

「何故、夢見てもいないのに、諦めるようなことを言う？」

ルビィネルの銀灰の瞳が、マルクの瞳を突き刺す。

「何故、目指してもいないのに、“行ってみたかった”などと言うのだ？ そなたは」

「あつ……」

俺も、行ってみたかったな……

それは、昨日、聖地マフレイヤに行くと言ったルビィネルの前に、マルクが漏らした言葉であった。

「それは……」

答えとなる言葉を見つけることが出来ずに、そつと俯くマルク。

マルクは、子供の頃から、聖地マフレイヤに憧れていた。すべての炎が生まれたとされる始まりの場所を、いつか、自分の目で見てみたいと思っていた。だがずっと、思っているだけで、それを目指しはしなかった。行けるはずがないと、子供ながらにすでに、決めつけていたからである。ルビィネルの言った通りであった自分に気付き、マルクがどこか悔いるように、強く唇を噛み締め、拳を握り締める。

「そう、だね。目指してもないのに、“行ってみたかった”とか、言う資格ないよな……」

力なく呟くマルクを見つめ、目を細めたルビィネルは、静かに魔紋の入った左手を伸ばし、きつく握り締められたマルクの右手を取った。

「なら、今から、目指せばいい」

「へ？」

力強く右手を掴まれ、マルクが戸惑うように顔を上げる。

「今から、その足を踏み出せばいい。今から、夢を見ればいい」

ルビィネルが口元を緩め、大きく微笑む。

「私が、そなたの夢も、一緒に叶えてやる」

何の迷いもない、晴れやかな笑みを、ルビィネルが、マルクへと向ける。

「私と共に、マフレイヤに行こう！ マルク・クラウド！」

「……！」

天高く、空まで響き渡るほどの大声は、まるで誓いのようで、その言葉を向けられたマルクはただ、驚きの表情で、目の前のルビィネルの見つめることしか出来なかった。

「そ、そんな、ことっ……」

「というか、もう本結の契約をってしまったんだ。そなたに残された道は、共に目指すか、ここで死ぬか、の二択だ」

「へ？」

戸惑う間もなく、ルビィネルから突き付けられる現実。

「な、何だよ！ それええええ！」

マルクの大きな声が、屋上から、青々とした空へと、響き渡った。

百人目の魔女がくれた契約が、マルクのこれからの人生を、大きく変えることは、言うまでもない。

レイール聖魔院、院長室。

「随分と、軽率な真似をしたものですね」

感心した口調で話しつつも、その表情はどこか呆れたような様子の、一人の白髪の老人。魔士たちの制服と似たような法衣を纏ったその老人が、机に両肘をついたまま、ゆっくりと顔を上げ、前方に立つ人物へと視線を送る。

「ルビィネル殿」

院長室の中央に、堂々と立っているのは、ルビィネルであった。

院長室には、その老人とルビィネルの姿しかない。聖魔院のトップである院長を前にしているというのに、ルビィネルにかしこまった様子はなく、どちらかというところ、院長の方がかしこまっているように見える。

「今回の編入は、あくまで社会勉強の一貫。パートナーを組むことは厳禁、というのが条件だったはずですよ」

院長が鋭い視線を投げかけるが、ルビィネルはまったく表情を変えずに、飄々としている。

「それを、初日から早速、しかも本結でパートナー契約を行ってしまつとは……」

「仕方ないだろう？ 魔女に罵られている、可哀想な魔士を、見て見ぬ振りなど出来なかつたのだから」

ルビィネルの白々しい言葉を聞き、院長が深々と息を吐く。

「もし、これが、フレイヤ側に知れたら……」

「ああ」

大きく頷いたルビィネルが、どこか怪しげな笑みを浮かべる。

「だから、知れないよう、くれぐれもよろしく頼むぞ。院長」

不敵なその笑みを院長へと向け、魔紋の入った左手を軽く振り上げると、ルビィネルはあっさりと院長に背を向け、院長室を後にし

た。ルビィネルが去り、扉が閉まると、院長が再び、深く息を吐く。「よろしいのですか？」

どこからともなく現れた、院長と同じ法衣を纏った眼鏡の女性が、院長へと問いかける。

「構わん」

女性の問いに、院長は手短に答える。

「パートナーは、あの最下級魔士だ。いくら、あの魔女でも、何も出来まい」

目を細めた院長は、どこか冷たく言い放った。

レイール聖魔院、第五演習室。

「だつから何度、言わせんだ！ てめえはあ！」

勉強の場であるはずの演習室に、荒々しい怒鳴り声が響き渡る。

「“放出”をやれつつつてんだよ、“放出”を！ こうポンっと、炎を前に飛ばすやつ！」

「だから、それが出来ないって言ってるだろ！？」

演習室の中央で、他の魔士や魔女たちに呆れた視線を向けられながら、怒鳴り合っているのは、マルクと、もう一人。紫がかった黒色の短髪に、鋭い青色の瞳をした、妙に目つきも柄も悪い男であった。三十代半ば頃であろうか。魔士の制服は着ておらず、全身黒一色のシンプルな服装をしている。

「放出も出来ねえって、どういうことだあ！？ 魔炎操作の基礎になる、六つの炎技えんぎの中でも、一番簡単な技だぞ！？」

「出来ないもんは、出来ないんだから、仕方ないだろ！？ だいたい、それを教えるのが、講師の務めだろうが！」

「んな簡単な技はなあ、養成学校で習ってくるのが当たり前なんだよ！ 特別手当出せ、コラア！」

「出せるかあ！」

「んだとお!？」

徐々に熱さを増していく怒鳴り合いに、周囲から向けられる視線は、徐々に冷めていく。

「はあ」

二人から少し離れた地面に、しゃがみ込んだルビィネルは、他の魔士や魔女同様、怒鳴り合いを続ける二人に、呆れた視線を送っていた。

「相変わらずみたいだねえ」

すぐ横から聞こえてくる声に、ルビィネルが顔を上げる。

「よっ」

「そなたは、確か」

「ポンド・アラールネル。マルクとは、養成学校時代からの、無二の親友! よろしくね、ルビィネルちゃん」

馴れ馴れしい口調で、ルビィネルへと軽い笑みを浮かべながら、ルビィネルのすぐ横へと座り込んだのは、ポンドであった。

「そなたはまだ、パートナーがいないのだろうか? 魔炎操作の講義には、出る必要はないのでは?」

「まあそうなんだけど、暇してるよりは、最下級魔士くんの奮闘振りを見学しようかと思ってね」

ルビィネルの問いかけに答えながら、ポンドが、未だ、怒鳴り合いを続けているマルクの方へと視線を向ける。マルクが突然、ルビィネルのパートナーとなったのは三日前。色々と問題はああるが、とりあえずパートナーの魔女を得ることが出来たマルクは、パートナーがいなければ参加出来なかった、魔炎操作の実技講習に、参加し始めたのだった。だが、マルクの最下級魔士としての実力は偽りなく、毎日、担当講師を怒り狂わせているのである。

「しかし、放出も出来ないとは」

「予想を上回る最下級ぶりっしょ? うちのマルクくんは」

呆れを通り越したのか、感心するように言うルビィネルに、ポンドがどこか得意げに微笑みかける。

「あんたも凄い奴、パートナーにしちゃったねえ」

「まあ、じっくり進めばいいさ」

「進めばいいけどねえ」

「どう？ マルクは相変わらず？」

「おっ」

ルビィネルとポンドが言葉を交わしていると、そこにアメジエスが姿を現した。

「お前も見学かあ？ アメジエス」

「まあね」

「つてか、この講義、見学者多くね？」

後方を見回しながら、ポンドがポツリと呟く。二人の怒鳴り合いを見つめている者たちは、主に講義に参加している魔士と魔女だが、その他にも、講義には参加していない、魔女の集団や、魔士単独の者たちも多い。関係のない者がこれほど集まるのは、他の講義ではないことだ。

「パートナーの成り方が成り方だったから、注目を集めてるんじゃない？ ただでさえ、話題の二人だし」

「まあ、最下級魔士とフレイヤからの編入魔女だもんな」

アメジエスの言葉に、ポンドが納得した様子で頷く。ポンドからルビィネルへと視線を動かしたアメジエスが、ルビィネルへと右手を差し出す。

「自己紹介、まだだったわよね。私、魔女科の紫炎しえんクラスのアメジエス。マルクやポンドとは、昔からの知り合いなの」

「赤炎せきえんクラスに入ったルビィネルだ。よろしく」

ルビィネルとアメジエスが、互いに笑みを浮かべ、握手を交わす。随分と困らせてるみたいね、あのブラッドス先生を」

アメジエスが、マルクと怒鳴り合っている講師の方を見ながら、感心したように呟く。

「まあ、魔炎操作の一流の使い手からしたら、放出も使えないマルクは、特殊生命体に見えるだろうな」

「一流の使い手？」

「ええ。このレイール聖魔院でも、トップクラスの魔炎の使い手よ」  
「では、あの者は魔族なのか」

マルクの前に立つブラッドスを見つめ、ルビィネルが少し目を細める。

「あまり、魔族らしくないな」

「確かに。ブラッドス先生って何か、ちょっと人間的だもんな」

「人間的というより、感情的でしょ」

大きく頷くポンドの横で、アメジエスはあまり興味のない表情を見せる。

「どうせ、俺なんか一生、放出使えないんだよお！ この講義に出る資格もないんだよお、俺なんてえ！」

「あ、ネガティブスイッチ入った」

頭を抱え、叫び散らしているマルクを見て、ポンドが慣れた様子で言う。

「ああーウゼ。おい、こいつのパートナー！ 何とかしろ！」

マルクと怒鳴り合っていた、目つきも柄も悪いブラッドスが、ルビィネルを呼ぶ。

「すまない」

「いいえ」

アメジエスに軽く謝ると、ルビィネルは立ち上がり、マルクとブラッドスのもとへと足早に歩いていく。

「お前、んな無能、パートナーにして、ナメてんのかあ！？」

「どうせ、俺なんか無能なんだあ！」

「無能の方が、伸びしろがあるだろう？」

「俺なんか、一生、無能なんだよおお！」

ルビィネルが加わっても、怒鳴り声が止むことはなく、まだしばらく、講義は再開されそうにない。

「はあ、あ、やれやれだなあ」

呆れたように肩を落としながらも、楽しそうな笑みを零すポンド

の横で、アメジエスは目を細め、どこか険しい表情で、マルクたちの様子を見つめる。

「んな顔するくらいなら、とっととパートナーになってやっつけば良かったのに」

「え？」

横から入ってくるポンドの声に、アメジエスが少し驚いたような表情を見せる。アメジエスが振り向くと、ポンドは鋭い瞳でアメジエスを見ていた。

「誰にも取られないって、思ってた？ そんな余裕ぶっこいてるから、ぽっと出の魔女に持ってかれちゃったんだよ」

挑発するように言うポンドに、アメジエスがあからさまに、表情をしかめる。

「燃やすわよ……？」

「へえへえ、ごめんなさい」

声を低くし、脅すというよりは、本気の口調で言い放つアメジエスに、ポンドはあまり悪びれた様子なく、平謝りし、その場からさっと立ち上がる。

「さあーで、マルクもパートナーゲットしたことだし、俺も、俺が心に決めた魔女を、口説き落としてこよっかなあ〜」

両手を上げ、伸びをしながら、ポンドが軽い口調で言い放ち、演習室の出入口へと歩いて行く。遠ざかっていくポンドの背を、アメジエスは険しい表情のまま、見送った。やがて、ポンドが演習室から出ると、アメジエスが、マルクとルビィネルの方へと視線を戻す。「とにかく、放出が出来るようになるまで、俺の授業出んじやねえ！」

「それは、授業放棄なんじゃないのか？」

「どうせ俺なんか、授業する価値もねえ男なんだよお！」

まだ終わらない騒ぎの中、まだ頭を抱え、嘆いているマルクを見つめ、アメジエスが険しかった表情を落ち着かせ、少し目を細める。

「ねえ、今日も休み？ トウーパ」

背後から聞こえてくる魔女たちの会話に気付き、アメジエスが後方を振り返る。

「最近、ずつとじゃない？」

「よっぼど、堪えてんでしょ。あの二人が目の前で、本結契約しちゃったことが」

「トウーパの高いプライドが、ズツタズタって感じだったもんねえ」

「あの二人のこと、魔院中で話題になってるし、しばらくは講義、出てきにくいんじゃない？」

会話をしている魔女は、マルクがトウーパと衝突したあの日、トウーパと共に居た魔女たちだった。恐らくはいつも行動を共にしているのだろうが、トウーパ自身を心配している様子は特になく、噂話の一つのように、楽しげに話している。

「……っ」

魔女たちの会話を受け、アメジエスは何やら思うところがあるように、眉間に皺を寄せた。

「お前、聞いたか？ フレイヤからの編入魔女の話」

「ああ。陰険魔女に絡まれてた最下級魔士を、パートナーにしちまっただんだろ？ しかも本結で！」

「すっげえ思いきりだよなあ！ 俺、今日の講義、見に行っただぜ！」「いいなあ！ 俺も行けば良かった！」

魔院の中庭に行く魔士の制服を纏った者たちが、楽しげに会話をしている。先程から、通る者すべてが、マルクとルビィネルのことを、話題にしていると言ってもいい。魔士も魔女も関係なく、皆が二人に興味を示している。そんな皆の会話を、中庭の目立たぬ、端のベンチに一人、腰掛けたトウーパは、不快な表情で聞いていた。

「何よっ」

金色で彩られた美しい爪を伸ばした、真っ白な美しい右手を、トゥーパが、血管が浮き出るまで強く、握り締める。

「あんな奴等……」

これで、マルクが魔院を辞める必要はないな？

思い出される、勝ち誇ったようなルビィネルの笑みに、トゥーパがさらに拳を握り締め、唇を噛み締める。マルクとの本結により、嘲笑われるかと思つたルビィネルであつたが、皆の反応はむしろ良く、妙にルビィネルを英雄視した。そのお陰で、二人がパートナーとなるきっかけを作つたトゥーパは、すっかり悪者扱いされ、ルビィネルよりも嘲りの対象となつてしまつたのだ。周りの視線が痛く、講義に出ることも出来なくなつた、自分の現状を見つめ、トゥーパがまた、怒りを沸き上がらせる。

「何なのよ……！」

トゥーパが、握り締めた拳を振り上げ、強くベンチへと叩きつける。

「ストレスは、お肌の大敵ですよ？ 美しい魔女さん」

前方から降り落ちて来る声に、トゥーパが不快感いっぱい表情のまま、ゆっくりと顔を上げる。そこに立っていたのは、サラサラとした茶色の髪に、大きめの金色の瞳の、まだ若い青年であつた。魔士の制服を纏っている。青年は、満面の笑みを浮かべているわりに、少しも感情の伝わって来ない、不思議な雰囲気を持つていた。

「一介の魔士ごときが、慣れ慣れしく、私に話し掛けないで」

「やれやれ。本当に、気位の高い魔女さんだ」

睨みあげて言い放つトゥーパに、青年が困つたように肩を落とす。「どうして魔族つていう生き物は、こつも、無駄にプライドの高い方ばかりなんでしょうねえ。だから僕は、いつもいつも……」

「私、今、機嫌が悪いの」

長々と続きそうだった青年の言葉を、トゥーパが勢いよく遮る。

「燃やされなくなかったら、今すぐ、ここから消えて」

脅迫めいたトゥーパのその言葉を聞いて、青年は、怯えるどころか、どこか、満足げに微笑む。

「貴女のその、塔のように高いプライドを、傷つけた者たちが、許せないのでしょうか？」

試すように問いかける青年に、トゥーパの表情が、かすかに動く。「何が言いたいの……？」

答えを急ぐように問うトゥーパに、青年が口角を吊り上げる。

「貴女のその“憂さ晴らし”、このボクにぜひ、協力させてはいただけませんか？」

うかがうように問いかける青年の右手から、黒光りした体に、四枚の羽根の生えた、鋭い赤色の瞳の、怪しげな一匹の虫が飛び出した。

全講義、終了後。レイール聖魔院、大図書館。

「ううう〜ん……」

徐々に空も赤く染まり始めた夕暮れ時、マルクは一人、大図書館内の机に向かい、何やら分厚い本と、険しい表情で睨み合っていた。吹き抜け二階建ての図書館は、一階、二階、どちらにも机と椅子が並べられており、魔士や魔女が皆、本を手に、勉強を行っている。

「調べ物か？」

「へ？」

突然、話し掛けられ、マルクが本から目を離し、顔を上げる。すると、そこには、マルクが座る席のすぐ傍に立ち、マルクに微笑みかける、ルビィネルの姿があった。

「ルビィネル」

「“養成学校生のための、六つの炎技”？」

マルクの読んでいる本のタイトルを見たルビィネルが、戸惑うように眉をひそめる。

「ああ、養成学校の教科書。図書館に置いてあったから、読み直してみようかと思って」

ルビィネルに答えながら、マルクが少し苦い笑みを零す。

「随分と熱心なんだな。昼間、一生使えないんだと、嘆いていたわりに」

「嘆くのはもう、癖みたいなものなんだよ」

からかうように言うルビィネルに、拗ねるように口を尖らせるマルク。

「嘆くのは嘆くけど、でも、すぐに諦めずに、出来ることから少しずつ、やっていこうかと思って」

口元を緩めて、マルクが穏やかに笑う。

「せっかく、お前がチャンスくれたんだし」

微笑むマルクに、ルビィネルが少し、驚いたような表情を見せる。だが、すぐにその表情は緩み、ルビィネルはどこか、楽しげに微笑んだ。

「そなたは、単純だな」

「放つとけ！」

ルビィネルの言葉に、マルクが思わず怒鳴る。

「どうせ、俺は単純なんだよー。思考回路とか、三本くらいしか通ってねえんだよー」

視線を落としたマルクが、いじけるように呟く。そんなマルクを見て、ルビィネルがホツとしたような笑みを落とす。

「いや、三本も通ってないだろう」

「落ち込み中に、さらに凹ませるようなこと、言うな！」

確信めいて言い放つルビィネルに、マルクが強く言い返す。

「そついや、なんで、お前はここに？」

「共に帰ろうと思って、探していた。一人で帰ると、道に迷う可能性が高いからな」

「偉そうに言うなよ」

堂々と方向音痴宣言をしているルビィネルに、マルクが少し呆れた表情を見せる。

「けど、よく、俺がここに居るってわかったな。図書館なんて俺、初めて来たのに」

「そなたとは、魔紋で繋がっているからな。魔紋の波動を辿れば、居場所くらい、すぐにわかる」

「へえ、そりゃ便利だな」

右手の甲に刻まれた魔紋を見ながら、マルクが感心した様子で声を出す。

「じゃあ俺も、お前の居場所が感知出来るってこと？」

「ある程度の魔力がないと、波動は辿れないから、そなたにはまず無理だな」

「あ、そう……」

あつさりと言い放つルビィネルに、元気なく肩を落とすマルク。

「そうだ。マルク、ちよつと来い」

「え？」

マルクの腕を掴み、椅子から立ち上がらせるように、引つ張り上げるルビィネルに、マルクが戸惑った表情を浮かべる。

「な、何だよ？ 俺、今、勉強をつ……」

「教科書を読んでも理解出来なかったから、今、この状態なのだろう？」

マルクの言葉を退け、ルビィネルが得意げに微笑む。そのままルビィネルに強く、腕を引かれたため、マルクは机の上に、読んでいた本を放り投げた状態で、ルビィネルと共に、図書館を出た。講義が終わり、もうほとんど人通りのない中庭を進んで、各教室のある煉瓦の建物へと入る。廊下を突き進み、ルビィネルが向かった先は、昼間にブラッドスの講義を受けた、第五演習室であった。

「演習室なんか、何の用なんだ？」

「演習に決まっているだろう？」

不思議そうに問いかけたマルクに、当然のように答えたルビィネルが、掴んでいたマルクの腕を離し、マルクの右手へと、自身の左手を伸ばす。

「これは、前にも説明したな？ 魔紋の刻まれた同士の手を重ね合わせることで、契約の合図」

その言葉通りに、ルビィネルが、魔紋の刻まれた左手で、魔紋の刻まれたマルクの右手を握る。

「契約すれば、魔炎を共有出来るが、しばらくすれば共有の効果は途切れ、再度の契約が必要となる」

「しばらくって、どんくらい？」

「その時々だ」

「結構、曖昧なんだな」

正確さに欠けるルビィネルの問いに、少々、困った表情を見せるマルク。

「目醒めよ、我が赤炎」

ルビィネルが凜々しく言葉を発すると、発せられた途端に、マルクは、ルビィネルと重ね合わせている右手から、熱い、燃え上がるような何かが、伝わってくるように感じた。その熱感、皮膚の外側からではなく、内側から、まるで血液内を流れるように、伝わって来る。

「これが、私が魔炎を解放する際の魔唱。そして契約により、私の解放した魔炎は今、そなたと共有している状態だ」

ルビィネルが握った手を軽く上げ、目の高さのところまで持つていく。

「どうだ？ 何か感じるか？」

「んん、何かすっごいホツカホツカするものが、血が流れるみたいに、体中に広がってる感じがする」

「それが、私の魔炎だ」

マルクの答えを聞いたルビィネルが、そつと微笑む。

「これが、魔炎？」

「そうだ。もつとホカホカを意識してみる。そなたが魔炎を知ろうとすれば、やがて魔炎は、そなたの目に映る」

「魔炎を、知る……？」

ルビィネルの言葉に促され、マルクが体中を駆け巡る、その温かいものへと意識を集中させる。すると、最初は感覚だけであった温もりが、徐々にはつきりとしたものとして感じ取れ、やがて、マルクの体全体を包み込む、赤い光の帯のようなものが見え始めた。その光を見て、マルクが少し驚いたような表情を見せる。

「これが、魔炎？」

「ああ」

問いかけるマルクに、ルビィネルが大きく頷きかける。ルビィネルの周囲にも、マルクと同じように赤い光が見える。同じ光に包まれているということが、魔炎を共有しているということなのだろう。「すごい。本当に見えた」

「次は、放出だ」

「へ？ 放出？」

ルビィネルのその言葉に、マルクが目を丸くする。

「お前、もしかして、俺に放出を教えてくださいようとしてるのか？」

「それ以外の何に見えるのだ」

今頃気付いたマルクへと、呆れた視線を送るルビィネル。

「そなたのような単細胞生物には、教科書に書かれた内容を理解し、かつ、それを実行する能力など、初めから、備わっていない」

「ここ最近で一番、酷い悪口だわ」

ルビィネルのあまりの言いように、マルクは、怒鳴る気力も起きず、ただ呆れた表情を見せる。

「だから、感覚で覚える。いいか？ 今から、ここに魔炎を集中させる」

そう言つて、ルビィネルが、マルクの右手を握る、自身の左手を振り上げる。

「集中つて……うわ！」

マルクが言葉の意味を問う間もなく、二人の握り合った手のもとへ、二人の全身を包み込んでいた赤い光が集まっていく。集まった光は、その眩さを増し、直視しては目が潰れてしまいそうなほどに輝き始める。集まった光は、二人の手を包み、まるで炎のように揺らめき、燃え上がる。そして、集まったのは、光だけではなかった。「熱ちちちち！」

手を包む光から伝わって来る強い熱に、マルクが思わず声を上げ、その熱さから逃れようと、ルビィネルの手を離そうとする。だが、ルビィネルは強くマルクの手を握り締め、逃そうとしなかった。

「逃げるな！」

「逃げるよ！ このままじゃ、火傷するだろうが！」

強く言い放つルビィネルに対し、マルクも負けじと言い返す。

「魔炎を恐れる者に、魔炎は力を貸さぬ！ 魔炎を……」

ルビィネルが、燃え盛る炎越しに、まっすぐにマルクを見つめる。

「私を信じる！ マルク・クラウド！」

力強いその言葉に、逃げようとしていたマルクの手が止まる。逃げることを止めた途端、不思議と、熱さはなくなった。いや、伝わる熱感はそのままで、焼かれてしまうという恐怖がなくなったといった方が正しいかも知れない。

「それでいい」

落ち着いたマルクを見て、ルビィネルが満足げに笑う。

「手に魔炎を集中させたまま、狙いを定める」

ルビィネルが、持ち上げた左手を、マルクの右手ごと、前方へと突き出す。突き出した二人の手の前方には、演習で使われる、大きめの藁の人形が立っていた。恐らくはあれを、狙いとしているのだろう。ルビィネルが、その銀灰の瞳を、鋭く細める。

「狙いが定まったら、集めた魔炎を、一気に放つ！」

「うわ！」

突き出した手から、魔炎が放たれた瞬間、マルクの右手を、後ろへと押し出されるような感覚が襲った。マルクの右手を弾き、二人の手から飛び出した魔炎は、まっすぐに藁人形にぶつかり、一瞬にしてその姿を黒焦げにした。黒く焦げた藁が、細かく分解され、地面へと崩れ落ちたその光景を見つめ、マルクが啞然とした表情を見せる。

「す、凄い……」

「これが、放出だ」

ルビィネルはそう解説したが、今のそれは、マルクの知る放出ではなかった。養成学校時代の授業でも、昼間の講義でも、藁人形を一瞬にして燃やし尽くしてしまうような、そんな放出を使う者はいなかった。今まで見て来た、どの魔炎よりも、ルビィネルの魔炎が速く、強く、そして、熱い。

「やっぱりお前って、すごい魔女なんだな」

改めて感心した様子で呟くマルクを横目に、ルビィネルが少し、口元を緩める。

「当然だろう？ 私は、魔女の頂点に立つ者だぞ？」

「ハハ、それもそっか」

自信満々の笑みを浮かべるルビィネルに、つられるようにして、マルクも笑みを浮かべた。

「今の感覚を忘れないうちに、次は、そなただけで放出を使ってみる」

そう言つて、ルビィネルが、マルクの右手から手を離す。

「俺だけで？」

「今のはあくまで、私が補助したものだ。魔紋の刻まれた手を重ね合わせている間のみ、私がそなたの炎技を補助出来る」

「じゃあ、この前、“移り火” っていうのが使えたのも？」

「ああ。私が補助したからだ」

腕を組んだルビィネルが、数歩後ろへ下がり、マルクとの間に距離を取る。

「だが、手を繋いだままでは動きも鈍るし、手を離されてしまつては、成す術がなくなる。だから、そなた単体でも、炎技を使いこなす必要があるのだ」

「成程、成程」

ルビィネルの言葉に何度も頷いたマルクが、ルビィネルの手を離れた右手を、改めて、じっくりと見つめる。手を離れた後も、ルビィネルと共有している魔炎を、感じることは出来た。全身を包む光も、消えずに見えている。

「ええーつと、魔炎を右手に集中つと」

右手を掲げたマルクが、魔炎を集中させようと、真剣な表情を見せる。

「ううーん、うううーん！」

集中していることを表しているのであろう唸り声だけは大きいものの、マルクの右手に、魔炎が集まっていくなか様子は一切ない。

「理解力と実行力だけでなく、集中力も備わっていないのか」

「うるさいわ！」

深々と肩を落とすルビィネルに、マルクが思わず振り向き、怒鳴りあげる。

「どうせ俺には、知力も体力も魅力も備わってないよ……」

「これがネガティブスイッチというものか」

全身から陰湿な雰囲気醸し出し、一気に暗くなっていくマルクを見て、どこか感心したように呟くルビィネル。

「演習室の無断使用は、処罰の対象よ？」

入口の方から聞こえてくる、よく通る女性の声に、マルクとルビィネルが同時に振り返る。

「ああ、すみません。すぐに出っ……って、あっ」

相手を確認せぬまま、魔院の講師だと思ったのか、謝りつつ振り返ったマルクであったが、入口に立つその人物を見ると、言葉を止め、眉間に皺を寄せた。

「お前、はっ……」

「それとも、処罰が希望なのかしら？」

金色の巻き髪を手で振り払いながら、マルクへと冷たい笑みを浮かべたのは、トゥーパであった。こっぴどくパートナーを断られ、そして、ルビィネルとのパートナー契約をするきっかけともなった魔女。マルクにとっては、因縁の魔女とも呼べる。

「何だ。また、そなたか」

ルビィネルがどこか呆れたような表情で、軽く肩を落とす。

「先日の謝罪にでも来たのか？」

「ええ、そうね」

あっさりと頷くトゥーパに、マルクが戸惑うように首を傾げる。

「ぜひ、謝罪してもらいたいわ」

「は？」

トゥーパの言葉に、眉をひそめるルビィネル。

「あなたたちのせいで、私、魔院の皆からなんて呼ばれてると思う？ “陰険魔女”とか“暴言魔女”とか、もう散々よ？」

「事実ではないか」

「おい！」

涼しげな顔で、トウーパにも負けぬ暴言を吐くルビィネルに、マルクが思わず注意するように声を発する。

「ケンカ売ってどうするんだよ！」

「先にケンカを売られたのは、そなただろう？ 腹が立たぬのか？」

「俺はああいうの、言われ慣れてるから、今更、腹とか立たないんだよ」

「困ったものだな」

マルクの主張を聞いたルビィネルが、少し険しい表情を見せる。

「あなたたちのせいで、もう、私のプライド、ズタズタなのよねえ」

二人のやりとりを特に気にすることなく、冷たいままの微笑みを浮かべたトウーパが、言葉を続けながら、ゆっくりとその細い右手を掲げていく。

「起きてえ、私の黄炎<sup>おうえん</sup>」

その白い右手が、黄色の炎を帯びていく。

「だから、謝罪して。あなたたちの、すべてで」

「……………！」

トウーパから向けられる黄色く燃え上がる炎に、マルクとルビィネルは、大きく目を見開いた。

「おうれいか黄烈火”！」

「いええええ!?」

トウーパの右手から放たれた黄色の炎が、激しく燃え盛りながら空中を走り、まっすぐにマルクのもとへと飛んでくる。向かってくる炎を見つめ、頭を抱え、声をひっくり返すマルク。

「ダメだあ！ 俺、もう、死んだあゝ！」

「簡単に諦めるな！」

「うおっ!?!」

マルクのすぐ傍へと駆けて来たルビィネルが、頭を抱えていたマルクの右手を力強く引き剥がし、握り締めて、向かってくる黄炎へと突き出す。

「此の身を守れ、我が赤炎！ “せきへきか赤壁火”！」

突き出されたマルクとルビィネルの手から、赤い炎が放たれ、二人の前方に立ちはだかるように巨大な壁を作ると、その壁が、トウーパの向けた黄炎を掻き消す。

「おお、すつげえー！ 何だ、今の!?!」

「六つの炎技の一つ、“防御”だ」

「へえー、お前、他の炎技も使えるんだな」

「当然だろう。だいたい、今、そんなことに感心している場合か」  
輝くような瞳で、目の前の炎の壁を見つめるマルクに、ルビィネルが呆れたように言い放つ。二人が手を解くと、前方の壁もすぐに消えた。ルビィネルが厳しい表情を見せ、今まさに黄炎を向けたトウーパと向き直る。

「どちらが処罰の対象だ」

ルビィネルが少し、吐き捨てるように言う。

「今のは、人を燃やせる炎だぞ？ そのようなものを、同じ魔院の者に向けるなど、何を考えている!?!」

「言ったでしょう？ 謝罪してっ」

声を荒げたルビィネルにも動じることなく、トウーパは落ち着いた様子で微笑む。

「そうじゃないと、私、許せそうにないの。 “黄烈火”！」

「なっ!？」

「あいつ、また……!」

またしても黄炎を二人へと向けて放つトウーパに、マルクとルビィネルがそれぞれ、驚きの表情を見せる。先程よりも速い炎は、今度は防ぐ暇もない。

「避ける、マルク！」

「どわああああ！」

マルクとルビィネルが左右に分かれると、その間を、トウーパの黄炎が通り過ぎていく。通り過ぎた炎は、そのまま演習室の壁に当たり、その辺りの壁一体を、一気に黒焦げにした。真っ黒になった壁を見つめ、マルクがその表情を青くする。

「あ、あんなの当たったら、死んじゃうじゃないかよっ……」

「だから、言っただろう。あれは、人を燃やせる炎だ」と

「何、落ち着いてるんだよ！ このままじゃ俺たち、あの壁みたい  
に黒焦げさんに、されちゃうぞ!？」

「心配するな」

焦るマルクに、ルビィネルが冷静な口調で言葉を発する。

「魔女がそう何度も、自身で魔炎を使うことが出来ないことは、知  
っているだろう?」

「あ、そっか」

納得した様子で大きく頷くマルク。魔女の、その身に宿す魔炎はあまりに強く、自身でその魔炎を使えば、寿命を縮めてしまうのだ。マルクが初めてルビィネルと出会った時も、ルビィネルは、自身で魔炎を一度使っただけで、気絶してしまっていた。

「あんな全力の炎、自身で撃てるのは、せいぜい二度が限度だ。そ  
ろそろ、体力の限界で、倒れる頃でっ……」

「“黄烈火”！」

ルビィネルの言葉に逆らうように、左右に分かれた二人へと、同時に飛んでくる黄色の炎。

「撃つて来たじゃないかよお！」

「あれ？」

マルクは必死に叫び、ルビィネルは首を傾げながらも、それぞれ向かって来た炎を避ける。両手を突き出し、二つの炎を同時に飛ばしたのである。トウーパは、倒れるどころか、先程までとまったく変った様子なく、元気にその場に立っていた。

「もうダメだあ！俺は今日、ここで火葬されるんだああ！」

「何故……！」

頭を抱え、嘆いているマルクを横目に、ルビィネルが戸惑った様子で、トウーパを見つめる。この演習室に、三人以外の気配はなく、トウーパにパートナーがいる様子もない。パートナーがいないのであれば、今までの魔炎は確実にトウーパが使っているものである。あれほどの炎を連発すれば、余程の魔女でも、意識を失うか、倒れるかするのが普通である。

「あ………！」

考え込むように、トウーパを凝視していたルビィネルが、何かに気付いた様子で、大きく目を見開く。微笑むトウーパのその首筋に、一匹の、小さな虫がとまっているのが見えた。

「あれは、まぢゅう魔蟲……！」

「へ？」

より一層、険しい表情を見せるルビィネルに気付き、マルクが嘆くことを止め、ルビィネルの方を振り向く。

「何だ？ どうしたの？」

「あの者の首筋に、黒い虫がとまっているのが見えるか？」

ルビィネルの言葉に促され、目を凝らし、トウーパを見つめるマルク。

「ええ〜？ そんなの、とまってるかなあ？」

「どうやら視力も悪いらしい」

「どうせ俺なんて、視覚も嗅覚も悪いんだよ！」

残念がるように肩を落とすルビィネルに、マルクが思わず怒鳴りあげる。涼しげに二人の様子を見ていたトウーパが、その金色の巻き髪を、手で払った瞬間、首元がよく見えるようになり、とまっている黒い虫の姿が、マルクの視界にもはっきりと入った。

「居た居た！ 黒い虫！」

「あれが魔蟲。我々、魔族の中でも異形の存在、“魔物”と呼ばれるものの一種だ」

「そういえば昔、習ったかなあ」

過去の記憶を遡り、マルクが不確かな様子で呟く。魔物や魔獣という存在は、魔士の養成学校に通っていた際、単語として聞いたことはあったが、見たことはなかった。魔物は魔族の住む領域に多く存在するものであり、マルクの住む人間領のヤールには、ほとんど居ないと言われていた。

「で、あの虫が何なんだ？」

「魔蟲は、人を襲うような危険なものではないが、魔族に取りつくと、麻痺症状を引き起こす」

「麻痺症状？」

「ああ。自分の体力に限界が訪れていても、倒れることなく、魔炎を使い続けられる感覚麻痺症状だ」

「んな！？」

ルビィネルの説明に、マルクが一気に焦りの表情となる。

「じゃ、じゃあ、あいつは……！」

「平気なんじゃない。平気じゃないことに、気付いていないだけだ」  
目を細め、厳しい表情でトウーパを見つめるルビィネル。

「全力の魔炎を四発。これ以上使えば、命にもかかわる」

「そんなっ……！」

さらに焦るマルクの横で、ルビィネルが気難しげに唇を噛む。

「何とか、あの魔蟲を……」

「よし、謝ろう!」

「は?」

策を練ろうとしていたルビィネルが、マルクの発言に、目を丸くする。決めきった表情を見せたマルクは、トウーパとまっすぐに向き直り、深々と頭を下げた。

「何か色々と、ごめんなさあーい!」

演習室に、マルクの大きな声が響き渡る。それと同時に、トウーパの表情が歪んだ。

「黄烈火」

頭を上げたマルクへと、トウーパが黄炎を向ける。

「えええ!?! なんで!?!」

「マルク!」

驚いているマルクを突き飛ばし、自身もマルクの方へと転がり込むようにして、何とか黄炎を避けるルビィネル。起き上がったルビィネルが、同じく起き上がったマルクを、強く睨みつける。

「何をしている!」

「だって、あいつ、謝ってって言ってただろ!」

「あんなプライドの高い魔女に、素直に謝ったところで逆効果だということくらい、わかれ!」

「じゃあ、どうするんだよ!?!」

「黄烈火」!

不毛な言い合いを続けている二人のもとへと、再び飛んで来る黄炎。ルビィネルがすぐさま左手を伸ばし、マルクの右手を取る。

「“移り火”!」

二人を赤い炎が包み込むと、黄炎の落ちたその場から二人が姿を消し、トウーパから一番離れた、演習室の最奥へと移動する。

「フフフ……距離を取ったくらいで、私から逃げられるつもり……?」

すぐに移動したマルクとルビィネルの姿を捉え、トウーパが楽しげに微笑む。美しいその表情とは裏腹に、額からは汗が流れ、顔色

は青くなり、突き出した両手は、細かく震えていた。そのトウーパの様子を見て、ルビィネルが眉をひそめる。

「体には、確実に限界が来ている。このままでは、本当に……」

「ヤバいのか？」

「ああ」

ずっと冷静だったルビィネルも、トウーパの変化に、徐々に焦りを感じ始める。

「仕方がない。こうなったら、私が魔炎を使って、あやつから魔蟲を切り離す」

「へ？ け、けど、魔炎使ったら、お前まで……！」

「倒れる前に決める。二発も使えば十分だ」

不安げな表情を見せるマルクに、自信満々の様子で言い放つルビィネル。

「その間、そなたはここに……」

「そんなのは、嫌だ」

「何？」

否定するマルクの声に、ルビィネルが少し驚いたように顔を上げる。

「だって、それじゃあ、パートナーの意味がない！」

「マルク」

ルビィネルをまっすぐに見つめ、まるで訴えるように強く、声を張り上げるマルクを見て、ルビィネルがそつと目を細める。

「そうだな。私には、パートナーがいるのだったな」

マルクを見つめたルビィネルが、穏やかに微笑む。

「右手を貸せ、マルク」

「ああ！」

左手を差し出したルビィネルの言葉に大きく頷き、マルクが右手を突き出す。魔紋の刻まれた二人の手が、強く重なり、二人はその場で素早く立ち上がり、足並みを揃え、トウーパのもとへと駆け出して行く。

「あら。そんなに、私の炎に焼かれないの……？」

駆け込んでくるマルクとルビィネルを見つめながら、微笑んだトウーパが、痙攣し始めている右手を、まっすぐに二人へと伸ばす。

「なら、望み通り……」

「手を上へ突き上げる、マルク！」

「おう！」

トウーパが魔炎を撃つ前に、駆けている二人が動く。ルビィネルの声に反応したマルクは、固く握り締めたルビィネルの手を引つ張り上げるように、右手を上空へと突き上げた。

「彼の者を惑わせ、我が赤炎！ “霧赤炎”！」

むせきえん

突き上げられた二人の手から、真つ赤な炎が放たれると、放たれた炎が一気に広がり、演習室全体を包み込む。それは熱い炎ではなく、辺りを燃やすこともなくただ広がって、部屋をまるで、濃い霧で包んでいくかのようであった。炎の霧に包まれたトウーパの視界からは、マルクもルビィネルも見えなくなっていった。

「目くらましの霧炎……随分と地味な芸当、してくれるじゃない」

部屋の中がまるで何も見えなくなった状態だというのに、トウーパは、辺りを包み込んだ赤い炎を見つめながら、落ち着いた様子で笑う。

「でも」

トウーパが鋭く目を細め、自身の右方を振り向く。そこには、トウーパへと、正確に言えば、トウーパの首筋にとまった魔蟲へと伸びてきている、一本の手があった。

「見えてんのよね。 “黄烈火”！」

「あ……！」

トウーパから向けられる黄炎に、手の伸ばしていたルビィネルが、大きく目を見開く。

「うっうっ！」

黄炎を受けたルビィネルが、後方へと吹き飛ばされると、部屋を包み込んでいた、霧状の赤炎が一瞬にして消え去り、また部屋全体

が見えるようになる。

「ルビィネル！」

「かすっただけだ、問題ない」

ルビィネルから少し離れた場所に立っていたマルクが、床へと倒れ込んだルビィネルを見て、思わず身を乗り出す。ルビィネルは、少し焦げた右肩を左手で押さえながら、マルクの言葉に答えた。

「残念だったわね。私、目はいいい方なの」

「口は悪いのにな」

得意げに微笑むトゥーパに、ルビィネルが挑戦的に言葉を返す。

だが、その額からは汗が流れ落ち、表情からも厳しさがうかがえた。魔蟲を切り離すことが出来なかった上に、ルビィネルが傷を負ってしまったこの状態では、トゥーパを助けることは、さらに厳しくなってしまったからだ。挑戦的なルビィネルを見て、トゥーパは涼しげに笑う。

「あなたは本当に、私のプライドを傷つけるのが上手いわね」

「あ………！」

まだ床に座り込んでいる状態のルビィネルへと、トゥーパが、その右手を伸ばす。

「その減らず口、燃やしてあげるわ」

「ク………」

トゥーパの右手から溢れる黄炎に、ルビィネルがより一層、険しい表情となる。

「ルビィネル！」

居ても立ってもいられず、マルクは、意識せぬうちに、その足を動かし、その場から駆け出していた。

「いい加減にしるよ！」

トゥーパのすぐ前まで来たマルクが、トゥーパが伸ばした右手を掴み、そのまま上方へと持っていく。腕を取られたトゥーパが、不快そうに表情を歪める。

「最下級魔士ごときが、慣れ慣れしく私に触らないで！」

強く声を張り上げたトウーパが、右手に黄炎を集中させると、トウーパの右手を掴んでいたマルクの左手までが、黄炎に包まれる。「マルク！」

黄炎に焼けるマルクの左手に、ルビィネルが焦ったようにマルクの名を呼ぶ。だが、黄炎に包まれても、マルクがトウーパの手を離すことはなかった。そんなマルクに、トウーパが驚いた様子で、目を見開く。だがすぐにその表情は、険しいものへと変わった。

「離して！ 離しなさいよ！」

何度も右手を振り切り、マルクの手を振り解こうとするトウーパ。「俺がム力つくんなら、いくらでも、何とでも言えよ！」

トウーパの手を掴んだまま、トウーパの顔をすぐ目の前にして、マルクが声を張り上げる。

「な、何っ……」

「俺は悪口くらい、言われ慣れてるから、お前の暴言の一つや二つ、痛くも痒くもない！」

マルクの言葉の意味がわからず、戸惑い始めたトウーパに、マルクがさらに、捲し立てるように、言葉が続ける。

「俺への文句くらい、いくらでも言っていていいからっ……」

マルクがまっすぐにトウーパの青色の瞳を見つめ、そっと目を細める。

「こんなくだらないことのために、自分の命、使っなよ!!」

「……っ！」

溢れんばかりの感情のこもったマルクの言葉を、まっすぐに向けられ、トウーパが大きく目を見開く。

「う、うるさい!!」

戸惑いを振り払うように叫び、トウーパが大きく口を開く。

「“黄爆火”！」

「うわあああ！」

「マルク！」

トウーパの右手から放たれた黄炎が舞い上がり、上空で激しく爆

発すると、その爆風に飛ばされ、マルクが床へと倒れ込んだ。ルビ  
イネルが、吹き飛ばマルクの様子を見て、思わず身を乗り出す。

「うっう……！」

その爆発により、マルクだけでなくトウーパも吹き飛ばされ、同じように床へと倒れ込む。トウーパが床に背中を打ちつけると、その衝撃でか、首筋にとまっていた魔蟲が、力なく床へと落ちた。

「あ……」

魔蟲が落ちた途端、トウーパの全身から、力が抜ける。

「魔蟲が取れたか。ん？」

トウーパから魔蟲が落ちたことを確認し、ホツとしたように肩を落としたルビィネルであったが、上方から聞こえてくる、何か重たいものが揺らめくような、そんな鈍い音に気付き、ゆっくりと顔を上げる。顔を上げた途端、ルビィネルがまた、表情を険しいものへと変える。天井から吊り下げられていた巨大なシャンデリアの照明が、大きく揺れ動き、天井と繋いでいる器具も壊れ、今にも落ちようとしていた。

「さっきの魔炎が当たったのか……！」

ルビィネルが焦ったように声を漏らしている間に、照明はいよいよ天井との繋がりをなくし、速度をつけて、下へと落ちていく。その照明の真下には、未だ、倒れた状態のままの、トウーパの姿があった。魔蟲から離れたトウーパは、感覚が戻ったからか、ひどくぐったりとした様子だ。魔炎を使うことも、その場から動くことも出来そうにない。

「マズい……！」

落ちていく照明の下に、トウーパの姿を見つけ、ルビィネルが慌てて右手を突き出す。

「トウーパ！」

「え？」

右手を突き出したルビィネルの前方で、マルクが勢いよく立ち上

がる。マルクのその姿が、照明を撃とうとしていた、ルビィネルの魔炎の行く手を遮ってしまう。

「退け！ マルク……！！」

その場から動くよう指示を出そうとしたルビィネルが、マルクの右手に集まる、赤々とした炎を見つけ、呼びかけようとした名を止める。

「右手を突き出せ、マルク！」

「え？ あ……！！」

背中から聞こえてくるルビィネルの声に、一度は戸惑ったマルクであったが、自身の右手に集まる強い熱、右手を包む赤い炎に気が付き、真剣な表情を作る。

「そして、叫べ！」

ルビィネルの声に後押しされ、マルクが、トゥーパへと落ちていく照明に、魔紋の刻まれた右手を向け、大きく口を開く。

「せきれんか赤煉火”！」

マルクが大きく叫んだその瞬間、マルクの右手から、赤々とした炎の塊が放たれた。

「うっう……！！」

すぐ上方で起きた衝突に、トゥーパが思わず目を伏せる。美しいまでの真つ赤な炎が、空中を駆け抜け、降下して来ていた照明に当たると、恐らくは鉄製であろう照明が、一瞬にして溶けてなくなつた。何の破片も残らなかつたため、トゥーパに危害が及ぶことはなく、炎が止むと、演習室は一気に静まり返つた。その静けさに気が付き、トゥーパがゆっくりと目を開く。

「大丈夫か！？」

トゥーパが目を開くと、そこには、心配するような表情を見せたマルクの姿があった。マルクは倒れているトゥーパのすぐ横にしゃがみ込み、トゥーパの顔を覗き込んでいる。先程、トゥーパの魔炎により焼かれた左手が、痛々しい。平気な顔をしていられるような傷ではないというのに、それでもマルクは、トゥーパの心配をして

いる。

「……っ」

そんなマルクの様子を見て、トゥーパがそつと、目を細める。

「ご、めん……なさい……」

「へ？」

弱々しい声が、かすかに、マルクの耳に届く。だが、マルクの戸惑いの表情を見ることもなく、トゥーパは深々と、目を閉じてしまった。

「あ、おい！」

「すぐに医務室に運ぶんだ」

焦るマルクの背に、冷静な声が届く。マルクが振り返ると、マルクの後ろにルビィネルが立っていた。

「今すぐ栄養剤を打ってもらえば、十分に助かる」

「わ、わかった！」

ルビィネルの言葉に素直に頷くと、マルクが両手でトゥーパの体を横抱きにし、必死の足取りで、演習室の出口へと駆けていく。

「ついでに、そなたの火傷も診てもらえよ」

「おう！ って、お前は？」

「私も後から、すぐに行く」

「わかった！」

素直な返事を響かせて、マルクが演習室を後にする。演習室にルビィネルだけが残ると、より一層、静けさが増した。照明を一つ失い、少し薄暗くなった部屋で、ルビィネルが床に落ちた魔蟲を見つめ、目つきを鋭くする。

「火発ひはち」

ルビィネルが魔蟲へと人差し指を伸ばすと、その指先から赤い炎が放たれ、魔蟲に直撃すると、その小さな体を一瞬にして、灰にした。魔蟲を燃やしたルビィネルが、どこか冷たい表情を見せる。

「フレイヤでも滅多に出ない魔蟲が、たまたま魔院に現れ、たまたま、私たちを快く思っていない魔女に取りついた、か……」

静かに言葉を落とし、ルビィネルが目を伏せる。  
「随分な偶然だな」

「うーん」

魔院の領土内にある、マルクたちが居た演習室がよく見える木に登り、細い枝の上に器用に立って、双眼鏡を覗いている、魔士の格好をした青年。茶色のサラサラとした髪が、風に流れ、下ろされた双眼鏡の下から、金色の瞳が現れる。その青年は、昼間に、トゥーパと接触していた、あの魔士の青年であった。

「やっぱり、気位の高い魔女くらいじゃあ、使いものにもならないかあ」

青年が、がっかりした様子で肩を落とす。

「さあて、じゃあ、次は何して遊ぼうか？」

そつと微笑んだ青年が、演習室の方を見つめ、口元を緩める。

「ルビィネル」

自然と呼ばれたその名が、夜の風に吹き抜けた。

翌日、第五演習室。

「放出の練習してたら、照明が落ちて来て、ぶっ壊れちゃいました”だとお……?”」

常態でも目つきの悪いブラッドスの目つきが、さらに鋭く、険しくなっていく。

「クソ真面目に練習なんか、してんじゃねえよ！」

「あんたが、放出使えないと、授業に出さないとか言っただんどうが！」

激しく睨み合い、どこか幼稚な怒鳴り合いを始める、マルクとブラッドス。トゥーパとの交戦により、第五演習室は、照明一個を失

い、他にも壁が黒焦げになったり、演習用の道具が燃え尽きていたりと、それなりの被害が出てしまった。だが、トウーパや魔蟲のことが、魔院側に知れば、トウーパが責任を取らされる可能性もあったため、ルビィネルの提案により、すべては、マルクの放出の練習によるものということにしたのである。

「バツ！ 俺を引き合いに出すんじゃないよ！ 給料減俸されたら、どうすんだ！」

「されれば？ 自分の発言にくらい、責任持てよ。講師さまっ」  
「んだとお！？」

挑発的なマルクの発言に、ブラッドスの表情が勢いよく歪む。

「つか、こんだけ派手に教室壊しといて、放出、出来るようになってねえじゃねえかよ！」

「昨日の夜は出来たんだよ！」

「夢だろ、それ！」

「夢じゃない！」

二人の終わりそうもない言い合いを、ルビィネルは、少し離れた場所から、まるで他人事のように眺めていた。

「はあ、今日も相変わらずだねえ」

「本当、進歩のない人たちね」

そんなルビィネルの元へ、先日と同じように、ポンドとアメジエスがやって来る。

「すんごいのパートナーにしちゃったなあって、そろそろ後悔して来た？」

ポンドがまるで楽しむように、軽い口調でルビィネルへと問いかける。マルクを見つめたルビィネルは、そつと口元を緩めた。

「いいや」

「へ？」

涼やかなルビィネルの声に、ポンドが首を傾げる。

「進んでるよ、少しずつだけだな」

マルクを見つめるルビィネルの、浮かべたその笑みは、とても晴

れやかなものであった。

「どうせ俺なんか、一生、物覚え良くなったりしないんだよお！」

「お、ネガティブスイッチ」

頭を抱え、嘆き始めたマルクを見て、ポンドがまた、楽しそうに笑う。

「あー、面倒臭せえ！ パートナー！ こいつをとつとと、何とかしろー！」

「ハイハイ」

ブラッドスの怒鳴り声に、ルビィネルは疲れたように返事しながら、ゆっくりと立ち上がった。

結局は、放出を使いこなすようにはなれず、また、いつもと変わらぬ日々を送り始めたマルクに、変わったことが、一つだけあった。

「はあーい、マルク！ お弁当、作って来たわよ！」

「ど、どうも……」

満面の笑みのトゥーパに、桃色の可愛らしい包みに入った弁当箱を渡され、思いきり困惑の表情を見せるマルク。共に昼御飯を食べようとしていたポンドとアメジェスも、その光景に、一瞬にして固まり、言葉すら失っていた。

「食後は、手作りプリンも用意してるからー！」

「は、はあ……」

笑顔でプリンを見せてくるトゥーパに、マルクは、短く頷くことしか出来なかった。

「お、おい、マルク」

やっと自分を取り戻せた様子のポンドが、マルクの耳元に口を寄せ、トゥーパに聞こえないように、マルクへと問いかける。

「俺の目が確かであれば、あれは数日前、君をボロクソ言っていた、高慢ちき魔女だと思うんが」

「うん、そうだよ。ポンドの目は正しい」

「じゃあ、なんだって急に、こんな展開に？」

怪訝そうに眉をひそめ、ポンドが問う。

「いやあ、それが俺も、何がそんなにツボに入ったのか、よっくわかんないんだよねえ」

頭を抱え、困ったように答えるマルク。

「健康お野菜ドリンクも、作って来たのー！」

『は、はあ………』

さらに笑みを向けてくるトゥーパに、思わずポンドもマルクと声を揃え、啞然と頷き返した。

「まあ、良いのではないか」

マルクのすぐ隣で、すでにパンを頬張りながら、ルビィネルがそつと微笑む。

「そなたを認める者が、一人、増えたのだから」

「認めるっていうか……」

ルビィネルの言葉を受けたマルクが、ゆっくりとトゥーパの方を見る。ばっちりとその目が合うと、トゥーパはその頬を赤く染めた。

「やっだー、そんなに見ないでよ、マルク！ 私、照れちゃう！」

「これは、ちよつと……」

元気よく恥ずかしがっているトゥーパに、思わず声を失うマルクであった。

人間と魔族、唯一の共存国“レイヤ”。レイヤ西側、人間領“ヤール”。

ヤールの中でも、人々で賑わう町から少し離れた山の、山道を登ったその奥の奥、あまり人の立ち寄りぬ場所に、マルクの住む屋敷はあった。

「マルク様ー！ そろそろお時間ですよ、起きて下さーい！」

「ん、んん……」

一階のダイニングからとは思えぬほど、しっかりと聞こえてくるラピスラズの声に、深く目を閉じたままのマルクが、少しもがくような、そんな声を漏らす。マルクの部屋は、屋敷の二階を上がつてすぐの場所にあり、広い部屋に置かれた、大きな寝台の上で、マルクは布団にくるまっていた。

「マルク様ー！」

「ハイハイ。起きます、起きますってば」

もう一度聞こえてくるラピスラズからの呼びかけに、届きはしないだろうが、答えるように呟いて、マルクがゆっくりと体を起こす。まだ半分ほどしか開かない瞳を擦り、何とか覚醒を促すマルク。口を開けば、大きな欠伸が漏れた。

「何だ？ もう朝か？」

「ああ、そうみたいだよって、へ？」

すぐ傍から聞こえてくる、マルクと同じように眠たそうなその声。その声に答えた途端、マルクが意識をはっきりとさせ、しっかりと目を開いて、その声の聞こえて来た方を見る。マルクの起き上がった場所の、すぐ横に見える、布団の膨らみ。その膨らみが、もぞもぞと動き始める。

「な、何っ……」

「もうすぐ、目え覚めるぞお！」

「どわああー！」

もぞもぞと動いていた布団が、突如、マルクの上に覆いかぶさられるようにして、押しつけられる。マルクがやって来た布団を払っている、先程、布団の膨らんでいたその場所から、一人の人物が姿を現した。

「んんん、よく寝た」

大きく伸びをしながら、マルクと同じ寝台の上で、マルクのすぐ横から起き上がったのは、ルビィネルであった。真っ赤な髪は寝ぐせで少し乱れており、楽そうな、ワンピース型の水色の寝巻きを着ている。そんなルビィネルをすぐ横に、しばらくの間、固まるマルク。固まっているマルクの方を振り向き、ルビィネルが眠そうな表情のまま、そつと微笑む。

「おはよう、マルク」

「ぎっ……ぎゃああああー！」

マルクの絶叫が、朝の静かな屋敷に響き渡った。

「ああ、痛つてえ〜」

突然、同じ寝台から姿を見せたルビィネルに驚き、絶叫のまま寝台の上から転がり落ちたマルクが、その時、打ちつけた後頭部を押さえながら、眉間に皺を寄せている。マルクは寝巻きから魔士の制服に着替え、一階にあるダイニングテーブルで、ラピスラズスの用意した朝食を取ろうとしていた。

「まったく、朝から騒々しい男だ」

そんなマルクを、呆れたような表情で見つめるのは、マルクの向かいの席へと座り、同じように朝食を取っているルビィネル。非難するように言うルビィネルを、マルクが非難するように、思いきり睨みつける。

「元はと言えば、お前が悪いんだろ！？ だいたい、なんでお前が、俺のベッドで寝てるんだよ！」

「ラピスに客間を用意されたのだが、風呂から上がった後に、道に迷い、そなたの部屋に辿り着いた」

「家の中で迷うなよ！ どんだけ方向音痴なんだよ！」

「そう誉めるな」

「誉めてない！」

その場で立ち上がったマルクが、勢いよくルビィネルへと怒鳴りあげる。

「それに、何で俺の家に来てるんだよ！ お前は、魔院の寮に部屋があるんだろうが！」

「まあ、それはそうだが、パートナーとは常に共に居た方が、あらゆる時に対処出来るだろう？」

「あらゆる時って？」

「それはあ……」

指摘するように問いかけるマルクに、ルビィネルが少し首を捻る。

あれは、魔蟲……

随分な偶然だな……

数日前、レイールでは滅多に現れることのない魔物の一種、魔蟲が、マルクとルビィネルを快く思っていなかった魔女トウーパに取りつき、そして、そのトウーパに、二人は襲われた。ルビィネルは、その魔蟲出現に、偶然ではなく、故意的な何かを感じたのである。俯いたルビィネルは、考え込むように、険しい表情を見せたが、すぐにその表情を消し去り、笑みを浮かべる。

「世界滅亡の時とか」

「滅亡するんじゃ、対処も出来ないだろうが」

思いついたように言うルビィネルに、マルクが再び椅子へと腰を掛けながら、冷たい視線を投げかける。

「だいたい迷ったからって、健全男子の布団の中、潜り込むなよな。つたく、不用心な」

「そなたに、私をどうこう出来る度胸が備わっているとは、思えなかつたから、つい」

「うるさいわ！」

ルビィネルの言葉に、頬を赤く染めたマルクが、強く怒鳴り返す。「いやあー、さすがはルビィネル様。まったく、その通りでございますよあ」

「ラピス！」

キッチンから、カゴいっぱいに入った焼き立てのパンを持って、二人のいるダイニングへとやって来る、エプロン姿に満面の笑みのラピスラズ。

「どうせ俺には、男としての度胸もへつたくれも、備わっちゃいないんだよあー！ クソあー！」

「朝からネガティブだな」

両手で頭を抱え、自棄になって叫ぶマルクを見て、ルビィネルがどこか、感心したように呟く。

「だいたい、ラピスが悪いんだぞ？ 俺に言わずに、勝手にルビィネルを屋敷に泊めたりなんかして」

「ルビィネル様は、マルク様のパートナーなのですよ？ お泊めするのを、断る理由がありません」

「俺には断れって言うてるの！」

「屋敷の主人でもなくせに、随分と偉そうなもの言いですねえ」  
「テールにパンを置きながら、ラピスラズが困ったように肩を落とす。」

「コーラル様がお聞きになったら、さぞや、悲しまれることでしょう」  
「う」

「うるさいなあ」

「コーラル？」

拗ねるように、ラピスラズから視線を逸らすマルクの正面で、ル

ビィネルが不思議そうに首を傾げる。

「マルクの親御さんか？」

「ふうーん。まあ、そんなような、そうでもないような」

「は？」

曖昧な答えを返すマルクに、ルビィネルは益々、首を傾げる。

「コーラル様は、このお屋敷のご主人で、マルク様の育ての親でいらっしゃる方です」

「育て親？」

「マルク様は、まだ赤子の頃、この屋敷の近くに置き去りにされていたのですよ。それをコーラル様が見つけ、拾い、育て上げられたのです」

「そう、だったのか」

ラピスラズの説明に、ルビィネルがどこか歯切れ悪く頷く。赤子の時に、親に捨てられた事実など、あまり人に知られたいようなものではないだろう。だからマルクも、曖昧な答えを返したのかも知れない。少し気まずそうな表情で、ルビィネルが俯く。

「気にせずとも良いですよ、ルビィネル様。マルク様、笑えるほど溺愛されて、育って来てますから」

「うるさいっ」

そつと微笑みかけるラピスラズに、マルクが刺すような視線を向ける。

「今、コーラル様は、お仕事の関係で、別国へと出られておいですがね」

「そういえば、今回は長いよな。もう、一ヶ月くらい経っつけ？」

「後数日もすれば、お戻りになるはずですよ」

「ふうーん」

ラピスラズの言葉に、あまり興味なさそうに答えるマルク。だが、その声は、無理に興味なく聞こえるように作ったような、そんな声であった。

「そろそろ、コーラル様が恋しくなってきたのではありませんか？」

マルク様」

「違っ……！ 誰もそんなこと、言っていないだろ！」

からかうように問いかけるラピスラズに、マルクが少し頬を赤く染め、ムキになって言い放つ。

「子供じゃあるまいし、恋しくなったりするかよ！」

「へえー、ふうーん。ほおー」

「何だよ、その顔は！」

固く腕を組み、強く主張したマルクに対し、疑っているような、白々しく細められた瞳を向けるラピスラズ。そんなラピスラズに、マルクがさらにムキになり、怒鳴りあげる。

「コーラル、コーラル……」

マルクとラピスラズの騒がしいやり取りが続く中、ルビィネルは焼き立てのパンを頬張りながら、何やら少し考え込むように、首を捻る。

「どこかで、聞いた名だな」

大騒ぎしているマルクとラピスラズに、そのルビィネルの声が、届くことはなかった。

レイール聖魔院、第二講義室。

「どっはあ」

「今日は朝から、随分とお疲れね。マルク」

顎を机の上へと付け、すべての生気が出てしまいそうなほどの、深い溜め息を吐くマルクを見て、すぐ前の席に座っていたアメジエスが、興味を引かれた様子で振り返る。

「ついに、あの金髪魔女に、痺れでも切らした？」

「きゃあ、おっはよおー、マルクー！ えええ？ 今日もトウーパはカワイイってえ？ そんなの知ってるけど、照れちゃうー！」

「まあ確かに、痺れは切れてきてるけど……」

講義室へとやって来たばかりのトウーパが、入口付近から、窓際に座っているマルクへと、全力で手を振っているのを見て、マルクがげっそりした様子で肩を落とす。

「そっちの魔女じゃなくて……」

「あら。じゃあ、赤髪魔女さんの方かしら？」

「ん？」

アメジエスの視線を受け、マルクのすぐ隣に座っていたルビィネルが、机に広げていた教科書から、視線を上げる。

「何だ、そなた。まだ今朝のことを、根に持っているのか？」

呆れたような表情で、隣のマルクを見るルビィネル。

「器の小さい男だな」

「どうせ俺の器なんて、お猪口にも満たない大きさなんだよー」

ルビィネルの言葉に、マルクが口を尖らせ、呟く。

「そなたのベッドに潜り込んで、一緒に寝ただけだろう」

「だあああああ！」

マルクがルビィネルの言葉を掻き消すように、思いきり机を叩きつけ、その場で勢いよく立ち上がる。騒がしかった講義室は一気に

静まり返り、突然、立ち上がったマルクへと視線が集まる。講義室中から集められる視線に、マルクが我に返り、気まずそうな表情を見せる。

「あつ、いや、すみません」

誰にともなく謝り、静かにもう一度、席につくマルク。するとすぐに、講義室の者たちの興味は薄れ、また騒がしくなっていく。どうやら、ルビィネルの問題発言は、講義室の者たちの耳には届かなかったようである。

「ふああ、良かったあ。皆に聞こえてなくて」

「ほおーんと、良かった良かったあ」

「へ？」

すぐ背後から聞こえてくる声に、ホツとしていたマルクが、目を丸くする。

「マルクがウキウキワクワクな青春を送れているようで、親友として、俺も嬉しいよお。うんうん」

「ポ、ポンド！」

マルクが振り返ると、そこには、今、講義室へとやって来たのである。ポンドが立っており、何故か満足げな表情で、何度も大きく頷いていた。

「ああ、俺も早く、俺の魔女とウキウキワクワクな生活が、送らせてえなあ」

「違う！俺は別に、ウキウキでもワクワクでもない！」

羨ましそうに呟くポンドへと、頬を赤く染めながら、必死に主張するマルク。

「何々？何の話い〜？」

「じっつは、マルクがさあ」

「そいつには、絶対に言うなあ！」

会話へと寄って来たトウーパに、簡単に口を開こうとするポンドを、マルクが必死に止める。トウーパも加わり、さらに焦った様子で、大きな声を張り上げているマルクを横目に、ルビィネルが呆れ

た様子で肩を落とす。

「やれやれ。ん？」

ルビィネルがふと、視線を前方へと向けると、マルクの前の席に座るアメジエスが、どこか暗い表情で、思い悩むかのように下方を見つめていた。そんなアメジエスの様子を見て、ルビィネルが戸惑うように首を傾げる。

「どうかしたか？」

「え？ い、いいえ。何でもないの」

問いかけたルビィネルに、慌てて顔を上げ、首を横に振るアメジエス。だが、アメジエスの表情は晴れないままで、その視線が、ルビィネルの左手の甲に刻まれた魔紋を見つけると、アメジエスは、少し辛そうに目を細めた。

「アメジエ……」

「アメジエース！」

様子の違うアメジエスを気に掛け、ルビィネルが呼びかけようとしたその時、ルビィネルよりも大きな声が横から割って入って来て、ルビィネルの声を掻き消す。

「今日も一段と美しいなあ！ 我が魔女、アメジエスよお！」

よく通る、男性にしては高めの声を響かせ、講義室中の視線を集めながら、堂々とした立ち振る舞いとゆっくりとした足取りで、講義室へと姿を現したのは、流れるような金色の髪に、少し垂れ目がちな紫色の瞳の、それなりに整った顔立ちをした、マルクたちと同じ年頃の青年であった。振る舞いは大きい、背は低めで、全体的に小柄である。魔士の制服を着ているが、袖口や首元に、派手な金色の装飾品を纏っており、他の魔士よりは、明らかに目立つ格好をしている。

「さすがはこの僕の、海よりも深く、空よりも澄み切った瞳にかなった魔女だよ！ ハッハッハ！」

「はあ……」

青年の笑い声が響き渡ると、マルク、ポンド、アメジエスの三人

が、ほぼ同時に溜め息を吐き、深々と頭を抱え込んだ。

「さあ、アメジエス！ 今日という今日こそ、天のようにすべてを見通し、大地のようにすべてを支える、偉大なる魔士、この僕のパートナーになっておくれ！」

「お断りするわ」

「……………」

三秒もかからぬうちに断られ、受け入れるように、大きく両手を広げ、ポーズを決めていた青年が、そのポーズと、堂々とした表情のまま、しばらくの間、固まる。

「も、もう一度、聞こう、アメジエス。太陽のように燃えたぎり、月のように輝く、この僕のパ……………！」

「お断りするわ」

「……………」

今度は、青年がすべての言葉を言い終えぬうちに、断りを入れるアメジエス。その即答に、青年がまたもや固まる。

「何故だあゝ、アメジエス！ 僕の何がいけないというんだあゝ！」

「何かもう、すべて……………？」

混乱した様子で頭を抱える青年に、冷たい視線を送りながら、アメジエスがそつと呟く。

「随分と激しい魔士だな。誰だ？」

「フラン・ケイシー。見たらわかるだろうけど、このレイル聖魔院の魔士の一人だよ」

ルビィネルが問いかけると、呆れ切った表情で青年、フランを見つめたまま、マルクが答える。

「ま、マルクと違って、上級魔士だけどなあ」

「放つとけ」

口を挟むポンドに、マルクが鋭い視線を送る。

「家がやたら金持ちの貴族で、人間なのに、魔族側のレイルの生まれなんだよなあ。確か」

「そうそう。で、やたらアメジエスに惚れこんでて、アメジエスが

魔院に入った頃から、毎日毎日、ああやって、パートナー勧誘して  
るんだ」

「毎日？ それは凄いな」

マルクの言葉に感心したように頷き、ルビィネルが改めて、フラ  
ンを見る。

「やや！ そこに見えるは、最下級魔士ではないか！」

「名前で呼べよ」

今、マルクに気付いたと言わんばかりの様子で、大きな動作と共  
にマルクの方を振り向くフランに、マルクが鋭い視線を向ける。

「奇跡的にパートナーを得たそうじゃないか。噂で聞いたよ」

「あ、そう」

フランの言葉に、マルクが愛想なく返事をする。

「これで、君がアメジエスに掛ける負担も、少しは減るだろうし、  
未来のパートナーとして、僕も一安心だよ」

「別に、そんなに負担掛けてないし」

「では、アメジエス！」

「聞けよ！」

マルクとの会話を勝手に終わらせ、再びアメジエスの方を見るフ  
ランに、マルクが思わず怒鳴りあげる。

「今日は、その気になれないというのであれば、仕方がない！ ま  
た明日、来よう！」

「まあ別に、明日もその気にはならないと思うんだけど……」

先程までは頭を抱えていたフランが、この短期間で立ち直ったの  
か、また堂々と背筋を伸ばし、アメジエスへと、宣言するように言  
い放つ。

「しばしの別れ！ 涙してくれるな、我が魔女よ！」

「しないわよ」

「では、これにて、失礼する！」

最後まで一方的な会話を繰り返して、皆を散々呆れさせたまま、フ  
ランは嵐のように、講義室を去っていった。

「はあ」

フランが講義室から去ると、アメジエスが心からの溜息を放つ。

「お前も、変なのに惚れられちまったなあ」

「何度断つても全然諦めないから、本当困るわ」

ポンドの言葉に深く頷きながら、ひどく困った様子で呟くアメジエス。

「あんだけ振られても、まだ諦めないなんて、ポジティブだよなあ。マルクとは大違いっ」

「どうせ、俺はネガティブだよ」

からかうように笑いかけるポンドを、マルクがひっそりと呟く。

「けど、別に、悪い奴じゃないよね。あいつ。色々とおかしいところはあるけど」

「まあね……」

頭を抱えながら、アメジエスがマルクの言葉に頷く。

「まあ、心底悪い人間じゃないから、余計に困るといつか……」

「パートナー、なってやればいいのに」

「……っ」

マルクが口にした言葉に、アメジエスの表情が止まる。

「悪い奴じゃないし、俺よりは遥かに優秀な魔士だし、アメジエスも別に、パートナーがいるわけじゃなっ……」

続くマルクの言葉の途中、アメジエスが勢いよく、席から立ち上がった。突然、立ち上がったアメジエスを、マルクが戸惑うように見上げる。

「アメ、ジェス？」

「マルクには、関係のないことだわ」

「へ？」

深く俯いたまま、搾り出すようにそう呟くと、アメジエスは机の上に広げていた荷物をまとめ、足早に講義室を出て行く。

「あ、あ、アメジェス!? 授業は!？」

呼び止めるマルクの声に、アメジエスが振り返ることはなく、そ

のままアメジエスは講義室を出て行った。

「あああ」

「何々々？」

どこか呆れたように肩を落とすポンドの横で、トウーパは、まるで意味がわかっていない様子を見せる。そんな二人の前方でマルクは、アメジエスの方へと伸ばしていた右手を下ろし、戸惑うように、首を傾げる。

「俺、何か余計なこと、言ったかなあ？」

悩むように首を捻るマルクの隣の席で、同じように、出て行ったアメジエスを見送ったルビィネルが、どこか厳しい表情で、目を細める。

「確かに、余計なことをしたのかも知れないな」

ルビィネルは、マルクにも届かない小さな声で、そっと呟いた。

レイール聖魔院、第十一演習室。

「ええー、午後の授業は、魔女科の皆さんに、炎技演習を、実戦形式で行っていただくざあーます」

栗色の髪を塔のように頭のとっぺんに高々とまとめあげた、赤い縁取りの眼鏡を掛けた女性が、演習室に集まった魔女たちへと言い放つ。レイール聖魔院では、パートナーと共に出る講義もあれば、魔士単独、魔女単独で出席する講義もある。マルクたちと別れたルビィネルは、トゥーパと共に、魔女の炎技演習の講義に参加していた。

「あ、アメジエス」

周りを見回していたルビィネルが、参加している魔女たちの中に、アメジエスの姿を見つける。アメジエスは、友人であろう、他の魔女たちと、楽しみに雑談していた。本来であれば、自然と中庭に集まり、昼食を共にするのだが、今日の昼食時、アメジエスは現れず、その姿を見たのは、朝の講義前以来であった。

「これから皆さんに一つずつ、疑似炎ぎしえんをお配りするざあーます」

そう説明した女性講師が、魔女たちへ、手のひらに収まるほどの大きさの、橙色の球を、一人ずつに配っていく。少し弾力はあるが、硬めのその球を右手に持ち、ルビィネルが首を傾げる。

「何なのだ？ これは」

「はあ？」

率直に問いかけるルビィネルに、隣に立ち、同じようにその球を握り締めているトゥーパが、思いきり顔をしかめる。

「疑似炎よ、疑似炎」

「疑似炎？」

「魔力に反応して、魔炎によく似た炎を生成してくれる球。握り締めて、魔力を込めると、ほら」

トウーパが説明しながら、右手の球を強く握り締めると、球から黄色の炎が発生する。

「自分の属性の炎を出してくれるの。私なら黄炎おうえん、あんたなら赤炎せきえんって感じだね」

「本当だ」

ルビィネルもトウーパと同じように、球を強く握り締め、そつと魔力を込めると、球から、トウーパとは異なる、赤い炎が発生した。「これを使えば、魔炎を使わずに演習出来るし、ぶつ倒れも、寿命を縮めもせずに済むってわけ」

「成程。これは便利だな」

生じた赤炎を見つめながら、ルビィネルが感心した様子で呟く。見た目は、魔炎とそう変わらないが、魔炎を使った時に感じる、体の負担がまるでない。

「ってか、あんた、フレイヤの聖魔院に通ってたんでしょ？ なのに、疑似炎も知らないわけ？」

「え？」

何やら不審そうな瞳を向けてくるトウーパに、ルビィネルが焦ったように声を漏らす。

「い、いや、フレイヤでは、別の道具を使っていたのだ。だから、わからなかった。ハハハッ」

「ふうーん。他の道具なんて、あるんだあ」

納得した様子を見せるトウーパに、ルビィネルが少し安心したように肩を落とす。

「実戦は、一対一の対戦形式で行うざあーます。疑似炎は、魔炎に劣るとはいえ、それなりの威力を持った炎ですので、取り扱いにはくれぐれも注意するざあーます」

疑似炎を持った魔女たちに、講師が忠告するように、しっかりと言い放つ。

「三組ずつ、行うざあーます。では、まずう」

講師が懐からメモを取り出し、演習を行う魔女の名を、順番に呼

んでいく。

「最後の一組、赤炎クラスのルビィネルと紫炎しえんクラスのアメジエス」  
「え？」

自身の名と共に、よく知った名が呼ばれると、ルビィネルは目を丸くし、顔を上げた。思わずアメジエスの方を見ると、アメジエスもどこか神妙な表情で、ルビィネルの方を見つめている。

「名前を呼ばれた三組は、それぞれ演習コートに入つて、実戦を始めるざあーます」

「あらら、いきなりいゝ？ まあ適当に頑張りなさいよ」

「あ、ああ」

トウーパに送られながら、ルビィネルが、演習室にある三つのコート、白い紐で囲まれた広場の、一番奥へと入る。他の二つのコートにも同じように、名を呼ばれた魔女が入つていき、その他の魔女たちはそれぞれ分かれ、コート内を見つめる。トウーパは、ルビィネルの入ったコートの、すぐ傍まで寄つて来た。ルビィネルに遅れるようにして、アメジエスがコート内へと入つて来る。どこか鋭い表情を見せているアメジエスに、ルビィネルはそつと微笑みかけた。  
「よろしくな、アメジエス」

「ええ」

ルビィネルの呼びかけに、アメジエスが静かに頷くと、疑似炎を持った右手を軽く持ち上げる。するとアメジエスの右手は、薄い紫色の、美しい炎に覆われた。

「あれが紫炎……アメジエスの属性の炎か」

その美しい炎を見つめ、ルビィネルが少し目を細める。

「では、始めるざあーます！」

講師の掛け声に、ルビィネルとアメジエスが、同時に身構える。  
「紫閃火しせんか」！

アメジエスが右手を突き出すと、アメジエスの右手から生じていた疑似炎が、まるで閃光のような輝きを放ちながら、目にも留まらぬ速さで、ルビィネルのもとへと飛び出していく。向かつてくる炎

を見つめ、ルビィネルがすぐに真剣な表情となる。

「きやくび脚火”」

ルビィネルが赤炎を纏った右手を、自身の両足に向け、軽く一振りさせると、ルビィネルの足を赤い炎が包む。ルビィネルは赤炎に包まれた両足で、勢いよく地面を蹴ると、高々と上空を舞って、アメジエスの向けた炎を避ける。宙を舞うルビィネルは、器用に態勢を整え、下方に見えるアメジエスへと右手を向けた。

「せきれんか赤煉火”！」

上空から降り落ちてくる赤炎に、アメジエスは焦ることなく、両手を突き上げる。

「しへきえん紫壁炎”」

紫炎が壁のような形となって、アメジエスの前に立ちはだかるとルビィネルの向けた赤炎が、その壁に弾かれる。弾かれた炎は、まだ宙にいるルビィネルの方へと戻っていく。だが、ルビィネルも焦りはせずに、冷静に右手を掲げた。

「せつきゅうか赤球火”」

ルビィネルの周囲を淡い赤色の炎が包み、戻ってきた自身の炎から、ルビィネルの身を守る。その直後に、ルビィネルは無事に地面へと降り立ち、包み込んでいた炎も消える。一瞬ではあるが、容易ではなかったその攻防を、周囲の魔女たちは、息を呑んで見守った。他のコートでも対戦は行われているが、他の魔女たちの視線は、ルビィネルとアメジエスの対戦に集中している。

「すつごい。“放出”も“防御”も余裕で使ってるわね。さすが、フレイヤからの転入魔女」

「アメジエス、紫炎クラスでもトップクラスの魔女なのに、全然見劣りしないもんねえ」

口々に感心の声を漏らす他の魔女たちの横で、トウーパが軽く、髪を払う。

「当然じゃない。私に勝ったんだから」

そう呟いたトウーパは、どこか得意げな笑みを浮かべていた。

「やるな、そなた」

皆の視線を集めていることなど、気にした様子もなく、地面に降り立ったルビィネルが、楽しげな笑みで、前方のアメジエスを見つめる。

「こつこつ、のびのびと戦える場合は、本当に久し振りだ」

「……っ」

わくわくしている子供のように、無邪気な笑みを浮かべたルビィネルが、鼓動を確かめるように、左手で自身の左胸を押さえる。その甲に刻まれている黒い魔紋を、再び視界に入れ、表情を曇らせるアメジエス。

“本結”で契約を……？

パートナー、なってやればいいのに

アメジエスの脳裏に、マルクがルビィネルとパートナーになった時の光景が、今朝のマルクの言葉が、次々と過ぎった。

「……“紫閃火”」

再びアメジエスの右手から放たれた紫炎が、先程よりも一層早く宙を駆け、あっという間に、ルビィネルの横を通り過ぎていく。驚いたように、大きく目を見開いたルビィネルの赤毛が数本、地面へと落ちた。アメジエスの紫炎に、かすめ落とされたのだろう。ゆっくりと顔を上げたアメジエスが、冷たく凍えるような瞳を、ルビィネルへと向ける。

「アメジエス……」

突き刺さるような、その視線を浴び、ルビィネルがそっと、目を細める。だが、アメジエスは、ルビィネルの様子を気に掛けることなく、また右手を、ルビィネルへと向けた。

「“紫追火”」

「“脚火”！」

またしても向けられる光速の炎に、ルビィネルは先程と同じよう

に、両足に赤炎を纏い、その場で飛び上がって逃れようとする。だが、ルビィネルが飛び上がると、アメジエスの放った紫炎も、ルビィネルの後を追うように、上空へと軌道を変える。

「追ってくる……?」

下方から迫る紫炎に、焦りの表情を見せるルビィネル。ルビィネルがその場で、赤炎を纏った右手を振り払い、飛び上がる向きを変えるが、それでも直、アメジエスの紫炎はルビィネルを追って来た。「追跡の炎か。本当に、実力のある魔女だ」

困ったように微笑んだルビィネルが、空中で体の向きを変え、追ってくる紫炎の方を向くと、目つきを鋭くし、胸の前で勢いよく両手を合わせる。

「赤爆火<sup>せきぼつか</sup>」!

ルビィネルが目の前で、放ったばかりの炎を爆破させ、追って来ていた紫炎を撃ち落とす。

「うっう……!」

爆発の衝撃と、飛び散る二人の炎の残骸に、コートで対戦を見つめていた魔女たちが、思わず目を閉じ、身を伏せる。その中で一人、トウーパだけが、しっかりと見開いた瞳で状況を見つめ、険しい表情を見せていた。

「何よ、あれ。本気じゃない」

トウーパが、低い声を落とす。

「ふう」

地面に降り立つと、何とか紫炎を消し去ったルビィネルが、ホッとした様子で息を吐く。その額には汗が滲んでおり、先程までの、楽しんでいるような様子は見られなかった。額の汗を拭いたルビィネルが、確認するように周囲を見回す。

「今ので皆、火傷とかしていないよな……?」

少し焦ったように、コート周囲に集まる、他の魔女たちの姿を見回すルビィネル。

「紫閃火」

「……っ」

透き通った声が響くと、ルビィネルは途端に、眉をひそめた。

「あっ……」

耳につく甲高い衝突音の後に、驚いたような、小さな声を漏らしたのは、アメジエスであった。周囲の魔女の様子を案じていたルビィネルに、少しの猶予を与えることもなく、次の炎を放ったアメジエス。その向けられた炎を、ルビィネルは、防ぐことも消し去ることもせず、まっすぐに突き出した右手で、真正面から受け止めたのであった。そのルビィネルの反応が予想外だったからか、アメジエスは思わず目を見張り、ルビィネルを見つめる。

「……成程な」

真正面に受け止めた炎を、右手を振り払うようにして掻き消し、ルビィネルが何やら、納得した様子で頷く。

「良いぞ。相手にはなるう」

顔を上げたルビィネルが、鋭い視線をアメジエスへと向ける。

「だが、それで後悔するのは、そなたではないのか？」

「……！」

ルビィネルのその言葉に、アメジエスが大きく目を見開く。

「あなたたち、何をやってるざあーます！」

二人の間に張り詰めた空気が流れたが、それは、女性講師の大きな声の乱入により、あっさりと吹き飛んだ。

「これは、あくまで演習ざあーますよ！ 下手に本気を出して、怪我人でも出たら、どーするざあーます!？」

「すまない。相手が実力者だったものだから、ついつい本気が……」  
「先生」

怒る講師に、ルビィネルが柔らかな笑みで謝罪しようとしていたその時、アメジエスが講師を呼び、ルビィネルの言葉を遮った。

「ちよっと調子が悪いみたいで、早退します。すみません」

「あら、そう？ 大丈夫ざあーますか？」

静かに申し出たアメジエスが、コートを出て、すぐ傍に立っ

た講師のもとへと歩み寄り、そつと微笑んで頷き、右手の疑似炎を講師へと手渡す。何言か話すと、アメジエスは講師に一礼し、そのまま演習室を後にした。

「何だあ。アメジエス、調子悪かったんだあ」

「何か、いつもと感じ違ったもんねえ」

「……っ」

周囲を飛び交う魔女たちの会話を聞きながら、コートに一人、取り残されたルビィネルは、何やら考え込むように、目を細めた。

アメジエスは、魔族でありながら、レイヤ国の人間領、  
「ヤール」の生まれであつた。

大層な理由ではない。両親が、魔族にしては財力も魔力もない部類で、レイールに居られるだけの甲斐性がなく、魔力だのの気兼ねのいらぬ、ヤールに住み始めたのだ。何てことはない理由だが、アメジエスにとっては、それは、ひどく劣悪な環境であつた。

「お、魔女だ！ 魔女が来たぞお〜！」

「炎で燃やされるぞお！ みんな、逃げる逃げろお〜！」

「……………」

まだ幼かつた頃、同じ年頃の人間の子供たちは皆、アメジエスを“違う生き物”として捉えた。実際に種族も違うのだから、無理に歩み寄ろうとは思わなかつた。強力な魔炎をその身に宿す魔女を、何の力も持たない人間たちが、恐れもせずに受け入れるはずもない。だから、アメジエスは納得していた。投げかけられる残酷な言葉も、冷たい視線も、自分の周りに誰一人、味方と呼べる者が居ないことも、当然のものとして受け止めていた。当然であるからこそ、無理などしない。努力もしない。それをただ、受け入れていればいいのだと思つていた。

「お、アメジエス〜！」

「マルク」

そう思つていたアメジエスに、やたらと慣れ慣れしく言葉を掛けてくる、同じ年くらいの子供が、ヤールには居た。

「アメジエスも買い物かあ？ おれもラピスに買い物頼まれちゃつてさあ。面倒つたら、ないよなあ」

「家で何にもしてないんだから、買い物くらい、したら？」

「お皿洗いなら、一ヶ月に一回くらいは、してるよあーだ」

その者は、何の偏見もなくアメジエスと接し、アメジエスと言葉

を交わした。それが当たり前のように、自然と、アメジエスのもとへと歩み寄って来た。

「マルクは、気にしないの？」

「何を？」

「私、魔女だよ？」

「うん。知ってるけど？」

アメジエスの問いかけにも、その者は言葉の意味がわかっていない様子で、ただ不思議そうに、首を傾げるだけであった。

「その、何かないの？ 人間じゃないんだあとか、魔炎怖いとか」

「ああー、魔炎！ いいよなあ、アメジエス。魔炎使えるなんて！」

「いい……？」

思いがけない答えが返って来て、アメジエスはただ、戸惑うように顔をしかめる。

「おれも魔炎使ってみたいもん！ おれ、聖地マフレイヤに行くのが夢なんだ！」

マルクは、何の含みもない満面の笑みを、まっすぐにアメジエスへと向ける。

「すべての炎が生まれた場所なんだよ！？ 絶対、キレイな場所だよねー！」

「……っ」

何の偽りもない、ただ純粹に憧れる、透き通った瞳。

「マフレイヤか。大変だと思っわよ。マルク、頭悪いし」

「うるさいなあ！ どうせおれなんて、クラスで一番、頭悪いんだよあー！」

その者は、ただ、当たり前のように、アメジエスの傍に居た

「十年以上も前のこと、よく覚えてるものよね……」

炎技演習の講義を抜けたアメジエスは、早退とは言ったものの、すぐに魔院を出ることはせず、魔院の校舎の屋上へと登り、広がるレイールの町並みを眺めていた。講義中であるからか、辺りは静かで、アメジエスに昔の出来事を、色濃く思い出させてくれる。

「……今日はもうあんまり、あなたの顔、見たくないんだけど」  
屋上の向こうに広がる景色を見つめたまま、アメジエスがそつと  
呟く。

「すまない」

アメジエスの呟きに謝罪を返したのは、屋上の入口付近に立つルビィネルであった。ルビィネルは穏やかな笑みを浮かべながら、屋上の戸を閉め、アメジエスのすぐ隣へとやって来る。

「講義は？ いいの？」

「私の出番は、もう終わったからな」

「それもそうね」

互いに景色を見つめ、目を合わせぬまま、二人が会話を続ける。  
「……すまなかった」

再び謝罪の言葉を口にするルビィネルに、アメジエスが少し、目を細める。

「それは、何に對して……？」

「マルクと、本結でパートナーとなったことに対してだ」

静かに問いかけるアメジエスに、ルビィネルもまた、落ち着いた口調で答える。

「何も知らぬまま、行動を起こしてしまった」

ルビィネルが少し、視線を落とす。

「私があのような、考えなしの行動を取っておらねば、今頃はそんなが……」

「あの時、あなたがマルクのパートナーになっっていなかったとしても、別に、何も変わらなかったと思うわ」

ルビィネルの言葉を遮り、アメジエスが確信するかのよう言い放つ。

「パートナーになって”って、私に言えるなら、もうとっくに私たち、パートナーになってたと思うもの」

「アメジエス」

ルビィネルがやっと振り向き、アメジエスの方を見つめる。アメジエスは相変わらず景色を見つめたまま、どこか遠くを見るような、そんな瞳を見せていた。

「勝手な話よね。言えなかったのは自分のくせに、あなたに当たったりして」

アメジエスが、自嘲するような笑みを浮かべる。

「言えなかった。言えなかったのよね。マルクが何人の魔女に振られても、すごく落ち込んでても、それでも私には、“パートナーになって”の一言が言えなかった」

屋上の柵の上に肘を置き、顔のすぐ前で両手を組みながら、アメジエスが言葉を続ける。

「何故……?」

少し躊躇いながら、ルビィネルが静かに、アメジエスへと問う。

「マルクの夢を、叶える自信がなかったから、かしら」

自分でも言葉を探すように、アメジエスがゆっくりと答える。

「マルクは昔から本当に、聖地マフレイヤに憧れてて、マフレイヤに行くことを、本当に夢見てた」

目を輝かせていた、幼少時代のマルクの姿を思い出しながら、どこか懐かしむように、アメジエスが目を細める。

「でも、私にはそこまで高い志ambitionはなくて、彩炎の魔女になりたいとかも、別に思っていないくて」

アメジエスの表情が、悲しげに曇る。

「だから、怖かった。私とパートナーになることで、マルクの夢を潰してしまうことが。私のせいで、マルクの夢が終わってしまったらと思うと、怖くて、怖くて、だから、言えなかった」

弱々しいアメジエスの声が、風と共にルビィネルの耳に届く。

「言えなかったの……」

もう一度繰り返されるその言葉が、余計に物悲しく聞こえ、ルビイネルはアメジエスから視線を逸らし、その場でそっと俯いた。

「あなたみたいに、“一緒にマフレイヤに行こう”って、私には言えなかった」

空を見上げ、悲しげに微笑むアメジエスを横目に、ルビイネルがそっと、目を細める。

「それは、そなたが、マルクの夢の重さを、知っていたからだろうか？」

「え？」

空を見上げていたアメジエスが、その言葉に、ルビイネルへと視線を移す。

「そなたが、誰よりも、マルクの夢を大切にしていたからだろうか？」顔を上げたルビイネルが、アメジエスをまっすぐに見つめ、優しく微笑みかける。

「誰かに、自分の夢を大切に思ってもらえたら、私なら、とても嬉しいと思う」

ルビイネルの笑みが、少し寂しげに浮かぶ。

「だから、それは、マルクにとって、とても幸せなことだと思う」再び視線を落とし、どこか噛み締めるように呟くルビイネルを見つめ、アメジエスが少し、考え込むような表情を見せる。しばらくの沈黙が続いた後、アメジエスはそっと、口元を緩めた。

「そうだといけど」

短く呟いたアメジエスが、今までの曇りがちな笑みではない、晴れやかな笑顔を浮かべる。

「さつきは、ごめんなさい。演習なのに、無茶しちゃって」「いいやつ」

ルビイネルが首を横に振りながら、大きく微笑む。

「あれはあれで楽しかった。久々にいい汗がかけたしな。またそのうち、手合わせしてくれないか？ アメジエス」

ルビイネルのその笑みを受け、アメジエスがさらに、笑みを深く

「ええ、喜んで」  
する。

夕暮れに、空が赤く染まり始めた頃、魔院の講義を終えた魔士や魔女たちはそれぞれ、帰宅しようとして、魔院の正門を潜り抜けていた。

「ふんふん、へえ、ほお、んん？ ううん……」

正門がよく見える中庭のベンチに腰掛け、教科書を読みながら、納得する声、感心する声、そして唸るような声を次々と漏らしているマルク。眉間には皺が寄り、険しい表情となっている。

「何してるの？」

「うお！」

急に話し掛けられ、マルクが驚きの声をあげる。

「な、何だ。アメジエスか」

マルクの座るベンチの前に立ち、マルクの顔を覗き込むように屈みこんでいるのは、アメジエスであった。アメジエスの姿を確認し、安心した様子のマルクが、教科書を閉じ、膝の上へと置く。

「一瞬、あれだけ必死に撒いたトゥーパが、戻って来たのかと違って、焦ったあ」

「苦労してるわね」

冷や汗を拭うマルクを見て、どこか呆れたような表情を見せるアメジエス。

「ルビィネルを待ってるの？ だったら、もうすぐ……」

「いや、お前待ってた」

「え？」

マルクの答えに、アメジエスが少し戸惑うような声を漏らす。顔を上げたマルクが、真剣な表情を見せ、まっすぐにアメジエスを見つめる。

「今朝のこと。俺、何か無神経なこと言ったんなら、謝ろうと思っ  
て」

向けられる透き通った瞳に、アメジエスがそっと目を細める。

「いや、俺、頭悪いし、神経もたぶん、人より少ないし、何か色々足りなさ過ぎるから、一日必死に考えたんだけど、何が悪かったのかわかんなくって……」

言葉が続けながら徐々に、マルクが顔を俯けていく。

「俺って、わかることと、わかんないことの比率、二対八くらいなんだよなあ」

陰気な空気を纏い、見るからに落ち込んでいくマルクを見つめていたアメジエスが、零すように笑みを浮かべる。

「一対九だと思っわよ」

「どうせ俺には、理解力とか、まるつきり備わってないんだよお！」  
「フフフ」

頭を抱え、嘆いていたマルクが、聞こえてくる笑い声に、目を丸くし、顔を上げる。

「アメジエス？」

「まあ、マルクには一生、わからないでしょうね。ただ単に、私の機嫌が悪かったただけだし」

「機嫌？」

「そう。今朝、髪の毛のセットが、どうしても上手くいかなかったの」

「何だよ、それ」

口を尖らせるマルクを見て微笑みながら、アメジエスが、マルクの座るすぐ横へと腰掛ける。

「考えて損した」

「いい脳ミソの運動になったんじゃない？」

どこか拗ねたように呟くマルクに、アメジエスが悪戯っぽく微笑みかける。

「そういえば今日、炎技の演習でルビィネルと対戦したわよ」

「へえー、魔教科って、そんな講義やってんだ」

「ええ。ルビィネル、すごく強かった。あれなら本当に、彩炎の魔女になれるかも」

一つのベンチに、隣り合って座ったマルクとアメジエスが、正門を通って帰っていく者たちの姿を見つめながら、何げない会話を続ける。

「あいつの彩炎の魔女への意気込み、半端ないからなあ」

「そうみたいね」

感心するように言うマルクの横で、アメジエスが小さく頷く。

「前よりずっと、はっきりと見えてきたんじゃない？」

「へ？」

「聖地マフレイヤ」

戸惑うように首を傾げたマルクに、アメジエスが、マルクがずっと夢見てきたその場所の名を口にする。マフレイヤの名を聞くと、マルクはアメジエスから視線を逸らし、前方を見つめて、穏やかな笑みを浮かべた。

「そうかも」

「ルビィネルのお陰ね」

「うん」

アメジエスの言葉に、マルクが素直に頷く。

「後は、お前のお陰かな」

「え？」

思いがけないマルクの言葉に、アメジエスは少し驚いた様子で、マルクの方を振り向いた。

「私が？　なんで？」

「お前、言わなかったから」

「言わな、かった……？」

振り向いたマルクに、アメジエスが困惑の表情を見せる。

「うん。俺が聖地マフレイヤに行くのが夢だっただけならさ、皆が皆、言っただよ。“行けるはずがない”って」

そつと空を見上げたマルクが、どこか懐かしそうな笑みを浮かべる。

「けど、お前だけは、言わなかった」

「そう？ 言わなかった？」

「言わなかったよ。“大変だと思う”とか、“苦労するよ”とかは言っただけど、“行けるはずがない”とは、絶対に言わなかった」

自身の記憶すら曖昧で、首を傾げるアメジエスに対し、マルクが確信を持って答える。

「だから、ギリギリのところ諦めずに済んで、今、まだこうして、夢見てられるんだと思う」

笑みをより大きくし、マルクが改めて、アメジエスの方を見る。

「だから、サンキューな。アメジエス」

向けられるマルクの笑みに、アメジエスが目を細める。

それは、マルクにとって、とても幸せなことだと思う

「だったら、いいな……」

「へ？」

「いいえ」

聞き返すように首を傾げたマルクに、アメジエスがそつと首を横に振る。

「お礼なら、もう少し成長してから言ってくれないかしら？」

「どうせ俺は、まだ放出も満足に出来ませんよぉー」

いつものように陰気な雰囲気纏い、落ち込んだ様子で呟くマルクを見て、アメジエスは嬉しそうに微笑んだ。

翌日。レイール聖魔院、第八講義室。

「やあ、今日も眩いばかりの美しさだねえ！ 我が魔女、アメジエス！」

相変わらずの堂々とした、大きな立ち振る舞いで、今日もアメジ

エスの居る講義室へと現れたフランを、マルクやポンドたちが、呆れた様子で見つめる。

「光のように鮮烈で、闇のように深い魅力を持つこの僕でさえ、君の美しさには、眩暈がするよ!」

「医務室行け、医務室」

眩暈のしている動作を見せるフランに、ポンドがひっそりと呟く。

「さあ、アメジエス! 今日という今日こそ、花のように麗しく、風のように爽やかなこの僕の、パートナーになってくれたまえ!」

「いいわよ」

「そうか。今日もやはり、パートナーになる気には……って、へ?」

一度は元気をなくしかけたフランであったが、あまりにもあっさりと放たれたアメジエスの答えを思い返し、言葉を途中で止め、ひどく困惑した様子で、アメジエスの方を見る。

「アメジエス、今、何と……」

「いいわよ。パートナー、なってあげる」

「……………」

もう一度放たれたアメジエスの答えに、あまりにも衝撃が走ったのか、フランがすべての動作を止め、しばらくの間、固まる。

「ほ、本当に……?」

「嫌なら、別にいいけれど」

「嫌なはずないじゃないか!」

「じゃあ、契約成立ね」

そつと微笑みかけるアメジエスに、フランが大きく目を見開き、全身をわなわなと震え上がらせる。

「今日という日よ、ありがとおおー!」

「うるさいよ」

窓の外に向かって全力で叫ぶフランに、マルクが思わず突っ込む。

「僕とアメジエスの門出だ! 盛大に祝いたまえ、最下級魔士!」

「だから、名前で呼べっての!」

「まあまあ」

偉そうに言い放つフランに、席を立ち上がり、怒鳴りあげるマルクを、隣の席に座るルビィネルが、落ち着いた様子で宥める。

「んでえ？」

マルクとルビィネルが、フランとあれこれと言いつている間に、アメジエスの横に腰掛けたポンドが、探るように、アメジエスの顔を覗き込む。

「どついう心境の変化なわけ？」

「別に」

ポンドの問いに素っ気なく答え、アメジエスが微笑む。

「ただ、叶えてあげられないなら、せめて、見守りたいって思っただけ」

微笑んだアメジエスが、フランに怒鳴りあげているマルクを見つめる。

「見守るなら、それなりに近いところに居ないとね」

「フランはあくまで、そのための手段ってことねえ〜あああ、魔女って怖いっ」

「いいじゃない？ 彼はすごく喜んでるし」

呆れたように肩を落とすポンドに、アメジエスがどこか、含んだような笑みを浮かべる。

「けつど大概、アメジエスも一途だよなあー。俺と一緒に！」

「ポンドと一緒にされたら、私の一途の価値が下がるわ」

「ええ〜？ それ、マルクにも同じこと、言われたんだけどお」

冷たく言い放つアメジエスに、ポンドが落ち込んだ様子で、目尻を下げ、顎を机へと付ける。

「見守る、か……」

自身の発した言葉を繰り返して、アメジエスが感慨深げな表情を見せる。

「まあ、こんなこと」

アメジエスが再び視線を動かし、フランと話しているマルクを見る。

「あなたには、言わないけれど」  
誰にも聞こえない声で呟き、アメジエスはどこか、楽しげに微笑んだ。

レイール聖魔院、第五演習室。

「ハハハハ！ 炎技演習参加者、諸君よ！ 蝶のように軽やかで、蜂のように鋭い、僕とアメジエスの素晴らしいコンビネーションに、酔いしれないようにしたまえよ！」

集まった講義参加者たちの最前列で、演習室中に響き渡る声を発し、堂々とした立ち振る舞いで言い放つフラン。そんなフランを、他の魔士や魔女たちは、呆れ切った表情で見つめる。

「ウザっ」

美しい顔を勢いよくしかめ、思わず言葉を発するトゥーパ。

「何とかしろよ、アメジエス」

「嫌」

マルクの呼びかけに、アメジエスは二秒とかかることなく答える。  
「嫌って、お前のパートナーだろ？」

「私がパートナーにしたのは、魔士としての彼の技能だけ。彼の人間性にまで、責任持てないわ」

「うわぁー、キツパリ」

アメジエスのはつきりとしたもの言いに、思わず表情を引きつらせるマルク。アメジエスはつい先日、今までずっと断り続けていたフランと、パートナー契約を行った。契約は、マルクとルビィネルのような無期限契約の本結ではなく、いつでも解除可能の偽結による契約である。それにより、パートナーを組んだ魔士と魔女のみ参加出来る、炎技演習の授業にも、マルク、ルビィネルと共に参加を始めたのだ。だが、長い間、焦がれていたアメジエスとパートナーとなり、有頂天状態のフランとは異なり、アメジエスの様子はとても冷めていた。

「おいおい、その最下級魔士！」

「だから、名前で呼べってば」

力強く指差してくるフランに、マルクがうんざりした表情を見せる。

「慣れ慣れしく、我が魔女に話しかけないでくれたまえ！」

「私の交友関係に口を挟むようなら、パートナー契約、解除するわよ」

「どんどん、仲良くするがいい！」

「もう何々だよ、お前……」

アメジエスの脅しのような忠告に、あっさりと主張を覆すフランを見て、呆れたように肩を落とすマルク。

「とりあえず、うっせえ！」

「痛！」

皆の最前列に立っていたフランの後方から、ブラッドスが勢いよく、フランの後頭部を殴りつける。

「僕の繊細かつ、有能な頭に、何をしてくれるんだい！」

「さつきから、うっせえんだよ。どんだけ講義の邪魔したら、気が済むんだ」

非難するように振り返ったフランを、ブラッドスが鋭い目つきで睨みつける。

「これ以上、騒ぐようなら、俺の講義、出禁にすつからな！」

「授業拒否というやつだな」

ブラッドスの言葉を聞いたルビィネルが、どこか納得するように呟く。だが、ブラッドスの言葉がきいたのか、フランはそのまま大人しくなり、最前列から下がると、アメジエスのすぐ隣へと並んだ。「今日は昨日の続きで、炎技の一つ、“ねんしょう燃焼”の演習をやる。各自、散らばって、練習してみろ」

ブラッドスが講義参加者へ、少し適当とも取れる指示を送ると、皆それぞれ、魔士と魔女の二人一組となって、広い演習室へと散っていく。

「また燃焼かあ」

「放出も出来ていないのにな」

「放つとけ」

からかうようにそう言つて、微笑みかけるルビィネルに、マルクがしかめっ面を向ける。

「“燃焼”は、体内を流れる魔炎を活性化させ、自身の体を強化する炎技だ。魔炎操作は体内のみだから、ある意味、“放出”より簡単かも知れないぞ」

「まあ、そう言われて希望を持つて、やってみたものの、昨日は出来なかつたけどな……」

励ましのようなルビィネルの言葉に、マルクが暗い表情で答える  
と、皆にまぎれ、二人も、人の居ない位置へと移動しようと足を踏み出す。

「ああ、マルク・クラウド」

「へ？」

不意にブラッドスに名を呼ばれ、マルクが踏み出した足を止め、振り返る。

「お前、明日、俺がやる特別課外講義の手伝いだから、朝、レイール西広場に六時集合な」

「特別課外講義？」

「ああ」

「何々？ 何、それえ？」

マルクへの言葉であったというのに、マルク以上の興味を示し、トウーパが身を乗り出して、ブラッドスへと問いかける。

「シリング・ウェーガットのパートナー選出だ」

「パートナー選出？」

「ああ。つたく、何だつて俺が、んな面倒臭い講義しなきゃなんねえんだかつ」

ブラッドスが不愉快そうに顔をしかめ、右手で乱雑に頭を掻く。

「そういえば、魔女科に回覧来てたやあ。最上級魔士シリングのパートナーを決めるから、希望魔女は特別講義に参加しろつて。そっか、明日だつけえ」

「けど、最上級魔士さんのパートナーは、魔院が直々に厳選するんじゃないかった？」

「その厳選作業で揉めたから、結局、実力試験的な講義を行って、決めることにしたんだと」

「へえ。まあどつちにしろ、すごい特別扱いよね」

ブラッドと会話をしながら、アメジェスが感心するように言う。

「ちょ、ちょっと待てよ！ 何だって俺が、最上級魔士のパートナー選びの手伝いなんて、雑務をやらされなきゃいけないんだよ！」  
少し怒ったような表情を見せたマルクが、抗議するようにブラッドに食ってかかる。

「お前、この前の俺の講義でやった筆記試験の、注意書き、読んでねえだろ？」

「注意書き？」

「ああ。ちゃんとここに」

ブラッドスが懐から一枚の回答用紙らしきものをだし、マルクの前へと提示する。

「尚、この試験の点数が最下位だった者に、今度の特別講義の手伝いを命ずる”って、な？」

「ホントだ」

注意書きを確認し、頷くマルク。

「お前の筆記試験の結果は、百点満点中、十八点。四十七人中、堂々の最下位」

「……………」

クラスの試験順位表を目の前に見せつけられ、マルクが何も言い返すことが出来ぬまま、固まる。

「何だ。そなた、炎技だけでなく、頭の出来も悪いのか」

「だああああ！ どうせ俺なんて、頭脳も技量も、何もない奴なんだよおー！」

ルビィネルの一言をきっかけに、マルクがまたいつものように、頭を抱えて嘆き散らす。

「パートナーのお前も手伝え。丁度、もう一人くらい、人手が欲しかったからな」

「ああ、それは構わぬが」

「えええー、楽しそう！ マルクが行くなら、トウーパも行くっかなあ！」

「お前は来なくていい」

ウキウキと声を弾ませるトウーパに、ブラッドスが冷たく言い放つ。

「んじゃ、明日六時な。遅れんなよ」

もう一度、確認するように言くと、ブラッドスが、すでに練習を始めている講義参加者たちの方へと歩き出していく。ブラッドスの去っていく姿を見ながら、マルクは深々と肩を落とした。

「はあゝあ。何だって俺が、そんなことを……」

「良いではないか。特別講義など、滅多に見られぬのだから」

「誰も、あの最上級魔士が、山ほどの魔女に囲まれて、偉そうにパートナー選びしてるところなんて、見たくないっての」

明るく言うルビィネルに対し、マルクはうんざりした様子で口を尖らせる。そんなマルクを見て、少し困ったような表情を見せるルビィネル。

「それほどに凄い魔士なのか？ そのシリング何とやらというのは」

「ええ。頭や炎技の実力は勿論、顔まで良くて、魔院中の魔女たちの憧れの的なのよ」

「まあ確かに、山のように高く、海のように広い人気を誇るこの僕と、人気を二分するほどだからね！ 彼は！」

解説するアメジェスの横で、誰も耳を傾けていないというのに、声を張り上げるフラン。

「同年だし、同じ頃に魔院に入ったから、昔からよく、最下級魔士のマルクの、比較対象にあげられてたのよねえ」

「マルクにとっては、これ以上ないコンプレックスということか」  
深々と溜息を吐いているマルクの姿を見ながら、ルビィネルもそ

っと、息を落とした。

翌日、朝六時。レイル西広場。

「遅せえ！」

揃って現れたマルクとルビィネルに対し、すでに広場へとやって来ていたブラッドスは、不機嫌極まりない表情で言い放った。

「何でだよ？ ちゃんと六時に来ただろ？」

「こういう課外何たらの時は、ワクワクしちゃって、五分前には集まるのが常識だろうが！」

「そんな常識、聞いたことないよ！」

怒鳴りあげるブラッドスに、マルクも負けじと声を張る。

「ああー、まあいい。今日はスケジュールが詰まってるんだ。お前等、この名簿見て、とつとと魔女共の出欠確認しろ」

荒っぽく答えたブラッドスが、マルクへと、一枚の紙を渡す。その紙には、魔女のものらしき名前が、びっしりと並んでいた。

「こ、こんなに居るのかよ。あいつのパートナーになりたいって魔女は」

「まあ見た限り、魔院中のほとんどの魔女が、参加しているようだな」

「見た限り？」

すぐ隣のルビィネルの言葉に、戸惑うように顔を上げるマルク。

顔を上げたその瞬間に、マルクは大きく目を見開き、驚きの表情を見せた。広めの演習室ほどの大きさのある、そのレイル西広場に、ほぼ隙間なく、所狭しと、魔女たちが集まっている。予想以上の参加者の多さに、思わず茫然としてしまうマルク。

「凄まじい人気だな。九十九人に振られた魔士とは、偉い違いだ」

「うるさいなあ」

感心するように、集まった魔女たちを見回しているルビィネルに

対し、マルクが拗ねるように唇を尖らせる。

「というか、確か、もうパートナーが居たんじゃ……っっていう魔女まで参加してるけど」

「最上級魔士が手に入ったら、乗り換えるんだろ？ 魔女にとって魔士なんて、道具みたいなもんだからな」

「ひどっ」

ブラッドスの言葉に、思わず肩を震わせるマルク。乗り換えられる魔士の心情を思うと、堪らないものがある。

「ま、魔士にとっても、魔女はただの力。酷いのは、同じだけどこか悲しみのようなものが滲んだ、ブラッドスのその言葉に、マルクが戸惑うように首を傾げる。

「シリングくんよお！」

「きゃああ！ シリングくうーん！」

集まった魔女たちからあがる歓声に、マルクたちが一斉に振り向く。すると、広場の入口から、ゆっくりとした足取りで、マルクたちの元へと現れる、シリングの姿があった。鋭い青色の瞳は、今日もどこか冷たい。シリングが、ブラッドスのすぐ前へとやって来る。「すみません。少し遅れました」

「まあ、お前は講義参加者じゃねえからな。大目に見てやるよ」

ブラッドスへの挨拶が終わると、シリングが次に、マルクとルビイネルの方へと視線を移した。

「お前たちは……」

二人の姿を見て、シリングが見覚えでもあったのか、そつと眉をひそめる。

「ああ。こいつらは、今日の特別講義の手伝いだ」

「手伝い？ そうか。講義のあるところを、俺のためにすまない。今日はよろしく頼む」

「へ？ あ、ああ。よろしく」

丁寧な言葉を掛けてくるシリングに、マルクが少し拍子抜けしたような表情となりながらも、慌てて答えを返す。

「適当に見学していいですか？」

「ああ。用があつたら、また呼ぶ」

「お願いします」

ブラッドスに深々と頭を下げると、シリングは、広場中の魔法の視線を集めたまま、歩き去っていった。

「紳士ではないか。あのフランとかいう者より、余程、好感が持てるぞ」

シリングの後ろ姿を見送って、ルビィネルが気持ちのいい笑顔で、マルクへと話しかける。

「だからズルいんだよ。頭も顔もいいのに、性格までいいなんてさ」

「そなたなど、どれも良くないのにな」

「どうせ俺は、頭悪いし、顔普通だし、性格捻くれてんだよぉー！」

「いいからお前等は、とつとと出欠確認に行け！」

嘆いていたところを、ブラッドスに怒鳴りあげられ、マルクとルビィネルが、追い立てられるようにして、広場に集まった魔法たちのところへと駆け寄っていく。

「ああー、では出席を取りまーす。名前を呼ばれたら、返事をして下さい」

マルクが名簿の順に、魔法の名を呼んでいき、聞こえたものの名に印をつけていく。ざっと百人は居るのだろうか。これほど集まれば、返事も聞き取りづらいかと思つたが、皆、気合い十分なのか、どこまでも届くほどの大きな返事を響かせた。

「次、サファイさん」

「サファイ？」

マルクの呼んだ名に、ルビィネルが首を傾げる。

「あれ、サファイさん？ 居ませんか？」

「居るわよー！」

「うわっ」

一度目の呼びかけに返事がなく、二度目の呼びかけをしたマルクのすぐ耳元から、聞こえてくる大きな返事。思わず耳を押さえながら

ら、マルクが振り向くと、そこには青いショートカットに、大きな金色の瞳の少女が立っていた。少スキつそうな目つきではあるが、少女はきれいな顔立ちをしている。袖なしの青色シャツに、白色の短いパンツ姿という、魔女にしてはラフな装いであった。首には、魔女が皆巻いている、青色のリボンが巻かれている。細身のルビィネルよりも、さらに細い、小柄な体型の魔女だ。

「あ、居たのか」

「ちよつと席外してただけ。つてか、出欠取るなら、でっかい声でそう言いなさいよね！ たまたまその場に居なかつただけで、欠席になんかされたら堪んないわ！」

「はあ、すみません」

物凄い剣幕で言い放つサファイに、理不尽な気もするが、言い返す氣力が湧かず、マルクは大人しく謝罪をする。

「相変わらず、文句の多い女だな」

「何ですつて!？」

すぐ近くから聞こえてくる悪口に、サファイが勢いよく振り向く。「つて、ルビィネル!？」

「久し振りだな、サファイ」

振り向いた先に立っていたルビィネルを見て、サファイが大きく目を見開く。よく知った様子で、互いの名を呼ぶルビィネルとサファイに、不思議そうに首を傾げるマルク。

「なんで、あんたがここに居んのよ!？ あんた、フレイ……! 痛ったあ!」

ルビィネルが、思いきり、サファイの足を踏みつけ、サファイの言葉を途中で、強制的に終わらせる。

「何すつ……!」

「余計なことを言ったら、燃やす」

「……はい」

文句を言おうとしたサファイに、ルビィネルが冷たい表情を向け、マルクには聞こえないような小さな声で脅すように言い放つ。する

と、サファイの表情が一気に凍りつき、サファイは大人しく頷いた。「知り合い、なのか？」

二人の様子に疑問を抱き、少し表情をしかめながら、マルクがルビィネルへと問いかける。

「ああ。フレイヤに居た頃の、顔見知りだ」

逆に怪しいほどの満面の笑顔を作り、マルクへと答えるルビィネル。

「何？ あんたこそ、この頭の悪そうな魔士と知り合いなわけ？」

「どうせ俺なんか、見た目通り、頭悪いんだよぉー！」

サファイからルビィネルへの問いかけに、またしても傷つき、陰気な空気を発するマルク。

「私のパートナーだ」

「パっ!？」

ルビィネルからの答えに、サファイがさらに大きく目を見開く。

「正気!? パートナーなんか作って、あんた、サード二つ……! 痛ったあぁい!」

またしても足を踏みつけられ、強制的に言葉を終了させられるサファイ。

「余計なことは言つたと、言っているだろう……?」

「すみません……」

ルビィネルからの、マルクには聞こえない小さな脅しに、身を震わせながら、力なく謝るサファイ。

「そなたこそ、何故、このような場所に居るのだ？ そなたはフレイヤの聖魔院に通っていたはずだろう？」

「パパにお願いして、フレイヤに許可出してもらって、特別に、この講義に参加させてもらったのよ」

「この講義に？ わざわざフレイヤから？」

「そう。このレイール聖魔院で、シリング・ウェーガットのパートナー選びに、特別講義を実施するって聞いたから、慌ててね」

目を丸くするマルクに、サファイが胸を張って答える。

「何だ。そなたも、最上級魔士を手に入れたい口か」

「その辺の魔女と一緒にしないでよね！」

呆れたように言い放ったルビィネルに、どこかムキになって言い返すサファイ。

「私は、ずっと前から、シリングのこと……！……！……って、こんな話、あんたたちにしても仕方ないか」

吐き出そうとした言葉を途中で呑み込み、サファイが一つ、深く息を吐く。

「とにかく、私の邪魔はしないでよね！」

偉そうにそう言い切ると、サファイはマルクたちに背を向け、足早に、他の魔女たちの中へと入っていった。

「変わった友達だな」

「別に友達ではない。たまたま、家同士が古くからの知り合いなだけだ」

「へえ、そうなんだ」

「おい、お前等！ 出欠取れたか！？」

マルクとルビィネルが言葉を交わしていると、後方から、ブラッドスが歩み寄って来る。

「いや、まだ六人目」

「何してんだよ！ スケジュール詰まってるって、言ってるんだろ！ とつとと取りやがれ！」

「はぁーい」

ブラッドスの怒鳴り声に、マルクはやる気のない返事を返した。

ブラッドスに急かされるようにして、出欠を取り終えたマルクとルビィネルは、続いて、実際の講義の準備に借り出された。今回の特別課外講義の内容は、大きく分けて、三つ。まず一つ目は、魔力測定。その名の通り、魔女たちが身に秘めている魔力を測定する。その魔力測定により、魔力の高かった三十名のみが、次の講義内容へと進めるのだ。

「これが魔力測定器だ。三人で分かれて、一人ずつ個別に、測つてくぞ」

「了解」

説明と共に、ブラッドスから渡されたのは、置き時計のような、大きな目盛りの横に、手の甲がギリギリ入るほどの狭い間しかない持ち手のついた、黒い機器であった。

「ふうーん、これが魔力測定器かあ」

見たことのない機器を前に、マルクが興味深げに、まじまじと見つめる。導かれるように、魔紋の刻まれた右手を差し込み、持ち手をそつと握り締めた。

ビィー！

「うおっ！」

強烈な機械音が鳴り響き、測定器の目盛りが一気に振り切れたかと思うと、また針が戻り、文字盤の中をぐるぐると回転し始める。

「な、何だあ？」

「何、やらかしてんだよ！ ったく」

持ち手から手を離しても、針の回転が止まらない測定器を見つめ、困った表情を見せるマルクのもとへと、ブラッドスがやって来る。

「最下級魔士の魔力なんか測らせるから、壊れちまっただろっが」

「どうせ俺の魔力は、精密機器でも測れないほどに、わずかだよ！  
微量だよ！ 微塵だよ！」

少し涙目で嘆くマルクから、ブラッドスが測定器を取り上げる。  
「予備持ってきといて、正解だな。ほら、こっちでとっとと測って  
来い」

「うっう……」

新しい測定器を手渡し、まだ落ち込んでいるマルクを、ブラッド  
スが魔女たちのもとへと追いやる。マルクから取り上げた、まだぐ  
るぐると回転している測定器を見つめ、そっと目を細めるブラッド  
ス。

「完全に振り切れてやがんな……」

そう呟き、ブラッドスが表情を曇らせる。

「最下級のあいつが、んな大層な魔力持ってるはずもねえし、あいつの魔紋から、パートナーの魔力が漏れ伝わってきたってとこか」  
ブラッドスが視線を移し、すでに魔女たちの魔力測定を開始しているルビィネルの姿を捉える。

「漏れ伝わった魔力だけで、測定器イカらせるなんて、恐ろしいねえ」

ルビィネルを見つめたまま、ブラッドスはどこか、浮かない表情を見せた。

その後、マルクたちにより、集まった全魔女の魔力測定が行われ、上位三十名が選出された。さらに、昼食の後、その三十名により、疑似炎を用いた、炎技の実演が行われ、ブラッドスの審査により、十名まで、魔女が搾られた。朝六時から開始から開始された特別課外講義も、午後四時を回り、夕暮れに差し迫ろうとしていた。

「折角、シリングくんとパートナーになれると思ってたのに！」

「残念だなあ」

「ほらあー、紛らわしいから、選考から外れた奴は、とっとと帰れ」

最終選考に残った魔女以外の魔女たちは、各々に残念がりながら、ブラッドスの言葉を背中に浴び、帰路へとつく。広場を埋め尽くすほどに居た魔女も、十名まで減り、漸く、広場全体が見渡せるほどになっていた。

「何だ。そなたも残ったのか」

「当然でしょっ」

感心したように言うルビィネルに、しかめっ面で答えるサファイ。最終選考に残った魔女の中には、サファイの姿があった。

「ああ、もうすぐ夕方じゃねえか。これからがメインだったのによ」

「メイン？」

「ああ、最終選考だ」

マルクと共に、残った十名の魔女が見つめる中、ブラッドスが説明を始める。

「最終選考は、この広場に隣接する、レイールの森を舞台に、ある生き物を搜索してもらう」

「ある生き物？」

「こいつだ」

ブラッドスが懐から取り出し、皆へと見せたのは、一枚の写真であった。その写真には、一匹の茶色に猫が写っている。猫にしては、耳が長く、牙も鋭い。目も赤色で、珍しい外見をした猫だ。

「まあ皆、知っていると思うが、“まひょう魔猫”と呼ばれる、魔物の一種だ」

「え！？ 魔物！？」

ブラッドスの言葉に、その場でただ一人、驚くマルク。一気に集まる視線に、マルクが申し訳なさそうに俯く。

「すみません……」

気まずいその空気に、思わず謝るマルク。

「ああー、お前たちには、森のどこかに居る魔猫を捜してもらおう。捜し当て、俺のところまで連れ帰ってきた者を、シリング・ウエー

ガットのパートナーとする」

俯いたマルクをそのままに、ブラッドスが説明を続ける。

「魔猫は一匹。つまり、この試験をクリア出来る魔女は、一人だけだ」

「真正正銘、最終選考というわけか」

説明するブラッドスの横で、ルビィネルが納得するように頷く。

「魔猫は大人しい魔物だが、捕まえようとする者には攻撃する可能性もある。よって、魔炎の使用を許可する。勿論、自分が倒れない程度にな」

忠告するように言い放つブラッドスに、魔女たちが皆、真剣な表情を見せる。

「制限時間はない。その他ルールも、特にない。説明は以上だ。各自、森に移動し、魔猫の捜索にあたれ」

ブラッドスが説明を終えると、魔女たちは素早く身を翻し、我先にとこぞって、森へと駆け出していった。広場に魔女たちが居なくなり、その場に、マルク、ルビィネル、ブラッドスの三人だけが残る。

「さあーて、しばらくは待機だ。お前等も、朝からご苦労だったな。休んでていいぞ」

「はあー、やっと休憩かあ」

解放感からか、一気に肩の力を抜くマルク。

「俺、休憩所でちょっと、寝て来ていい？ 朝早かったから、眠気がすごくて」

「勝手にしろ。その代わりに、起きて来なかったら、置いて帰るからな」

「わかったあ」

大きな欠伸をしながら、すでに眠る態勢を整えるような、気の抜けた声を漏らして、ブラッドスへと返事をする、マルクは休憩所へと向かうべく、そのまま広場を後にした。

「私も暇だから、向こうの池でも見てくるかな」

マルクに続くように、ルビィネルもその場から離れようとする。そんなルビィネルを見て、ブラッドスが鋭く、目を細める。

「お前さ」

ブラッドスの声に、去ろうとしていたルビィネルの足が止まる。振り返ったルビィネルは、ブラッドスから向けられる鋭い眼差しに、構えるように、真剣な表情を作った。

「何がしたいの？ 一体」

シンプルなその問いかけに、少し間を置いた後、ルビィネルがそつと、口元を緩める。

「私は、“彩炎の魔女”になる。それだけだ」

曇りのない笑みを浮かべ、はつきりと言い放つと、ルビィネルはブラッドスに背を向け、その場を去っていった。最終的に、広場に一人残ったブラッドスが、少し抱えるように、右手で頭を押さえる。

「彩炎の魔女、ねえ……」

ルビィネルの口にしたその言葉を繰り返し、ブラッドスは、神妙な表情を見せた。

「ふわあゝあ、ホントに眠いなあ」

また大きな欠伸を漏らしながら、マルクが、広場の入口を出て、すぐ右方にある休憩所へと向かう。休憩所は、小さな広場に、幾つかベンチが並んでおり、水飲み場なども用意されていた。

「あつ……」

人気のないその休憩所に、先客を見つけ、マルクが少し驚いたような表情を見せる。休憩所のベンチの一つに腰掛け、のんびりと本を読んでいるのは、朝見かけて以来、見ていなかった、今日の講義のある意味の主演である、シリングであった。マルクの声に気付いたのか、シリングが本から目を離し、顔を上げる。

「特別講義、終わったのか？」

「え？ い、いや、まだ。今、最終選考中」

「何だ、まだ終わらないのか」

マルクの答えを聞くと、シリリングがどこか、うんざりしたように顔をしかめ、再び本へと視線を戻す。その様子を見て、マルクは眉をひそめた。

「適当に見学してるんじゃないのか？」

水飲み場の方へと移動しながらも、マルクが、少し責め立てるように、シリリングへと問いかける。

「魔院が勝手に、一番有能な魔女を選出してくれるんだ。別に俺が見る必要もないだろう」

その言葉に、さらに表情を曇らせたマルクが、勢いよくシリリングの方を振り返る。

「け、けど皆、お前のパートナーになるんだって、凄い、張り切ってる……！」

「必要ない」

何とか魔女たちの頑張りを伝えようとするマルクであったが、その言葉は、シリリングによって、あっさりと遮られてしまう。まるで興味がないように、本を読み続けるシリリングの姿に、マルクが唇を噛み締める。

「お前のために一生懸命、頑張ってる魔女たちを、見てやろうとも思わないのかよ！？ お前は！」

張り上げられたマルクの声に、シリリングがまた、ゆっくりと顔を上げる。怒りを見せるマルクに対し、シリリングはひどく冷え切った視線を、マルクへと向けた。

「“最下級魔士”マルク・クラウド」

「え？」

シリリングが呼んだ自分の名に、マルクが驚いた表情を見せる。自身は対照的存在である、“最上級魔士”のシリリングが、自分の名を知っているなどは、思ってもみなかったからだ。

「苦労してやっと、パートナーを得たばかりのお前には、“魔女”

という存在が、貴重なものに見えているのかも知れないが……」  
読んでいた本を力強く閉じ、シリリングがまっすぐに、マルクを見つめる。

「魔女は所詮、俺たち“人”が、魔炎という強い力を得るための、道具に過ぎない」

突き刺すようなシリリングの言葉に、マルクが思わず表情をしかめる。

「それは、魔女にとっても同じだ。俺たち“魔士”は所詮、魔女が己の力を誇示するための道具」

マルクが今朝、同じようなことを言っていた、ブラッドスのことを思い出す。だが、どこか悲しげであったブラッドスとは異なり、シリリングの言葉はひどく冷たく、そこに、感情は見えない。

「道具に、情をうつす必要はない」

冷たいその言葉は、何か確信を持っているようにすら、聞こえた。「それが、互いのためだ」

はつきりと言い切られたシリリングの言葉を聞き終え、マルクが厳しい表情のまま、ゆっくりと顔を上げ、その突き刺すようなシリリングの視線に、憶することなく、まっすぐにシリリングを見つめる。

「だから、誰がどれだけ頑張ろうと、誰がパートナーに選ばれようと、見る必要はない？」

「ああ」

迷うことなく頷くシリリングに、マルクがまた、強く唇を噛んだ。

「俺、勝手に、昔から、“最上級魔士”のお前に憧れてたけど……」  
俯いたマルクが、少し低い声を漏らす。そして、勢いよく顔を上げると、マルクは、まるで睨みつけるように、シリリングを見た。

「全件撤廃！ もう二度と、憧れてなんかやらないからな！」

決まっているのかもわからない捨て台詞を残して、マルクはシリリングに背を向け、怒りの表れた足音を響かせながら、休憩所から去っていった。去っていくマルクの背中を見つめながら、シリリングがどこか、啞然とした表情を見せる。

「それを言うなら、前言撤回、じゃないのか……?」  
シリングは、もうマルクには届かぬ訂正を、そつと漏らした。

「あー！ 全件撤廃じゃなくて、前言撤回だった！ 間違えたあー！」

休憩所を出たマルクは、怒りのままに歩を進めていたが、不意に足を止め、自身の間違いに気づき、その場で勢いよく頭を抱える。

「ヤバい！ 絶対、馬鹿にされる！ やっぱりこいつ、馬鹿なんだつて思われる！ うわあー！」

脳内に、嫌味ったらしく間違いを指摘するシリングの姿を浮かべ、さらに深く頭を抱えるマルク。

「どうせ俺なんて、脳みそ足りない、最下級魔士なんだよあー！」  
「騒々しいなあ」

「うわあ！」

突然、すぐ傍から聞こえて来たその声に、マルクが思わず、驚きの声をあげる。マルクがすぐさま振り向くと、そこには呆れ顔を見せたルビィネルが立っていた。

「何だ、ルビィネルか」

「こんなところで、何を一人、ネガティブになっているのだ？」

「こんなところ？ あっ」

ルビィネルにそう言われ、マルクが今居る場所を確認するべく、周囲を見回す。辺りに見えるのは、鬱蒼とした木々ばかり。先程まで居た広場や、休憩所のように、ひらけた景色は一切見えず、ただどこまでも木々が広がっている。

「何だ、適当に歩いてるうちに、森に入っちゃったのか」

怒りのままに歩を進めていたため、気付かなかったが、恐らくここは、今まさに、最終選考が行われている、広場に隣接されていた森の中だろう。徐々に日も落ち始め、何の明かりもない森は、不気味な暗闇に包まれ始めている。

「何かあったのか？」

「へ？ い、いや、別に」

ルビィネルの問いかけに、マルクが誤魔化すように、首を横に振る。あのシリングに捨て台詞を吐いてきた上に、その台詞が間違っていたなどと、情けなさ過ぎて、ルビィネルにすら、話す気になれなかった。

「お前こそ、こんなところで何してるんだよ？」

「暇だから、池でも見に行こうと思ったのだが、いつこうに池に辿り着かなくてな」

「池と森じゃ、真反対じゃないか。相変わらず、方向音痴……」

笑顔で答えるルビィネルに、マルクが少し呆れた表情を見せる。

「まあとりあえず、森出ようか。最終選考の邪魔になったら、悪っ

……」

「キヤアアアア！」

「……っ！」

森の奥から、突如聞こえてくる、女性の悲鳴に、マルクとルビィネルが険しい表情となって、すぐさま顔を上げる。少しばかり驚いた、という悲鳴ではない。明らかに何か、良からぬ事態が起こっている悲鳴であった。

「ルビィネル！」

「ああ、行こう！」

真剣な表情で頷き合い、マルクとルビィネルは、悲鳴の聞こえて来た森の奥へと、駆け出していった。

「アハハハ」

森の上空に浮かび、何やら楽しげな笑みを浮かべているのは、茶色い髪に、金色の瞳をした、魔士の制服を纏った青年。数日前、マルクとルビィネルのことで苛立つトウーパに近付いた、あの青年であった。

「さあ、遊ぼう」

青年が誘うように、右手を挙げる。  
「ルビィネル」

マルクたちが森の奥へと駆け抜けていくその間にも、日はどんどんと傾いていき、夕暮れの赤い光も徐々に薄れ始め、森の暗闇が深みを増していく。その暗闇により、増す不気味さが、マルクたちの中の嫌な予感を、膨れ上がらせた。険しい表情を見せ、額から汗を流しながら、木々を掻き分け、必死に、悲鳴の聞こえてきた方へと急いでいると、別方向から、同じ方向へと駆けていく足音が聞こえた。その音に、マルクとルビィネルが身構える。

「誰だ!？」

「誰!？」

勢いよく重なるマルクと、もう一つの声。

「サ、サファイ」

「何だ、あんたたちが」

威嚇するような大きな声を発し、身構えるようにして、二人の前へと現れたのは、サファイであった。二人の姿を見て、サファイが、気の抜けた様子で肩を落とす。

「私の邪魔はしないでって、言ったじゃない」

「別に、邪魔しようと思って、来たわけじゃないって。俺らは、悲鳴が聞こえたから、慌てて……」

『キヤアアア!』

マルクとサファイが会話をしていた矢先、またしても女性の悲鳴が、二つ重なるようにして、森の中へと響き渡る。その悲鳴に、三人の表情が一気に強張る。

「向こうか!」

「あっちね!」

「へ? あ、お、おい! ちょっと、待って!」

すぐさま、悲鳴の聞こえてきた方へと駆け出していくルビィネルとサファイを、マルクが慌てて追っていく。勢いよく森の奥へと、

三人が駆け抜けていくと、やがて、木々のない、少しひらけた場所へと辿り着いた。そこに、倒れている人影が見える。

「お、おい！ 大丈夫か！？」

倒れている人影へと、慌てて駆け寄るマルクたち。その場に倒れているのは、全部で三人。すべて、最終選考に残った魔女たちであった。魔女は皆、全身に細かい切り傷を負っており、そこから多少の血を流している。意識を失っているのか、深く目は閉じたままだが、外傷を見る限り、そうひどい怪我ではない。

「一体、何が……」

「とりあえず、森の外まで運ぼう！」

眉をひそめるルビィネルに、マルクが魔女を抱え上げようとしながら、呼びかける。

「ブラッドスにも連絡して、選考中止にしてもらわないと！」

「中止！？」

マルクのその言葉に、批判的な声をあげたのはサファイであった。「冗談じゃないわよ！ 中止になんてしたら、パートナーはどうするのよ！？」

「怪我人が出てるのに、続けられないだろ！？」

強く怒鳴りあげるサファイだったが、マルクも必死に主張するよつに、声を張り上げる。

「それに、お前は必死なのかも知れないけど、シリングにとっては、こんな選考……」

「あ！」

睨みつけるようにマルクを見ていたサファイが、マルクの背後から迫る、握り拳大ほどの黒い影に気付き、大きく目を見開く。

「後ろ……！！」

「へ？」

指を突き刺し、叫ぶサファイに、マルクが戸惑うように後方を振り返る。その黒い影は、カプトムシのような形をした、虫のようではあるが、見たことはない薄気味悪い生物で、不気味な赤い瞳を光

らせ、大きく羽根を広げ、マルクへと襲いかかった。

「マルク！」

「痛でででで！」

ルビィネルが慌ててマルクの元へと駆け寄り、マルクの右手を左手で掴むと、マルクの手を後ろへと思いきり捻り上げ、二人の手の先を、やって来る虫へと向ける。

「目醒めよ、我が赤炎！ “赤煉火”！」

ルビィネルがすぐさま、自身の魔炎を解放し、重ね合わされた二人の手の先に、赤炎を集めると、それを向かって来ていた虫へと放った。赤々と燃えたぎる炎に焼かれ、虫は一瞬にして、灰となって消える。

「ふう〜、間一髪だな」

「脱臼するかと思った……」

マルクの手から自身の手を離し、ホツと一息つくルビィネル。思いきり捻り上げられ、痛む右肩を押さえながら、マルクが力なく咳く。そんな二人の様子を見つめながら、サファイアがどこか、啞然とした表情を見せる。大きく開かれたサファイアの瞳が映し出すのは、マルクとルビィネルの、それぞれの手の甲に刻まれた、黒い紋様であつた。

「魔紋？」

サファイアの声を聞き、ルビィネルがサファイアの方を振り向く。

「本結で、契約したの？」

「魔紋があるのだから、聞かなくとも、わかるだろう」

「そんなことして、あんた……！」

「今は、そのようなことを話している場合ではない」

非難するようなサファイアの声、ルビィネルが強い口調で、勢よく遮る。向けられるルビィネルの強い瞳に、サファイアはそれ以上、何も言えずに、静かに俯いた。

「今のは、魔蟲まじちゆうだな」

「魔蟲？ つて、トウーパの時に見た？」

「あれとはまた、別の種類のものだ。確か、小さな竜巻を起こし、人を襲うという……」

「じゃあ、魔女たちは」

「ああ。恐らくは、あの魔蟲に襲われたのだろう」

マルクの問いかけに答えながら、ルビィネルが周囲を見回し、そつと眉をひそめる。いつの間にか、完全に日が落ち、森には、深い暗闇が訪れていた。

「やはり、森からはすぐに出た方がいいな」

「出られたら、いいけど」

ルビィネルの言葉に、サファイアがどこか、棘のある言葉を返す。

「お前、まだ、選考諦めつ……！」

「違うわよ。アレ」

「あれ？」

あつさりと否定し、マルクの後方の上空あたりを指差すサファイア。サファイアの指先を追い、マルクがゆっくりと後ろを振り返る。

「んな!？」

そこに見えるのは、暗くなった空一面に浮かぶ、先程の魔蟲の群れであった。皆、闇に赤々とその瞳を輝かせ、獲物を狙うようにマルクたちを見下ろしている。

「あの群れ相手に、早々簡単に、森から出してもらえと思うっ？」

「うわぁー！ 俺の人生、終わったぁー！」

サファイアの言葉にあつさりと生存を諦め、頭を抱えて、嘆き散らすマルク。

「虫に刺されて、終わる人生なんて、嫌だぁー！」

「で、どうする気？」

誰にともなく叫んでいるマルクを無視し、サファイアが真剣な表情で、ルビィネルのもとへと歩み寄る。

「私はパートナー居ないから、魔炎使えても精々、二発程度だし、あんたもあの出来悪そうな魔士とじゃ、使える炎技なんて、限られてんでしょ？」

「ああ、そうだな」  
的確なサファイの言葉を受け、ルビィネルが気難しい表情を見せる。

「せめて、赤炎ではなく、あちらの炎を使えば……」

そう呟いたルビィネルの表情に、迷いが浮かぶ。だがすでに、魔蟲の群れは、ルビィネルたちを射程圏内に入れ、攻撃態勢を取っていた。

「考えている暇はないか。マルク！ ん？」

ルビィネルが魔紋の刻まれた左手を伸ばし、マルクの方へと向けようとしていたその時、暗い森の中を漂う、白い霧のようなものが視界に入り、ルビィネルは途端に、眉をひそめた。霧のようなそれは、徐々に濃さを増し、マルクやルビィネルたちの身を隠すように、辺りを包み込んでいく。

「これは、炎……？」

白い霧をまじまじと見つめ、ルビィネルが戸惑うように首を傾げる。

「これではばらくは、魔蟲を攪乱出来る」

聞こえてくる冷静な声に、ルビィネルたちが一斉に振り向く。

「今のうちに移動するんだ」

「シリング！」

その場に現れたのは、休憩所で本を読んでいたはずのシリングであった。シリングの姿を見た途端、サファイが嬉しそうに目を輝かせる。だが、そんなサファイを気に掛けることなく、シリングは、ルビィネルのもとへと歩み寄った。

「この霧は、そなたが？」

「ああ。その辺の魔女が落としたのか、丁度近くに、疑似炎が転がっていたからな」

「疑似、炎？」

シリングの答えに、ルビィネルはさらに、疑問を深めたような表情となる。

「それより移動だ。早くしろ」

「あ、ああ。マルク」

「へ？」

嘆いていたあまり、状況の理解出来ない様子のマルクであったが、説明するよりも先に、ルビィネルがマルクの右手を取る。魔紋が重ね合わさり、淡い赤色の炎が漏れる。

「“移り火”」

ルビィネルがそつと言葉を落とすと、その場から、マルクたち全員が姿が消えた。

全身を包み込む淡い赤色の炎が消えると、そこは、先程とは別の場所であった。だが、相変わらず周囲は木々が並び、明かりもなく暗い。どうやら、森の外には出ていないようである。

「で、どこまで逃げて来たわけ？」

「さあ？」

「わからないの!？」

「一応、広場を目指して、飛んだつもりだったのだが」

「まだ全然、森の中じゃない! 相変わらず、方向音痴ね!」

大きく首を傾げるルビィネルに、サファイアが勢いよく、怒鳴りあげる。移動を、極度の方向音痴であるルビィネルに任せてしまったのは、どうやら失敗だったようだ。共に移動してきた、負傷した魔女たちを、近くの平地に寝かせながら、マルクが深々と溜息を吐く。「まあ、いいんじゃないの? 虫さんたちからは、無事、逃げられたわけだし」

「じゃあ、これからどうすんのよ? いつ魔蟲が来るかもわからないここで、ビクビクしてるわけ?」

ルビィネルを擁護するように言うマルクに、サファイアが鋭い視線を送る。

「適当に炎打ち上げれば、ブラッドスが気付いてくれるんじゃないの？」

「ブラッドス先生の前に、魔蟲に気付かれそうだがな」

「うっ」

シリングからの指摘に、思わず口ごもるマルク。

「どうせ、俺は頭悪いよ！」

「別に、そこまで言っていないだろう……？」

どこか泣き出しそうな表情で怒鳴ってくるマルクに、シリングが呆れた様子で、肩を落とす。

「ある程度、時間が経つても、誰も戻らねば、ブラッドスも異変に気付くはずだ。仕方がないから、それまでは大人しく、ここに……」

「ニヤア」

「にゃあ？」

自身の考えを皆へと話していたルビィネルが、どこからか聞こえてくる、愛らしいその鳴き声に、首を傾げ、ゆっくりと右方を振り向く。鳴き声を辿っていくと、一本の木の枝の上に、先程の魔蟲とはまた異なる、小さな生き物の姿があった。

「あれは、魔猫！？」

思わず、大きな声をあげるマルク。木の枝の上に横たわり、マルクたちを見下ろしているのは、ブラッドスが見せた写真に写し出されていた、最終選考の標的でもある、あの魔猫であった。

「こんな所に居たのか」

「ニヤア」

「あっ」

マルクたちが一斉に視線を集めたからか、魔猫は急に起き上がり、軽々とその身を翻して、すぐ近くの木々を移動していく。どんどんと遠ざかっていく魔猫を見て、少し考え込むように、目を細めるサファイ。だがすぐに思い立ったように顔を上げ、サファイが足を踏み出していく。

「私、捕まえてくる！　すぐに戻るから、ここに居て！」

「ええ！？」

思いがけないサファイの言葉に、マルクが驚きの表情を見せる。

「危ないって、やめるよ！ だいたい、こんな状況なんだ！ 今更、魔猫なんか捕まえたって……！」

「一応よ、一応！ それに、魔猫が魔蟲に襲われちゃったら、困るでしょ」

「あ……！」

マルクが止めるのも聞かず、サファイはそのまま、魔猫を追って森の向こうへと消えていった。何か嫌な予感がし、浮かない表情を見せたマルクが、ルビィネルの方を振り向く。

「やっぱり、一人は危ない気がする！ ルビィネル、俺たちも追った方が……！」

「放っておけ」

ルビィネルへと訴えかけようとしたマルクに、冷たく答えを示したのは、シリリングであった。

「けど！」

「勝手な行動をして、輪を乱す奴が悪いんだ。そんな奴に合わせて全員襲われでもしたら、ただの間抜けだ」

シリリングの冷め切った言葉に、表情をしかめるマルク。ルビィネルもまた目を細め、厳しい表情で、シリリングを見つめる。

「そんな言い方、ないだろ？ サファイは、お前のパートナーになるために、必死に……！」

「あの魔女がパートナーにしたいのは、俺じゃなく、魔士としての俺の技能だろう？」

身を乗り出し、声を荒げるマルクに対し、シリリングは冷静な口調のままではあるが、マルクには負けない迫力を持って、はっきりと言い放つ。

「“最上級魔士”なんていう肩書きに、ただ、群がってきた魔女共に、情をうつす必要はない」

「……っ」

シリングから放たれる冷たい言葉に、マルクがまた強く、唇を噛み締め、拳を握り締める。

「お前にとつて、魔女はただの道具なのかも知れないけど……」

俯いたまま、低い声を発するマルクに、シリングが少し、眉をひそめる。シリングとルビィネルが見つめる中、マルクは勢いよく顔を上げ、大きく口を開いた。

「俺にとつては、魔女も人間も関係ない！ 皆、同じ命だ！」

マルクが大きく両手を広げ、自身の主張を言葉にする。

「情とか関係ない！ そこに助けられる命があつたら、助けるのが、“当たり前”だ！」

力強く伝えられるマルクのその言葉に、圧倒されるように、思わず目を見開くシリング。シリングにそう言い放つと、マルクはすぐにシリングに背を向け、サファイアを追うように、森の向こうへと駆け去っていった。マルクの去っていった方向を見つめ、シリングがしばらくの間、茫然と立ち尽くす。

「どうだ？」

ルビィネルに話しかけられ、シリングが茫然としていたところを、ハツとなつて振り向く。

「なかなか、面白いだろう？ 我が最下級魔士は」

「追わなくていいのか？ お前が行かないと、あれは、ただの馬鹿だろう」

「ああ、すぐ追う」

皮肉めいたシリングの言葉を否定することもなく、素直に頷いたルビィネルが、シリングへと穏やかな笑みを向ける。

「“最上級魔士”か」

シリングの持つ呼び名を口にするルビィネルに、シリングが少し眉をひそめ、視線を向ける。

「確かにそなたは、あらゆる点において、最下級魔士であるマルクに、優まっているのかも知れないが」

ルビィネルがさらに口角を上げ、得意げに笑う。

「一つ、とても大事な点が、劣っている」

ルビィネルのその言葉に、シリリングの表情が、わずかに動く。

「私は、そう思うぞ」

どこか挑戦的に微笑みかけると、ルビィネルもまた、シリリングに背を向け、マルクの後を追っていった。気を失っている魔女たち以外は、その場にシリリングだけが残り、辺りを静けさが包み込む。

「劣ってる、か……」

小さく呟き、シリリングはそっと俯いた。

「逃げられちゃったの？ 仕方ないなあ」

魔蟲の群れに右手を伸ばし、青年が困ったように呟く。暗い森の中、木の枝に器用に立った青年に、月明かりが降り注ぎ、その大きな金色の瞳を、さらに輝かせている。

「探す？ ううん、君たちは、もういいよ。どうせ見つけても、また逃げられるだけだろうし」

青年に見切りをつけたような言葉を向けられると、魔蟲たちは自然に群れを崩し、散り散りになって、空へと飛び出していく。

「さあーて、次は、どうやって遊ぼうかなあ」

「ニヤア」

「ん？」

考えを巡らせるべく、首を捻った青年が、足元から聞こえてくる、小さな声に気付き、視線を下方へと向ける。いつの間にか、青年と同じ枝の上へとやって来ていた魔猫が、青年に懐いた様子で、青年の左足にその身を擦り寄せている。その魔猫の様子を見て、青年は何か思いついたように、含んだ笑みを浮かべた。

「君も、一緒に遊ぶかい？」

「ニヤア？」

魔猫を持ち上げ、そっと問いかける青年。言葉の意味を理解する

はずもなく、ただ無邪気なその瞳を向ける魔猫の額に、青年が右手を当てる。

「起きてよ、僕の茜炎<sup>せんえん</sup>」

魔猫の額に当てた青年の右手から、夕焼けによく似た、赤色の炎が生じた。

「ええーっと、確か、こつちの方に……」

マルクたちから離れ、単身、魔猫を捜すサファイが、暗い森の中を、わずかな月明かりを頼りに、何とか進む。思っていたより魔猫の動きは素早く、その姿を、すっかり見失ってしまった。

「あいつを捕まえれば、私は、シリングのパートナーに……」

自分自身へ言い聞かせるように呟き、サファイが、気合いを表すように、拳を握り締める。

「よし！ ん？」

気合いの入った声を漏らしたサファイが、木が揺れ動き、葉が擦れ合うような、そんな音を耳に入れ、ふと眉をひそめる。それは明らかに、何者かが、こちらへと近付いてくる音であった。

「何っ……あ！」

やがて、その音の主の姿を見つけ、サファイが大きく目を見開く。

「キヤアアアア！」

「……！ サファイ!?」

サファイのものらしき悲鳴を聞き、サファイの後を追って、森の中を歩いていったマルクが、焦ったような表情で顔を上げる。すぐさま足を走らせ、悲鳴の聞こえてきた方へと急ぐマルク。焦りと不安から、その表情は、引きつっていた。

「サファイ!? サファイ！」

「うるさいわねえ」

「うおー！」

すぐ傍から返って来る声に、マルクが思わず胸を押さえ、驚く。足を止めたマルクが振り向くと、そこには、地面に蹲るようになっているしゃがみ込んでいる、サファイの姿があった。

「何回も呼ばなくなたって、聞こえてるわよ」

「う、ごめん。って、サファイ、怪我!？」

きつい口調で言い放つサファイに、素直に謝ったマルクが、サファイの右腕から流れ落ちる赤々とした血に気付き、大きく目を見開く。よく見れば、サファイの白い右腕に、爪で引っ搔かれたような大きな切り傷があり、そこからどんと血が滴り落ちていた。見るからに痛そうな傷に、マルクが思わず表情をしかめる。

「どうしたんだよ？ その傷」

「あいつにやられたの」

「あいつ?」

顎で前方を指し示すサファイに、マルクが視線を、そちらへと移す。

「ぎゃああああー!」

前方を見た途端、激しい悲鳴をあげるマルク。二人の前に立っていたのは、マルクの背丈の軽く三倍はあるであろう、巨大な、虎のような、四本足の生物であった。逆立った体毛は茶色く、鋭い赤目は、目が合っただけで震えが来る。鋭い爪は地面を自然と抉っており、口からはみ出した牙からは、涎が滴り落ちていた。その額には、赤い菱形の宝石のようなものが、埋め込まれている。

「な、なななな何だよ？ あれっ」

「さあ？ 魔虎まこか何かじゃない？ まあ、あんなでっかい魔物、私はフレイヤでも見たことないけど」

「俺やっぱ、今日ここで、死ぬんだあー!」

サファイの言葉に絶望したマルクが、頭を抱え、激しく嘆く。

「冗談。誰がこんなところで……って、あなた、ルビィネルは?」

「へ？ あ、置いてきた」

「何やってんのよ！ あんたみたいな無能魔士、ルビィネルが一緒じゃなきゃ、何の役にも立たないじゃない!」

「どうせ俺は、死ぬまで役立たずなんだよおー!」

責め立てるサファイに、さらに落ち込みを深くし、嘆きを大きく

するマルク。

「ガアアアア！」

「あつ………！」

勢いよくその場を飛び出した魔虎らしき巨大生物が、二人に向け、勢いよく前足を振り上げる。遙か上空から振り落ちてくる鋭い爪に、大きく目を見開くマルクとサファイ。

「ク！」

「もう、死んだあー！」

険しい表情を見せるサファイの横で、マルクが諦めるように叫ぶ。「そう簡単に諦めるなど、何度も言っているだろう？」

どこからか凜とした声が入ってくると、頭を抱えていたマルクの右手が、横からさらわれるようにして、前方へと向けられる。

「“赤爆火”！」

「グワアア！」

マルクの右手をさらい、自身の左手と共に前へと向け、放った赤い炎を勢いよく爆発させ、向かって来ていた魔虎を吹き飛ばしたのは、勿論、ルビィネルであった。現れたルビィネルに、マルクがホツとした様子で、体中の力を抜く。

「方向音痴にしては、いいタイミングじゃない」

「魔紋で繋がっているからな、マルクの位置だけは正確にわかるんだ」

振り向いたルビィネルが、サファイへ笑顔を向ける。だが、そのルビィネルの笑顔はすぐに消え去り、再び前方を見たルビィネルは、険しい表情を作った。ルビィネルの炎により、後方へと吹き飛ばされた魔虎が、ゆっくりとその巨体を起こす。体毛の先が、わずかに焦げたりはしているが、魔虎自体は、一切傷を負っていない様子であった。

「あの程度の魔炎では効かぬ、か」

何ら様子に変化ない魔虎を見つめ、眉をひそめるルビィネル。

「魔蟲の次は、巨大魔虎。一体、どうなってんのかしらね、ホント」

「……………」  
うんざりしたような、サファイのその言葉に、ルビィネルが少し、表情を曇らせる。

「とにかく、隙を作って逃げよう。今の私たちで、どうにか出来る相手ではない」

「隙を作るって……………」

「行くぞ、マルク」

「やっぱいいい!?!」

強くマルクの右手を握り締め、前方へと歩き出して行くルビィネルに、マルクは泣き出しそうな表情を見せながら、前へと引つ張られて行く。

「サファイは、そこに居ろ!」

負傷したサファイに力強くそう言っつて、ルビィネルはマルクを引つ張りながら、魔虎へと駆け込んでいく。魔虎も向かってくる二人に気付き、その赤い眼光を鋭くし、またしても勢いよく、右前足を振り上げる。

「飛ぶぞ、マルク」

「へ? 飛ぶつて?」

「“脚火”!」

「どわああああ!」

ルビィネルがマルクの右手を掴んだまま、強く左手を振り下ろすと、二人の足元を赤い炎が包み込み、ルビィネルがその場を思いきり蹴り上げると、マルク共々、勢いよく空中へと飛び上がる。引つ張られるようにして上空に上がったマルクは、悲鳴にも似た声を発した。

「もう嫌だあー! 高いとこ、怖ええー!」

「つべこべ言わずに、右手をあやつに向ける!」

泣き言を漏らすマルクに、叱りつけるように言い放つルビィネル。マルクが大人しくルビィネルの指示に従い、空中に浮き上がった二人が、互いに重ね合わせた手を、下方に見える魔虎へと向ける。

『“赤煉火”！』

二人が声を揃え、赤い炎の塊を、魔虎の顔面に目がけて放つ。

「カア！」

「あ……！」

だが、魔虎は大きく口を開き、そこから強い衝撃波のようなものを放つと、二人の放った炎を、あつという間に掻き消してしまふ。

風に流れて消える炎に、驚きの表情を見せるマルク。魔院に通う魔女たちの中でも、強力な方であるルビィネルの魔炎であるというのに、魔虎には浴びせることすら出来ない。

「やはり、この程度の炎では通用しないか」

驚いているマルクとは対照的に、ルビィネルは冷静に呟く。

「あの魔士がパートナーじゃ、あれくらいの威力が限度か」

戦況を見つめ、サファイも厳しい表情を見せる。

「あれじゃあ、ルビィネルの力は、ほとんど出し切れない。このままじゃ……」

焦りからか、サファイの額から、一筋の汗が流れ落ちる。

「あああ！ 今日ここで、俺は、トラの血肉と化すんだあー！」

「だから、そう簡単に諦めるなど、何度……」

「カアア！」

「あ……！」

嘆くマルクを、ルビィネルが宥めようとしていたその時、魔虎が再び大きく口を開き、上空の二人へ向け、先程、魔炎を掻き消した、強烈な衝撃波を放つ。それに気付いたルビィネルは、またマルクの手を握り、向かってくる衝撃波へと突き出した。

「我が身を守れ、“赤壁火”！」

ルビィネルが素早く防御の炎技を使い、二人の前に、赤い炎の壁を作つて、衝撃波を受け止める。

『うっう！』

だが、衝撃波が炎壁に当たった途端、突き出した手から、強い重みが伝わり、二人が同時に顔をしかめる。少しでも気を抜けば、指

など簡単に折れてしまいそうなほどの圧を感じる。

「痛つてええ……！」

「耐えろ、マルク！」

険しい表情を見せるマルクに、必死に声を掛けるルビィネル。だが、今までに感じたことのない圧を前に、マルクはどう耐えていいのかすら、わからなかった。

「む、無理！」

「あ！」

マルクが諦めるように言葉を吐き、右手から力を抜いたその瞬間、二人の前に張られていた炎の壁に、大きく亀裂が入る。炎の壁を砕き、二人へと迫る衝撃波に、ルビィネルが大きく目を見開いた。

「青流火<sup>せいりゅうか</sup>！」

「うっう！」

二人に衝撃波が当たる直前、横から介入した青色の炎が衝撃波を直撃し、空の彼方へと吹き飛ばす。目の前で起きた衝突の余波で、マルクとルビィネルが、地面へと落ちる。

「痛たたたた」

地面に落ちたマルクが、打ちつけた腰を押さえながら、ゆっくりと起き上がる。

「さっきの炎は？」

「サファイだ」

戸惑うように問いかけたマルクに、ルビィネルがすぐさま答える。

「サファイの青炎<sup>せいえん</sup>」

「そっか。そりゃあ、助かつ……」

「ハア、ハア……うっう！」

「サファイ！？」

助けてくれたサファイに笑みを向けようと、サファイの方を振り向いたマルクの視界に飛び込んできたのは、苦しげに呼吸を漏らし、力なく左手を地面へとつくサファイであった。先程までよりも多く汗をかき、顔色も悪い。

「あんな傷を負った状態で、魔炎を使えば、一気に相当の体力を消耗する」

「そんな！」

冷静に解説をするルビィネルに、焦りの表情で振り向くマルク。だが、口調は冷静であったルビィネルも、その表情には、確かな焦りが浮かんでいた。サファイの状態が良くない上に、マルクとルビィネルの魔炎は、魔虎には効かない。最早、隙を作って逃げることにすら、厳しい状況である。

「ガアアア！」

「あ！」

見るからに動けぬ状態であるサファイに目をつけたのか、サファイの流す血の匂いに惹かれてか、魔虎が、先程まで交戦していたマルクたちではなく、サファイに向かって、勢いよく走り出していく。向かってくる魔虎を見て、サファイは険しい顔を見せるが、逃げる術など残っていない。

「サファイ！」

居ても立ってもいられず、その場から駆け出し、サファイのもとへと向かっていくマルク。

「ま、待て！ マルク……！ うう！」

慌ててマルクの後を追おうとしたルビィネルが、足に走る痛み、立ち上がるうとしたところを、またすぐにしゃがみ込む。視線を痛みの走る右足へと向ければ、そこには擦ったような傷ができ、赤い血が滲んでいた。どうやら、先程の衝撃波とサファイの青炎の衝突の際に、傷を負ってしまったようである。

「クソっ……」

ルビィネルが険しい表情で、遠ざかっていくマルクの背を見送る。  
「サファイ！」

勢いよく駆け込んで来たマルクが、しゃがみ込んだままのサファイを庇うように立ち、向かってくる魔虎と相對する。目の前に立ったマルクを見て、驚きの表情を見せるサファイ。

「馬鹿！ 何やって……！」

「ガアアア！」

サファイが止める間もなく、サファイの前へと飛び出たマルクに、振り上げられた魔虎の鋭い爪が迫った。

「マルク！」

思わず声を張り上げ、マルクの名を呼ぶサファイ。ルビィネルも動けぬ状態のまま、必死に身を乗り出す。

「ク……！」

強く目を閉じたマルクが、必死に身を守るように、顔の前で両手を交差させ、前へと突き出す。だが、次の瞬間、マルクを襲ったのは、激しい痛みでも、重い圧でもなく、ほんの小さな衝撃であった。「へ？」

予想していたものとは違う衝撃の訪れに、マルクが戸惑いながら、ゆっくりと目を開く。開いた途端、マルクは開いたその瞳を、さらに大きく見開いた。目の前に広がっていたのは、自分でも信じられない光景。振り下ろされた魔虎の巨大な爪を、マルクの顔の前の交差した両手が、軽々と受け止めていたのであった。

「え？ えええ？」

この光景が理解出来ず、マルクがどこか、間の抜けた声を漏らす。「あれは……」

魔虎の爪を受け止めるマルクの姿を見つめ、目を細めるルビィネル。よく見ると、マルクの全身は、赤い、ほのかな光に包まれており、爪を受け止めている両手は、特にその光が強く、まるで炎のように輝いている。

体内を流れる魔炎を活性化させ、自身の体を強化する炎技だ

「あれは、“燃烧”」

先日、マルクへと向けた言葉を思い出し、ルビィネルが確信を持つて呟く。

「グ！ グ……！」

どれほど力を込めても、まったく前に進まない自身の前足に、魔虎が戸惑った様子を見せる。自分よりも遥かに小さく、弱々しくしか見えない細い腕に、自分の爪が止められている意味など、魔虎に

はわからないだろう。

「え、ええーっと、ここから、どうすればいいと思う?」

「私に聞かないでよ」

助けを求めるように、問いかけてくるマルクに、サファイが呆れた表情を見せる。

「そのまま、じっとしている」

「え?」

横からマルクたちのものではない声が入って来たかと思うと、魔虎の爪を受け止めているマルクの右手首が、勢いよく掴まれる。

「お前、シリング!」

マルクが掴んだその手の方を振り向くと、そこには、相変わらず落ち着いた表情を見せた、シリングが立っていた。シリングが力強くマルクの手首を掴み、そのまま、魔虎の方へと、思いきり突き出す。

「うわわ!」

「グアアア!」

シリングに引っ張られると、マルクは前のめりになり、前方に倒れ込みそうになるが、それと同時に、マルクの両手に、振り下ろしていた爪を押し返された魔虎が、勢いよく後方へと吹き飛ばされた。ただ引っ張られただけで、強く押した覚えもないというのに、十数メートル先まで、吹き飛んでいった魔虎に、マルクが啞然とした表情を見せる。

「な、何がどうなって……」

「なかなかの“燃烧”だな。最下級魔士のわりに、やるじゃないか」  
マルクから手を離しながら、シリングが感心したように、マルクへと言葉を向ける。だが、シリングの誉めるようなその言葉に、マルクは喜ぶのではなく、思いきり顔をしかめた。

「どうせ、俺は、放出もろくに使えないよ!」

「俺、誉めただろ……?」

八つ当たりのように叫ぶマルクに、シリングが呆れた表情を見せ

る。

「結局、そなたも来たのか」

そこへ、傷を負った右足を引きずりながら、ルビィネルが歩み寄って来る。ルビィネルの言葉に、そつと目を細め、また冷めた表情を作るシリング。

「ああ。俺のために実施された講義で、死人でも出たら、俺の名に傷がつくからな」

「お前はまた、そういう言い方を……」

相変わらず棘のある言い方をするシリングに、マルクが困ったように頭を抱える。シリングはゆっくりと振り返り、その鋭い視線を、後ろでしゃがみ込んだままのサファイアへと向けた。

「お前の勝手な行動が、招いた結果だ」

冷たく突き刺すような言葉を、シリングがサファイアへと向ける。

「お前が“最上級魔士”なんて肩書きに群がって、馬鹿みたいに必死に、俺のパートナーになろうとするから、こんなことになった」

「お前なあ……!!」

「いいわ」

あまりのシリングの言葉に、思わず言い返そうとしたマルクを止めたのは、責められているサファイア本人であった。

「勝手に夢を抱いて、理想を押しつけてた、こっちだって悪いんだもの」

サファイアが悟ったような、穏やかな笑みを浮かべる。

「あなたが魔女を道具としか思っていない、とつても酷い性格の男でも、私に責める権利はない」

向けられるサファイアの笑みに、シリングが少し目を細める。

「今は、誰が悪いのだと、話している場合ではない」

そんなシリングとサファイアの間、ルビィネルが冷静に割って入る。

「私とマルクが魔虎を引きつけるから、シリングは、サファイアを連れて、ブラッドスのところまで逃げる」

「また、引きつけ役か……」

「馬鹿言わないで」

ルビィネルの言葉に、マルクががっくりと肩を落とす横で、サファイアが批判的な声をあげる。

「あんなたちの魔炎は、ろくにあの魔虎には通じなかったのよ？」

引きつけなんて、出来るわけないでしょ」

「まあ、何とかなるさ」

鋭く言い放つサファイアに、ルビィネルは軽く笑みを向けた。向けられるルビィネルの笑みに、サファイアは不快そうに、顔をしかめる。「では頼む、シリング。行くぞ、マルク」

「ふあい……」

ルビィネルの言葉にやる気のない返事をして、マルクが、ルビィネルと共に、まだ倒れた状態の魔虎のもとへと、駆け出していく。二人の後ろ姿を見送り、そっと目を細めるシリング。

「まったたく」

同じように見送るサファイアが、呆れたような声を漏らす。

「目指すものがあるくせに、他人のために、平気で命懸けちゃうとこまで、相変わらずなんだから」

困ったように言いながら、サファイアが、短パンのポケットから取り出したハンカチで、魔虎の爪により切り裂かれた、右手の傷を覆う。解けないよう、腕に、固くハンカチを縛りつけると、サファイアは重たそうに体を起こし、ゆっくりと立ち上がった。

「あなたは、ルビィネルの言ったように、ブラッドスって人のところまで行って」

「加勢する気か？」

「大丈夫。むざむざ死んで、あなたの名前に傷をつけるような真似はしないから」

眉間に皺を寄せ、問いかけるシリングに、サファイアがそっと、微笑みかける。数歩進み、シリングよりも少し前に出ると、サファイアが足を止めた。

「そつだ、一つだけ」

言い忘れたこともあるのか、笑みを浮かべたまま振り返るサファイアを、シリリングが戸惑うように見る。

「私ね、まだ子供の頃、フレイヤの貴族の屋敷のパーティーで、同じような年頃の、人間の男の子に会ったの」

突然のサファイアの話に、シリリングが怪訝そうな表情を見せる。

「大人ばかりの中で、同年代の子なんて他に居なかったから、私その子にすぐに声を掛けたわ。“友達になろう”って」

シリリングの冷たい瞳をまっすぐに見つめ、サファイアが話しを続ける。

「そしたら、その子は言った。“魔女は、魔士の僕にとっては、ただの道具。だから、君と友達になる気はない”って」

その言葉を聞いたシリリングが、どこかハツとした表情となって、サファイアを見つめる。

「とつても冷たくて、とつてもまっすぐで、とつても寂しそうだった、その男の子が気になって、私、その時に決めたの。ああ、この子のパートナーになってやろうって」

笑みを浮かべたサファイアの瞳が少し細まり、まるで、懐かしいものでも見るように、シリリングを見つめる。

「それが、私とシリリング・ウェーガットとの出逢い」

シリリングを見つめるサファイアが、さらに笑みを深くする。

「あなたが、“最上級魔士”になる、ずっと前の話」

「……っ」

サファイアのその言葉に、シリリングが険しい表情を見せる。

“最上級魔士”なんていう肩書きに、ただ、群がってきた魔女共に、情をうつす必要はない

それは、先程のシリリングの言葉が、真実ではないことを示す、言葉であった。

「ごめんなさい。何となく、これだけは言っておきたかったの。じやあ」

軽い別れの挨拶を口にして、サファイはあっさりとしリングに背を向け、マルクたちの元へ行こうと、再び足を前へと進めていく。どんだんと前へと進んでいくサファイの背中を見つめ、どこか戸惑うような表情で首を横に振った後、深々と俯くしリング。俯いたしリングが、強く唇を噛み締めた後、勢いよく顔を上げた。

「魔女」

しリングからの、名前でも何でもない、その呼びかけに、サファイが足を止め、振り返る。振り返ったサファイを見つめ、しリングが真剣な表情を見せる。

「俺と、パートナー契約をしろ」

思ってもみなかったしリングの言葉に、サファイが、驚きの表情を見せた後、すぐに、真剣な顔となる。

「私にとっては、願ってもない申し出だけど、でも、それは無理だわ」

サファイが眉間に皺を寄せ、難しい表情となる。

「“偽結”の魔唱には、結構な時間がかかるの。最速でも五分。そんなことしてる間に、ルビィネルたちが……」

「ああ、わかつている。だから」

サファイの説明に、当然理解している様子で言葉を返し、しリングが、すぐ傍に落ちていた、細い木の枝を拾い上げる。サファイが戸惑うように見つめる中、しリングは、枝の尖ったその先を、自身の左腕へと向けた。

「本結でいい」

「……っ！」

はつきりとそう言い放ち、しリングが枝の先で、自らの左腕を切り裂く。魔士の制服が破けると、その下から見える肌には、赤い血が滲んだ。本結に、血があると知っての行動だろう。しリングのその行動に、サファイが益々、険しい表情となる。

「後悔、するわよ……?」

どこか引き止めるように、サファイがシリングへと問う。サファイのその言葉を受けたシリングは、冷え切っていたその表情を崩し、サファイの前で、初めて微笑んだ。

「後悔なら、この場に來た時から、とっくにしている」

シリングのその言葉に、サファイはどこか、困ったような笑みを浮かべた。

「ぎゃああああ！ うわあああ！」

一方、魔虎と交戦中のマルクは、向けられた爪を、悲鳴をあげながらも受け止め、叫び声をあげながら、それを魔虎へと押し返していた。声だけ聞いていれば、マルクが圧倒的にやられているように思えるが、見た目ではなかなか、いい勝負をしている。これも、マルクの全身を包む赤い炎、“燃焼”の効果あつてのことだろう。

「これほどに、“燃焼”を持続させられるとはな。昨日は微塵も片鱗がなかったが、なかなか、才能があるのかも知れないぞ」

マルクの奮闘振りを眺めながら、ルビィネルがどこか感心したように言う。爪を押し返し、魔虎を追い払ったマルクが、そんなルビィネルから、少し離れた場所へと降りてくる。

「ま、まあ、俺にも一個くらい、人より秀でた才能があるってもんで……！」

「ま、攻撃を受け止めて、押し返すだけでは、何の打開策にもならないがな」

「最後まで誉める気がないなら、最初っから誉めないでくれるかな……?」

折角芽生えたマルクの自信を、あっさりと打ち崩すルビィネルの発言に、マルクが最早、嘆くこともなく、力なく呟く。

「カアアア！」

マルクに押し返された魔虎が、二人が話している間に、いつの間にか起き上がり、大きく口を開いて、再び、二人へと衝撃波を放つ。

「あ！ マ、マル……！！ ううう」

迫り来る衝撃波に気付き、ルビィネルが焦った表情で、マルクのもとへと駆け寄ろうとする。だが、慌てて足を踏み出したため、右足の傷が痛んだルビィネルは、苦しげな声を漏らし、その場にしゃがみ込んでしまう。

「ルビィネ……！！ あ！」

しゃがみ込んでしまったルビィネルの姿を見て、マルクがルビィネルの元へと駆け寄ろうとするが、二人の距離が詰まる前に、魔虎の放った衝撃波が、二人へと襲いかかった。

「うああああ！」

もろに衝撃波を食らい、全身を激しく切り裂かれたマルクが、勢いよく吹き飛ばされ、地面へと叩きつけられる。すぐ近くに、同じように吹き飛ばされたルビィネルが、傷ついたその体で、力なく倒れ込んだ。苦しげな表情で、倒れた状態のまま、ほとんど動かないルビィネルの様子を見た後、徐々にこちらへとやって来る魔虎の姿を見て、マルクがそっと目を細める。

「マズいなあ、ホントに」

マルク自身もルビィネル同様、すぐに動けるような状態ではない。本当に追い込まれ、マルクは嘆くことなく、ただ、そっと微笑む。

「我が炎の神、マフルよ」

「え……？」

絶望に満ち始めたマルクの耳に、何の音に邪魔されることもなく、まっすぐに入ってきて来る声。

「今、ここに、血と血の契約を行う」

響くその声は、サファイのものであり、サファイはシリングと共に、その場に立ち尽くし、特に逃げるような仕草は見せていなかった。二人が逃げていないことよりも、聞き覚えのあるその魔唱に、マルクが眉をひそめる。

「あれは、本結の……」

マルクと同じように、ルビィネルもまた、サファイとシリングへ、

まっすぐに視線を向ける。

「汝の偉大なる炎により、我が身に宿りし青炎を、我が選びし者に託せ」

胸の前で赤い血のついた両手を重ね合わせたサファイアが、徐々にその声を大きくさせていく。

「今ここに、我がパートナーを決する」

はつきりと目を見開き、重ね合わせていた両手を、天高く、空へと掲げるサファイア。

「その者の名は、シリング・ウエーガット！」

サファイが声を張り上げ、堂々とシリングの名を呼んだ途端、サファイが掲げた両手から、見るも美しい青色の炎が、暗い空へと飛び出したかと思うと、炎は空中で二つに分かれ、それぞれ、サファイとシリング、二人の手の甲へと降り落ちる。落ちて来た炎を、シリングが恐れることなく受け止めると、シリングの右手の甲に、五角形の中に波のような模様の描かれた、白色の紋様が刻まれた。紋様の刻まれた右手を握り締め、シリングが、サファイのすぐ傍へと歩み寄っていく。

「名前は何だ？ 魔女」

「サファイよ」

「サファイ」

聞いたばかりのサファイの名を呼び、シリングが、魔紋の刻まれた右手を、サファイの方へと向ける。そのシリングを見て、そっと笑みを浮かべると、サファイは、シリングと同じ魔紋の刻まれた左手を、シリングの右手と重ね合わせる。

「目醒めて、私の青炎」

サファイの言葉が放たれると、サファイの左手から青い炎が生じ、その炎が、重ね合わされたサファイの手から、シリングの手へと伝わっていく。魔炎を共有したことを確認すると、シリングは、サファイから手を離し、倒れたままのマルクとルビィネルの元へと近付いている、魔虎の方を振り向いた。

「炎技の補助、しましょうか？」

「誰にものを言っている」

悪戯っぽく問いかけるサファイに、すぐさま、はつきりと答えるシリング。シリングは、先程、血を流すため、自身の腕を傷つけた木の枝を持ち直した。シリングの魔紋が光ると、シリングの持つ木の枝が、青い炎に包まれる。炎に包まれているのに、枝はまったく

燃えていない。それは、不思議な光景であった。

「あれは……」

「装纏そうてん」

戸惑うマルクに、いつの間にか体を起こしたルビィネルが、答えるように呟く。

「剣や槍に魔炎を纏わせ、攻撃力を飛躍的にあげる技。六つの炎技の中でも、最も難易度が高いとされる技だ」

「装、纏……」

ルビィネルの説明を聞きながらも、マルクは、一瞬もルビィネルや他に視線を移すことなく、魅入られたかのように、まっすぐにシリリングを見つめる。

「クウ！」

シリリングの醸し出す、溢れんばかりの力に気付いたのか、マルクとルビィネルに向かっていた魔虎も、体の向きを変え、ゆっくりとした足取りで近付いてくるシリリングと相對する。シリリングを見つめ、威嚇するように、唸り声をあげる魔虎。だがシリリングは、その威嚇にも眉一つ動かさず、その場でそっと、足を止めた。

「来い」

誘うように言い放ち、シリリングが炎を纏った枝を、まるで剣のように、身構える。

「カアア！」

シリリングの誘いに乗るように、魔虎がその場から勢いよく飛び出し、シリリングめがけて、思いきり前足を振り下ろす。振り落ちてくる鋭い爪を見上げ、シリリングは目つきを鋭くし、素早く、枝を振った。

「ギアアアアア！」

次の瞬間、響き渡る魔虎の叫び声。青い炎に包まれた魔虎の鋭い爪が、宙を舞い、少し離れた地面へと落ちる。

「あのでっかいトラの爪を切ったあ！？」

倒れていたはずのマルクが、気付けば体を起こし、身を乗り出す

ようにして、シリングの戦いを見つめている。

「グ……！ カアアアア！」

爪を切り落とされた魔虎が、表情を陰しく変えながらも、大きく口を開き、シリングへと衝撃波を放った。

「脚火」

素早く足に青炎を纏わせ、その場を飛び上がって、衝撃波を避けるシリング。空中へと飛び上がったシリングが、魔虎の額に埋め込まれた、赤い宝石のようなものに狙いを定め、枝を構える。

「青斬火<sup>せいざんか</sup>」

空中のシリングが、まるで舞うように、その枝を振り払うと、枝から放たれた青炎が、一直線に魔虎の額の宝石へと突き当たった。

「ギヤアアア！」

シリングの放った炎により、額の宝石を砕かれ、魔虎が激しい悲鳴をあげながら、全身から強い白光を発すると、その巨体が消えていく。

「圧倒、的……」

「サファイの青炎も、確かに強力だが、それ以上の力を発揮している。さすがは、“最上級魔士”だな」

呆然と呟くマルクの横で、ルビィネルが感心するような笑みを浮かべる。

「ふう」

地面へと降り立ったシリングが、ホツとした様子で肩を落とす。

包んでいた青炎が消えると、枝は命尽きたのか、灰となって地面に落ちた。

「ニヤア」

「ん？」

聞こえてくる小さな鳴き声に、シリングが戸惑うように振り向く。

「お前は……」

「ニヤア？」

先程まで、巨大な魔虎の居たそこに、ちよこんと小さく座ってい

るのは、魔猫であった。シリングからの視線を受けた魔猫が、不思議そうに首を傾げる。

「えええ！？ さっきのトラさんの正体、こいつだったのかあ！？」  
傷だらけの体を引きずりながら、その場へとやって来たマルクが、シリングと同じように、魔猫の姿を見つけ、驚きの声をあげる。

「すごい進化っぷりだなあ、お前」

「進化とはちよっと、違う気がするけど」

感心するマルクに指摘を入れながら、サファイもまた、マルクたちのもとへとやって来る。

「だいたい、魔猫が魔虎になるなんて話、聞いたことないわよ」

「まあ、もう元に戻ったんだし、いいんじゃない？」

「軽いわねえ、あんた」

「……っ」

マルクとサファイの言葉を聞きながら、ルビィネルがそっと、表情を曇らせる。

「あれ？ 額から血が出てんな。さっき、シリングに切られたところか？」

魔猫を持ち上げたマルクが、魔猫の額の傷に気付き、首を傾げる。

「つたく、可愛いネコさん相手に、容赦ないよなあ」

「容赦してたら、死んでたからな。お前」

嫌味たっぷりに言うマルクに、シリングが鋭く突っ込みを入れる。

「ええーっと、絆創膏、絆創膏っつと」

魔猫に貼る絆創膏を探し、制服のポケットを漁るマルクを、物珍しそうに見つめるシリング。そのシリングの視線に気付き、マルクが仏頂面で振り向く。

「何だよ？」

「いや、自分の方が重傷なのに、猫の手当てから先にするんだと思っ  
って」

「へ？」

シリングの言葉に、マルクが目丸くする。

「あ、そうだ！ 俺の方が、重傷だった！」

今、気付いたとばかりに叫ぶマルクを見て、シリングが肩透かしを食らったかのように、力なく、体を傾ける。今更慌てるマルクの姿に、シリングの口元が緩み、自然と笑みが零れた。

「変わった奴だな、お前」

笑みを見せながら言うシリングに、マルクが少し、驚いたような表情を見せる。だがすぐに、マルクの顔は、悲しげな顔へと変化した。

「どうせ俺は、お前と比べれば、何の取柄もない男だよー！ クソオー！」

「誰もそんなこと、言ってないだろ……？」

嘆き叫ぶマルクを見つめ、シリングは呆れ果てた表情を見せた。

「ああ、あ、ゲームセットかあ」

魔虎との交戦を終えたマルクたちを、遙か上空から見下ろし、青年がどこか、つまらなさそうな声を漏らす。

「そろそろサードニック様がうるさいし、次は本気でいかないとなあ」

面倒臭そうに言いながら、青年は鋭く、金色の瞳を細めた。

翌日、レイール聖魔院。

「ったく、何で俺だけ、お叱りを受けなきゃならないんだよ！」

院長室を出た後、すぐさま、文句を言い放ったのは、ブラッドスであった。

「監督不十分だったからだろう？」

「そうだよねえ。ブラッドス、俺たちがピンチだっていうのに、ちつとも現れなかったし」

怒るブラッドスの後方から、口々に言葉を投げかけるマルクとルビネル。二人の腕や足には、所々、白い包帯が巻かれており、顔にも絆創膏が貼られている。昨夜、魔虎と戦った際に負った傷の、治療の跡である。

「あれは、お前等が勝手に場外乱闘起こして、お前等が勝手に本結契約したんだらうが！」

振り返ったブラッドスが、不機嫌極まりない表情で、マルクとルビネルよりも少し後ろを歩く、シリングとサファイを指差す。シリングのパートナーを決める予定だった特別講義は、マルクたちを含め、数名の負傷者を出した上、シリングがサファイと本結での契約を行ってしまったため、結局、無駄となり、それに関して、ブラッドスは、院長から直々にお叱りを受けたのであった。

「そうですね。確かに、俺たちが勝手に判断してしまったことです。反省しています」

ブラッドスの言葉に、シリングが素直に、申し訳なさそうな表情を見せる。

「まあ、先生が駆けつけて下さっていれば、あのような決断、しなくて済んだのですがね」

「うっ」

涼しげな表情で、鋭い言葉を投げかけるシリングに、反論することも出来ず、思わず押し黙るブラッドス。

「ああ、減俸かあ」

シリングの言葉に、自分の非を認めざるを得なくなったブラッドスは、怒りを収め、急に大人しくなると、再び前方を向いて、深々と肩を落とした。

「性格悪っ」

「誉め言葉として、受け取っておく」

少し非難するような表情で振り向くマルクに、シリングが素っ気なく答える。

「んじゃあ、俺は講義行くから。お前等は、安静を取って、今日は

「一日ゆっくりしてる」

「はぁーい」

ブラッドスからの指示に、マルクが代表して、あまりやる気のない返事をする。

「あ、後、サファイ。編入手続きの書類、早めにな」

「了解っ」

「編入？」

ブラッドスが廊下の奥へと去っていく中、ブラッドスの残した言葉に引つ掛かったルビィネルが、戸惑った表情で、サファイの方を振り返る。

「何だ。そなた、結局、編入するのか？」

「当然でしょ。私は、シリングのパートナーなんだから」

ルビィネルの問いかけに、サファイがどこか得意げな笑みを浮かべる。

「パートナーは常に一緒に居ないと。ね？ シリング！」

ウキウキとした笑みで、サファイがシリングの方を振り向く。

「本結で契約したからといって、調子に乗るなよ」

そんなウキウキとしているサファイとは対照的に、とても冷え切った声と表情で、シリングはサファイに答えた。

「パートナーとして、使えないと思ったら、すぐにでも切り捨てるからな」

「えっ……」

凍えるような言葉だけを残して、足早にその場を去っていくシリングに、サファイが笑みを止め、しばらくの間、固まる。

「ちょ、ちょっと待ってよ！ シリングー！」

固まっていたサファイが、やっと正気を取り戻し、去っていったシリングの後を、慌てて追っていく。そんなサファイの背を、マルクとルビィネルは、静かに見送った。

「全然変わってないな、あいつ」

「ああ、そうだな」

呆れたように肩を落とすマルクの横で、ルビィネルはどこか、楽しげな笑みを浮かべる。

「でも、まあ」

「シリング〜！」

追って来たサファイアと合流し、うんざりしたような表情を見せるシリングを見て、ルビィネルが少し目を細める。

「変わっては、いけるかも知れないな」

未来を見据えるような瞳で、ルビィネルはそっと、呟いた。

シリングのパートナー選出のための特別講義が行われてから、三日の時間が流れていた。

レイール聖魔院、第五演習室。

「ホントに“ねんしょう燃焼”だけは、完璧に使えてんな」

どこか感心したように言うブラッドス。そのブラッドスの前には、淡い光のような赤炎を全身に纏った、マルクの姿があった。

「何かコツでも掴んだのか？」

「んー、コツとかはよくわかんないけど、この状態で結構自然な感じ。疲労感もないし」

「赤炎は五元炎ごげんえんの中でも、攻撃性の強い炎だから、“放出”には向いても、“ねんしょう燃焼”には不向きのはずなんだけどなあ」

自分でもよくわかっていない様子で答えるマルクに、ブラッドスが戸惑うように大きく、首を傾げる。特別講義中、まひょう魔猫から進化した魔虎まこに襲われたマルクは、土壇場で、炎技の一つ、“ねんしょう燃焼”を身につけたのである。トゥーパの時に使った“放出”は、未だに使いこなせていないが、“ねんしょう燃焼”の方はすっかり使いこなし、他の魔士たちに並ぶほどとなっていた。

「ま、よっぽど赤炎が、体に馴染んだんだろ。良かったじゃねえか、取り柄が一つ出来て」

「どうせ俺は、他に取り柄なんてないよ！」

誉めるブラッドスに対し、相変わらず陰気な雰囲気で、一方的に言い返すマルク。

「けど、どうせなら、“ねんしょう燃焼”みたいな地味な炎技じゃなくて、もっと派手なの、特意になりたかったなあ。あいつみたいに“そつてん装纏”とかさ」

「あいつ？」

「“装纏”は、炎技の中でも、最も難易度の高い技だと言っただろう?」

不思議そうに聞き返すブラッドスの横から、ルビィネルが冷静に言葉を発する。

「“最上級魔士”であるシリリングには使えても、“最下級魔士”であるそなたには、まず無理だ」

「はつきり言い切るな! もうちょっと濁して言えよ!」

断言するルビィネルに、マルクが泣き出しそうな表情となって怒鳴りあげる。

「ああ、あいつってシリング・ウェーガットのことか」

二人の会話を聞いたブラッドスが、納得したように頷く。

「けどお前、“燃烧”が得意ってんなら、あの技をつ……」

『きゃああああ! シリリングくうーん!』

マルクに何かを伝えようとしたブラッドスの声が、演習室中に響き渡るほど大きな、黄色い声援により、あっさりと掻き消される。耳触りなほどの声に、マルクたちが少し顔をしかめながら振り向くと、そこには、何やら興奮気味の魔女たちの集団がある。魔女たちは皆、同じ方向を見つめており、その視線の先には、マルクと同じように、燃烧の演習を行っているシリリングの姿があった。

「相変わらず人気だな、最上級魔士は」

「ああ。あいつが演習に参加するようになってから、外野がうるさくて、しょうがねえ」

感心するルビィネルの横で、ブラッドスが不快な表情を見せる。

特別講義の結果、色々あったものの、パートナーを得たシリリングは、パートナーである魔士と魔女が二人一組で参加する、この炎技演習の授業にも、つい先日から、参加し始めたのである。

「あいつ、パートナー出来ちゃったのに、まだ魔女たちから人気あるのか?」

「危機に陥った魔院の仲間を救うため、自分のことなど顧みず、パートナー契約を行ったって噂が流れたのよ」

その場に姿を現し、マルクの疑問に答えたのは、アメジエスであった。

「その噂を聞いた魔女たちが、“なんてカッコイイの、シリリングくん”ってなって、また人気が上がったんですって」

「まあ、ニューアンス的には、そう間違ってもないけどさ……」

アメジエスの言葉を聞いたマルクが、どこか引きつった表情を見せる。確かに、シリリングがパートナー契約を行ったお陰で、マルクもルビィネルも皆、助かったわけだが、シリリングだけがヒーローのように扱われることには、多少不満が残る。

「ちよつと！ シリリングは今、演習中なのよ！ 大きな声出して、シリリングの集中力、乱さないでくれない!？」

シリリングのすぐ近くに居たサファイアが、シリリングへと熱い視線を向けている魔女たちの前へ出て、しかめた表情で強く言い放つ。

「何よ、パートナーになつたからって、偉そうに」

「嫌よねえ。たまたま近くに居たから、パートナーになれただけなのに、自分が選ばれたって顔しちゃって」

「シリリングくんも災難よねえー。あんな魔女と、本結契約しちゃって」

「何ですつてえ!？」

次々と悪口を零す魔女たちに、サファイアは落ち込むことなく、正面から勢いよく怒鳴りあげる。あれこれと揉め始めるサファイアと、他の魔女たちを見て、演習中のシリリングは、呆れかえったように、深々と息を吐いた。

「大変だな、サファイアも」

「ルビィネルが一生、味わうことのない大変さよね」

「まあな」

「うるさいな、お前等!」

会話でさり気なく、マルクをけなすルビィネルとアメジエスに、マルクが敏感に気付き、怒鳴り返す。

「あ、そういや、マルク・クラウド」

思い出したような様子のブラッドスに名を呼ばれ、マルクがゆっくりと振り向く。

「お前、最近、ポンド・アラールと連絡取ってつか？」

「ポンド？」

ブラッドスからポンドの名を聞き、マルクが目を丸くする。

「特に取ってないけど、なんで？」

「あいつ最近、魔院の講義に出てねえんだよ。俺の炎技演習はともかく、他の基礎講義や、魔士の専門講義も全部」

「そう言われてみると、最近全然、見かけてないかも」

ここ数日の講義での風景を思い出し、マルクがポツリと呟く。いつもであれば、ポンドが居ないことくらい、すぐに気付いただろうが、最近、トゥーパやフランが共に講義を受けるようになり、さらにはシリングとサファイのこともあったので、ポンドの存在を、すっかり失念していた。

「アメジエスは？」

「私も見てないわね」

問いかけるマルクに、アメジエスが眉をひそめる。

「けど、ポンドが講義をサボるなんて、よくあることなんじゃ」

「まあ、そうなんだけど、今回はもう十日になる上、魔院に何の連絡も来てねえからさ」

アメジエスの問いに、ブラッドスが難しい表情を見せながら、答える。ポンドは、まだパートナーがいらないこともあり、演習には参加していないが、他の単独で受ける講義も、定期的な感覚で休むことがよくある。それに明確な理由はなく、面倒臭いと言っていることが多々だ。

「そんなに気に掛けなくても、どうせまた、心に決めた、たった一人の魔女でも、口説きに行ってるんだろお？」

「そういえば、前から気になっていたのだが、その、ポンドが心に決めている、たった一人の魔女とは一体、どこの誰なのだ？」

「……………」

「ん？」

自分の問いかけに答えず、動きすらも止めるマルクを見て、ルビイネルが首を傾げる。

「マルク？」

「そういえば、誰なんだろう」

「は？ 知らないのか？」

眉をひそめ、首を捻るマルクに、ルビイネルが思わず、呆れたような声を出す。

「アメジエス、知ってる？」

「いいえ、知らないわ。私も、マルクは知ってると思ってたんだけど」

「いや、だって、別に、改めて聞くようなことでもないし……」

アメジエスの言葉に、マルクが少し困った表情を見せる。そんなマルクを見て、アメジエスも考え込むように俯いた。二人を包む、気まずい雰囲気、ルビイネルがそっと、肩を落とす。

「まあ、どうせ、この魔院の魔女なのだろう？ 魔女科クラスの者に適当に聞けば、わかるのではないか？」

「そ、そうだな」

気まずい空気を打破するように言うルビイネルに、マルクが笑みを作って頷く。

「ま、何かわかったら、俺にも連絡くれ」

「あ、うん」

マルクの返事を確認すると、ブラッドスが、演習中の他の魔士のもとへと歩き去っていく。

「ポンドのたった一人の魔女、か……」

誰も知らぬその魔女のことを考え、マルクは、真剣な表情を見せた。

昼休み。中庭、ベンチ広場。

「他のクラスの子たちにも聞いたけれど、誰も知らなかったわよ。ポンドが口説いてる魔女なんて」

「トウーパも聞いてあげたけど、皆、知らないってえ」

「私もだ」

「そっか」

次々と言うアメジエス、トウーパ、ルビィネルに、マルクがそつと肩を落とす。ルビィネルたちは皆、魔女科でもクラスが違う上、アメジエスやトウーパは、他のクラスにも顔が広い。魔女たちは、誰が誰のパートナーになったのという話題には敏感であるし、噂も好きだから、これだけ聞いても誰も知らないということとは、その魔女が、誰にも話していないか、その魔女が、この魔院に居る魔女ではないということだろう。

「魔院外の魔女かあ？ でもそうだったら、調べようが……」

「ハツハツハ！ 待たせたねえ、我が魔女よ！」

マルクが首を捻っているところへ、高らかと響き渡る笑い声と共に、体をくるくると回転させながら、フランがやって来た。フランが現れた途端、マルクたちが皆、うんざりとした表情となる。

「風のように軽やかに、波のように穏やかに、この僕が、レイールの貴族であるパパに頼んで、調べてもらったところだねえ」

「父親の力、借りただけかよ」

フランの言葉を聞き、マルクが思わず突っ込みを入れる。

「このレイールの魔院外の魔女で、ポンド・アラーネルに、パートナーを申し込まれたような人物は、居ないとのことだったよ！」

「そう、ご苦労様」

「なあ〜に！ パートナーである、君のためなら！」

「調子よく、使われているな」

アメジエスの素っ気ない一言にも、嬉しさ全開で体を跳ね上げらせるフランを、ルビィネルがどこか、憐れみの目で見つめる。

「魔院外の魔女でもないとなるとあ、もしかして、フレイヤ？」

「それはないと思うわよ。ポンドは魔士とはいえ、ただの人間だか

ら、フレイヤには入国も出来ないだろうし」

提案するトウーパに、アメジエスが冷静に答える。

「じゃあ一体、誰なわけえ？」

「さあ？ ポンドは昔から、肝心なところで秘密主義になる癖みたいなものがあるから」

トウーパの問いに答えながら、困ったように肩を落とすアメジエス。

「親しみやすい雰囲気装っておいて、結局は誰も、近付けさせないのよねえ」

「君の近くには、この綿のようにフワフワで、麻のように涼しげな、僕がいるよ！ 我が魔女！」

「ハイハイ」

熱く身を乗り出してくるフランを、アメジエスが適当にあしらう。

「俺、帰りにポンドの家、寄ってみるよ」

「え？」

少し考え込むような表情を見せた後、そっと笑みを浮かべて言い放つマルク。そのマルクの言葉を聞いた途端、アメジエスが眉間に皺を寄せ、表情を曇らせる。

「けど、マルク」

「大丈夫、大丈夫。ポンドの様子だけ、チラッと確認したら、すぐ帰るから」

心配するように呼びかけるアメジエスと、アメジエスを安心させようと、笑顔を向けるマルク。そんな二人を見つめながら、ルビィネルは少し、戸惑うように首を傾げた。

「ポンドの家に、何かあるのか？」

「へ？」

一日の講義を終えたマルクは、ルビィネルと共に素早く魔院を出て、レイヤの川を渡り、魔族領のレイールから、人間領のヤールへと帰って来ていた。帰路での、いきなりのルビィネルの問いかけに、マルクが目を丸くする。

「ポンドの家に行くと言い出したそなたを、アメジエスが、ずっと心配していたようだったから」

「ああ。まあ、ちよつとね」

あまり浮かない笑みを見せるマルクに、ルビィネルが目を細める。

「もしか、 “最下級魔士” は、家に入るのに、腹筋二百回、腕立て三百回、背筋五百回をしなければ、ならないとか……？」

「どんな家だ！ そんな差別、あつて堪るかよ！」

ルビィネルの突拍子もない発言に、マルクが勢いよく、声を張り上げる。

「ポンドのお父さんって、ヤールの領主さんなんだよ」

「領主？」

「うん。このヤールで、一番権力持つてる人ってこと」

「へえ。ではポンドは、ヤールで一番偉いところの、お坊ちゃんということがあるか」

「まあ、そうは見えないけどな」

ルビィネルの言葉に頷きながら、マルクが少し楽しげに笑う。だが、マルクのその笑みはすぐに曇り、もとの浮かない表情へと戻った。

「で、ポンドのお父さんは、コーラルとすつごく、仲が悪いんだ」

「コーラルというと、確か、そなたの育て親だったな」

「うん。コーラルは魔族だから、人間領のヤールに勝手に入って、

住みついてるコーラルが、気に食わないんだろうね。昔からよく、コーラルに、ヤールを出て行けって抗議してた」

過去を思い出すように目を細めながら、マルクが言葉を続ける。

「それで、コーラルが育ててる俺も、嫌われてるってわけ」

「成程な」

マルクの話聞き終えたルビィネルが、納得したように頷く。レイヤは、人間と魔族が共存する、この世界唯一の国。それだけ聞けば、二つの種族が交ざり合う、平和な国を想像することも出来るが、共存するからこそ、二つの種族の確執は、より深いものなのだろう。「それなのに、そなたとポンドは、仲が良いのだな」

微笑みかけたルビィネルに対し、マルクは笑みを浮かべたまま、静かに、視線だけを落とす。

「対抗心、かな」

「え？」

マルクのその答えに、ルビィネルが戸惑うように首を傾げる。

「あ、着いたよ」

大通りを進んでいると、不意に、マルクが足を止める。マルクにつられ、ルビィネルもすぐに足を止めた。二人の目の前にあるのは、大通りに面した、巨大な屋敷。白を基調とした上品な壁作りの、まさに城のような屋敷で、縦は二階までしかないが、横幅が非常に長く、首を完全に左右に向けないと、屋敷の終わりが見えないほどだ。分厚い黒色の門に覆われており、屋敷と門の間には、魔院のグラウンド以上の広さの庭が広がっている。

「確かに、ヤール一番の金持ちでは、あるようだな」

「いつ来ても、圧倒されるよ」

感心するように言うルビィネルの隣で、マルクが少し引きつった表情を見せる。黒い正門の前に立っていた、警備の者らしき男に声を掛け、勝手口を開けてもらうと、マルクとルビィネルは、ポンドの家の敷地内へと入った。噴水や、造形物もある、広大な庭を通り、やっと屋敷の玄関口へと辿り着く。取り付けられたベルを鳴らすと、

玄関の大きな木製の扉が開き、そこから、メイド服を着た、若い女性  
性が姿を現した。

「ポンドお坊ちゃまは、外出されております」

マルクが長々と名を名乗り、状況を説明し、その上で問いかけた  
というのに、メイドから返って来た返事は、たったの一言であった。  
抑揚のない声に、感情のない表情を見せるメイドに、マルクが一気  
に、困ったような表情となる。

「あ、あの、どこに行っただんでしょうか？」

「お教えすることは、出来ません」

「け、けど、俺たち一応、魔院の講師にも依頼されて、ポンドの様  
子の確認に……」

「お教え出来ません」

再度、はつきりと言い放つ、頑なな態度のメイドに、マルクが肩  
を落とす。これ以上、問いかけたところで、メイドから答えは聞き  
出せそうもなかった。

「何だ、客人か」

「あつ」

屋敷の中から、メイドのすぐ後方へと姿を見せたその人物を見て、  
マルクが少し驚いた表情となる。現れたのは、黒い髪に、黒い髭を  
たくわえた、鋭い緑色の瞳の、四十代から五十代くらいの、立派な  
体躯の男であった。いかにも高貴な者が着るような、金の刺繍の入  
った服を纏っており、醸し出す雰囲気は貫録たっぶりである。

「これは、旦那様」

現れたその男に対し、メイドが慌てて、深々と頭を下げる。

「んん？」

男の鋭い瞳が、玄関前に立つマルクへと向けられる。

「これはこれは。どこの魔士かと思えば、あの魔女のところの子供  
ではないか」

「ご無沙汰しております、ディルハム様」

棘のある言い方をしてみせるその男、ディルハムに対し、マルク

は表情一つ変えずに、メイドと同じように、深々と頭を下げた。

「ん……？」

ディルハムの後ろから、ディルハムに続くようにして、屋敷から出て来る、真つ黒な法衣を纏った不気味な男に気付き、ルビィネルが眉をひそめる。頭から法衣を被っているため、はっきりと表情は見えないが、鈍く輝く深紅の瞳は確認出来た。その瞳に、どこか見覚えがあるような気がして、ルビィネルが考え込むような表情を見せる。

「随分と大きくなったな」

ルビィネルが法衣の男に気を取られている間に、ディルハムはマルクとの間の距離を縮め、マルクをよく知っている様子で声を掛けた。

「それほどに魔女の寵愛は、心地よいかね？」

挑発するような発言を見せるディルハムに、マルクが様子を変え、ことはなかったが、マルクの隣に立つルビィネルが、法衣の男からディルハムへ視線を移し、あからさまに表情をしかめる。そのルビィネルの、敵対するような視線に気付いたのか、ディルハムが今度は、そちらを向く。

「そちらは？」

「私のパートナーとなった、赤炎の魔女ルビィネルです」

「魔女、ねえ」

マルクからの紹介を受けたディルハムが、細めた冷たい瞳で、まっすぐにルビィネルを見る。

「やはり魔女の子は、魔女と共に居る方が落ち着くのかな？」

その冷たい瞳が、また、マルクへと向けられる。

「レイールで何をしようとする自由だが、このヤールには、あまり魔女を連れ込まないでもらえないか？ 魔女の毒気に、ヤールが侵されてしまう」

「な……！！」

身を乗り出し、抗議しようとしたルビィネルの前に、マルクがす

ぐさま右手を差し出し、それを制す。

「君を育てた、あの魔女にも、早くヤールを出て行くよう、伝えておいてくれ」

マルクにそう言い放つと、デイルハムが、法衣の男を初め、数名の従者を連れ、マルクの横を通り過ぎて、正門の方へと歩き出していく。

「君のせいで、ヤールが穢れる」とね

振り向きざまに残したデイルハムの言葉に、マルクがそつと眉をひそめる。

「コーラルは」

マルクに背を向け、正門へと歩き出していたデイルハムが、背中に届く声に気付き、ゆっくりと振り返る。玄関先に立ったマルクは、真剣な眼差しを、デイルハムへと向けていた。

「コーラルは、ヤールを穢したりしません」

「それは、君の主観だよ。マルク・クラウド」

はつきりと答えるマルクを、デイルハムがあっさりと笑い飛ばす。

「失礼」

短く挨拶の言葉を落とすと、デイルハムはまた背を向け、今度は振り返ることなく、正門へと歩いていった。正門の前に待機していた火車かしゃに、従者と共に乗り込んでいく。

「マルク」

「へ？ うっ」

デイルハムの様子を見つめていたマルクが、横から名を呼ばれ振り向くと、そこには、見るからに不機嫌極まりない表情を見せた、ルビィネルの姿があった。

「右手を貸せ、マルク。あやつを燃やそう」

「ダメに決まってるだろ！ あの人の、ポンドのお父さんなんだから！」

「そんなことは、関係ない」

「関係あるって！」

怒りに身を震わせているルビィネルを、必死に宥めるマルク。余程、先程のデイルハムの言動が、気に食わなかったのだろう。マルクとしても、デイルハムの言動は、怒りを感じないわけではないが、今、ルビィネルに魔炎を使わせては、デイルハムの命にも係わる。

「それより今は、ポンドを……！」

「ポンドお坊ちゃまは、いらっしやいません。お引き取り下さい」「あつ」

ルビィネルを宥めているマルクに、再度、冷たく言い放つと、メイドはそのまま、屋敷内へと戻り、あつさりと扉を閉めた。扉の閉まる音が響き、マルクが呆然と、声を漏らす。

「閉められちゃった……」

「燃やすか？」

「燃やさないってば」

ルビィネルの問いに答えながら、マルクは困ったように、頭を抱えた。

メイドに扉を閉められてしまった以上、玄関先に突っ立っただけも仕方ないということで、マルクとルビィネルは正門を出て、屋敷を一周しようと塀沿いを歩き、屋敷の裏手の方までやって来ていた。何も情報を得られないまま、大人しく帰ることもし辛く、他に誰か、屋敷の者でも見当たらないかと思っただけの行為であった。

「裏庭とか散歩してないかなあ？ ポンド」

「ポンドは、出掛けているのだろうか？」

「メイドさんの言葉が、事実だったらね」

高い塀を、背伸びするようにして覗き込むマルクに、その後ろを歩くルビィネルが問う。どこか含みのある答えを返すマルクに、ルビィネルはそつと眉をひそめる。

「事実を教えてもらえないほどに、嫌われているということか」

「まあ、その可能性はある、かな」

ルビィネルの言葉に頷きながら、マルクが困ったように笑う。

「私も、あそこまでとは思わなかった」

先程のデイルハムの言動の数々を思い出し、ルビィネルが少し呆れたように肩を落とす。

「魔女は、人よりも強大な力を持っている。毛嫌いされても、文句は言えぬが、それにしても、あのような言い方はあんまりではないか？」

「仕方ないよ。あの人には、このヤールを守るっていう、義務があるんだからさ」

「だからって……あのような言葉を向けられて、そなたは、腹が立たぬのか？」

「立つよ」

ルビィネルからの問いかけに、マルクはあっさりと頷いた。あまにも素直に答えが返って来て、ルビィネルが少し驚いたように、目を丸くする。

「ならっ……」

「俺さ、昔、同じようなこと言われて、腹立てて、あの人に勢いよく怒鳴り返したことがあったんだ」

何故、怒らなかつたのか、とルビィネルが問う前に、マルクはその問いを読んだのだろうか、過去のことを話し始めた。

「そしたら、“魔女が育てただけあって、ろくな子供じゃない”って、コーラルが散々、けなされた」

マルクの言葉を受け、ルビィネルが眉間に皺を寄せる。

「その時、気付いたんだ。俺が腹立てて、怒ったって、コーラルの立場を悪くするだけなんだって」

どこか悟ったような表情を見せるマルクを見て、ルビィネルがそっと目を細める。

「だから、もう何言われても、無暗に怒鳴り返したりとか、そういうことはしないようにしようって、決めた。その方がずっと、コーラルのためになるから」

少し視線を落とし、決意のこもったような、いつもよりも低めの声を落とすマルク。

「大事なのだな。そのコーラルとやらが」

「まあ、家族だからね」

「家族、か……」

マルクの発した言葉を繰り返し、ルビィネルがどこか、考え込むような表情を見せる。

「それより、今はポンドをつ……」

「あした、の、前は、今日。きのうの前は、おととい。一昨日の、前は、何……？」

「ん？」

話題を切り替えようとしたマルクが、どこからか聞こえてくる、妙な歌声に気付き、眉をひそめる。歌声は途切れ途切れで、歌詞の意味もよくわからない。だが、その歌声は透き通ったように美しく、自然と耳に馴染んだ。歌声を探し、マルクが大きく背伸びをして、ポンドの家の敷地内にある、これまた大きな裏庭を覗き込む。

「あつ」

「一昨日の、前は、先おととい。先おととい、少し、言にくい……」

ただの独り言としか思えぬ歌詞で、歌声を響かせていたのは、一人の少女だった。肩ほどまで伸びた、緩いウェーブの、青緑色の髪。大きな瞳は、桃色だ。空を見上げる視点は、あまり定まっておらず、全体的にどこか、力の抜けたような、そんな空気を纏っている。表情も、特に無く、感情が浮かんでいない。年頃は、マルクとそう変わらないように見えるが、橙色のワンピースが、もう少し幼く見える。裏庭の草地に座り込み、空へ向けて、その美しい歌声を響かせていた。

「魔、女……？」

「……っ」

小さく呟いたマルクのその声に、少女は敏感に反応し、歌声を止

めて、勢いよくマルクの方を振り向いた。いきなり振り向いた少女に、マルクが思わず焦ったような表情となる。

「あ、えと、こ、こんにちは」

「不審、人、物。略して、フジン……」

よくわからぬ言葉を落としながら、草地から立ち上がった少女が、いかにも怪しい者を見る目つきで、マルクの方を見る。

「や、俺は別に、不審人物とかじゃ……！」

「裏庭を覗き込んでいる時点で、なかなか、不審だと思うが」

「うるさいなあ！」

必死に弁解しようとするマルクを、逆に落とし込むような発言をするルビィネルに、マルクが勢いよく怒鳴りあげる。

「どうせ俺は、裏庭覗くほどの価値もない男なんだよー！」

「どんな価値だ」

頭を抱え、嘆き始めるマルクに、ルビィネルが呆れた表情を見せる。

「やっぱり、フジン……」

突然、叫び出したマルクに、さらに訝しむような瞳を向ける少女。

「マルク、ネガティブになっていないで、ちゃんと説明を……」

「マル、ク？」

ルビィネルが呼びかけたマルクの名に、少女がはつきりとした反応を示す。大きな瞳をまっすぐにマルクへと向け、今までの無表情から少し動かし、興味を示すような様子を見せる。

「あなた、マル、ク……？」

「へ？ あ、う、うん。そう、だけど？」

少女からの問いかけに、マルクが少し戸惑いながらも頷く。

「じゃあ、あなた、ポンドの、友、達……？ 略して、ポント？」

「略す意味が、よくわからないけど……けど君、ポンドのこと、知ってるの？」

少女の言葉を受け、マルクが摒越しに身を乗り出し、少女へと問いかける。ポンドの屋敷に居るのだから、ポンドのことを知っている。

ることは当たり前かも知れないが、マルクの名を知っていると、相当に近い者ということになる。

「そ、そう。俺、ポンドの友達なんだ。最近、魔院にポンドがずっと来ないから、心配になって、ここまで来たんだけど」

「心、配……」

マルクの発した言葉を繰り返して、少女がどこか、考え込むような表情を見せる。

「じゃあ、あなた、ポンドの、味、方……？ 略して、ポンミン？」

「へ？ あ、うん。敵、ではないと思うけど」

少女の問いの意図がわからず、戸惑いながら答えるマルク。マルクの答えを聞いた少女が、そっと目を細め、扉の向こうに居るマルクたちの方へと、ゆっくりと歩み寄って来る。

「なら、あなたを……ポンドのところ、略してポイントに、連れて行く……」

「さっきの友達と、略語一緒だけど、でもまあ、案内してくれるなら、細かいことはいいや！ ありがとう！」

少女の申し出に、素直に喜ぶマルク。そんなマルクの横で、ルビイネルはそっと、表情を曇らせた。

ポンドの家でもある、アラールネルの屋敷は、外観では一つの横長の建物に見えるが、実際、中は三つの棟に分かれている。正門からまっすぐ向かった先にある、表玄関のある棟が本棟。その両脇にそれぞれ、左棟と右棟がある。本棟にはいくつもの客間や、大広間が並んでおり、左棟は大食堂や調理場などがある。そして右棟には、屋敷の住人たちの部屋があった。その右棟二階の最も奥に、ポンドの部屋はあった。

「はあゝあ」

部屋に取り付けられた大きな出窓から、屋敷の外に広がるヤールの町並みを見つめながら、自室に一人、退屈な時間を持て余しているポンドは、深々と溜息を吐いた。

「こう毎日、部屋にこもりつきりだと、全身が腐りそうだなあ」

ポンドがうんざりと呟きながら、出窓から部屋へと視線を移し、肩を落とす。ポンドの部屋は、一人部屋にしてはかなり広く、寝台や机、本棚など、家具もすべて、高級感が溢れている。見た目では完全に、何不自由ない、金持ちの息子の部屋であろう。だが、そんな部屋に居ても、ポンドの表情は、何一つ満ち足りている様子がない。

「魔院、行ってねえなあ。皆、心配してっかなあ。アメジエスは、心配してねえだろうなあ」

あれこれとボヤきながら、ポンドが再び、窓から外の景色を見つめる。ヤールの町並みの向こうに見える、レイヤ川。その向こうには、ポンドが毎日のように通っていた、レイルがある。

「マルク、ルビィネルちゃんと、上手くやってっかな……」

どこか案じるように、ポツリと呟くポンド。その時、部屋の扉をノックする音が響き、ポンドが扉の方を振り向いた。

「晩飯には早いし……メルかあ？」

問いかけながら、ポンドがゆっくりと扉を開く。

「ポンド！」

「うおっ」

ポンドが扉を開けると、すぐ目の前に、マルクが立っていた。今しがた、丁度考えていたマルクが目の前に現れ、ポンドが驚きの表情を見せる。心臓の鼓動を静まらせるように、ポンドが左胸に左手を当てる。

「な、なんだってマルクがここにっ……………」

「わたしが、連れて、来た……………」

「メル」

マルクの隣に並んだ、先程の青緑色の髪の少女が答えると、ポンドがそちらを振り向く。

「何、勝手なことしてんだよ」

「この人、マル、ク…………ポンド、よく話す、ポンドの、ポントで、ポシミ、でしょう…………？」

「そう、ポンポン言われたって、わかんねえって」

正確な意味の取りづらい、メルと呼ばれた少女の言葉に、困ったように肩を落とすポンド。

「お前も、ホイホイ付いてくんなよ。親父にでも見つかったら、どうする気だ？」

ポンドが視線をマルクへと移し、ついで、マルクのすぐ横に立つルビィネルへと移す。

「うちに魔女まで連れ込んで…………また、“魔女の子供は、ろくなことをしない”とか何とか、嫌味言われるぞお？」

「そんなのは、別にいいよ」

忠告のようなポンドの言葉に、マルクは、少し怒った様子で答える。

「ねえ、ポンド、なんで魔院に来ないの？」

「……………」

マルクの問いかけに、ポンドがすぐさま、眉をひそめる。

「見た感じ、元気そうだし、病気じゃないよね？ 病気なら、メイドさんも、“ポンドは居ない”とか、嘘つかないだろうし」

次々と言葉を発し、マルクがどこか問い詰めるように、ポンドを見る。

「ねえ、ポンド。何かあったの？」

真剣な表情を作り、マルクがポンドへと問いかける。ポンドは、マルクから逃げるように視線を逸らし、俯くと、どこか考え込むような表情を見せた。

「別に、何でもねえよ」

「ウソだ」

すぐさま否定するマルクに、ポンドが表情をしかめる。

「あのさあ」

呆れたように言い放って、ポンドが顔を上げ、マルクへと冷たい視線を投げかける。

「何かあったとして、んで、お前に言ったところで、何になの？ たかが、最下級魔士に相談したところで、何の解決にもっ……」

「どうせ俺は、最下級魔士だよ」

馬鹿にしたようなポンドの言葉を、マルクが勢いよく遮る。

「出来ることなんて、ほんのちよびつともない」

「だったら」

「けど、大事な友達が困ってたなら、どうかして助けたいって気持ちくらい、最下級魔士にもあるんだよ」

「……っ！」

力強く放たれるマルクの言葉に、ポンドが思わず、目を見開く。

そんな二人の様子を、メルは真剣な表情で、ルビィネルは穏やかな表情で見つめる。マルクの言葉を受け、そっと俯いたポンドは、少しの間を置いた後、困ったように笑みを零した。

「ああ、あ、やっぱり敵わねえや。お前には」

「へ？」

お手上げするように、そっと言葉を落とすポンドに、マルクがよ

く意味が理解出来ず、首を傾げる。ポンドは部屋の扉から顔を出し、周囲を確認すると、手招きをして、マルクたち三人を、部屋の中へと入れた。もう一度確認を行って、ポンドが部屋の扉を閉じ、鍵をかける。再度、部屋の外の音を確認すると、ポンドは、部屋の中へと入れた、マルクたちの方を振り向いた。

「俺、今、この部屋に軟禁されてんだよね」  
「軟禁!?!」

ポンドの言葉に、マルクが勢いよく驚く。  
「誰に!?!」

「んな悪趣味なことすんの、うちの親父に決まってるんだろ」

「親父って、ディルハム様が?」

「そっ」

聞き返したマルクに、ポンドは特に動揺なく答えたが、マルクは動揺を隠すことは出来なかった。マルクに親というものは居ないため、感覚でしかないが、親が子供を軟禁するというのは、相当な事態ではないのだろうか。だがポンドは、ごく自然に話をしている。

「なんで?」

「ん、まあ一言では答えにくいんだけど、親父、今、頭イカれちゃっててさ」

率直に問いかけるマルクに、言葉を選んでいるのか、ポンドが困ったように、頭を掻く。

「まあ前からイカれてんだけど、半年前、あいつが来てからは、特にねえ」

徐々に陰しくなっていく、ポンドの表情。ポンドのすぐ傍で、メルと呼ばれた少女もまた、どこか厳しい表情を見せる。

「あいつって?」

「自称、魔炎研究者とかいう男。全身に真っ黒な法衣被っててさあ、もう見るからに怪しいの何のって」

「法衣? あっ」

ポンドの説明を聞いたマルクが、先程、玄関先でディルハムと遭

遇した際、真つ黒な法衣を纏った男が、従者として共に居たことを思い出す。確かに、あの姿は明らかに異様で、他の従者に比べると目立っていた。

「法衣の人なら、さつきデイルハム様と一緒に居るとこ、見たよ」

「最近は、あいつ等、ベツタリだからな。つたく、なんであんな怪しい男を、疑いもせずに傍になんか置くかねえ。親父も」

マルクに答えながら、ポンドが呆れたように肩を落とす。

「魔炎、研究者……あ、そうか。思い出した」

突然、声を挟むルビィネルに、マルクとポンドが同時に振り向く。

「あの男、モルダバ」

「モルダバ？」

「モルダバの野郎を知ってんのか？ ルビィネルちゃん」

一つの名を発したルビィネルに、マルクが首を傾げ、ポンドが驚いた表情を見せる。問いかけたポンドに、ルビィネルは真剣な表情で頷いた。

「どこか見覚えがあると、思っていたのだが、あの男は元々、フレイヤの、魔炎研究の先駆者だ」

「フレイヤの？ じゃあ、魔族ってこと？」

「ああ。数十年前、魔炎の仕組みや特徴などを、次々と明らかにし、フレイヤ中の関心を集めた。だが、魔炎強化の研究に取りつかれてからは、次々と違法実験を進めて、実験台となった魔女や魔族を、何人も犠牲にしたのだ」

「犠牲っ……」

ルビィネルの説明を聞き、マルクが険しい表情を見せる。

「フレイヤを追放されてからは、まったく名を聞かなくなったのだが、まさか、人間領のヤールに身を寄せていたとはな」

「違法実験ねえ。やつぱ曲者だったか、あの野郎」

少し考えるように俯きながら、こちらもマルク同様、険しい表情を見せるポンド。

「じゃあ、ポンド、もしかして、そのモルダバって奴のことを、何

とかしようとして……」

「ああ。尻尾掴んでやるうと思って、研究所忍び込んで、あれこれと物色してたところを見つかって、それで今、軟禁状態ってわけ」  
軽い口調で、軽くはない内容を、さらりと話すポンド。

「何回か忍び込んでるけど、さすがに軟禁されたのは、初めてだった」

「一人で無茶するなあ」

「仕方ねえだろ。怪しげな奴にいつまでも、自分の家、うろつかれたくもねえし。それに」

呆れたような視線を向けるマルクに、ポンドが真剣な表情を見せながら、すぐ近くに立つ、メルの方を見る。

「こいつのことも、あつたしな」

振り向いたポンドを、メルは無い表情のまま、まっすぐに見つめ返す。

「そういえば、その子、誰なんだ？」

「こいつは、エメラルディア。通称、メル。魔女だ」

「魔女、にしては、何かが足りないような……」

何が足りないのかわからず、マルクが眉をひそめながら、じつくりとエメラルディアを見つめる。

「首のリボンだろう」

「ああ、そうそう！ リボンがない！」

ルビィネルの言葉に、マルクが納得した様子で、大きく手を叩く。ルビィネルの首元に、赤いリボンが巻かれているように、魔女は本来であれば、持って生まれた魔炎の色と同じ色のリボンを、首元に巻いている。それが昔からの習わしであると、養成学校時代に習った記憶もある。だが、エメラルディアの首元には、何色のリボンも巻かれていなかった。

「巻き忘れたのかあ？」

「アホ」

暢気に問いかけるマルクの横から、ルビィネルが鋭く言い放つ。

「どうせ俺は、アホだよ！ バカだよ！」

「このリボンは、フレイヤやレイールなどの国から、公式魔女に与えられる、身分証のようなものだ」

嘆いているマルクのは気にせず、自身の首元の、赤色のリボンを軽くつまんで、説明を始めるルビィネル。

「公式魔女？」

「まあつまり、真つ当な家柄出身で、魔院にも普通に通えるような魔女たちのことだな」

ルビィネルの言葉を受け、マルクが魔院に通っている魔女たちの姿を思い出してみるが、確かに皆、首元にリボンを巻いており、巻いていない魔女の姿などは、正直、見たことがなかった。

「だが、世の中には、真つ当な家柄に生まれず、国からの身分証も貰うことの出来ない、“非公式の魔女”が存在する」

鋭いルビィネルの視線が、エメラルディアへと注がれる。

「非公式の魔女は、国からも存在が確認されていないため、違法行為や国の勢力争いなどに、その魔炎の力を使われることが多々ある」  
「使っつて、そんな酷いこと……」

「何とかしようという国の動きもあるが、何とも出来ていないのが、今の実情だ」

悲しげな表情を見せるマルクに対し、ルビィネルは冷静に言い放った。

「じゃあ、エメラルディア、は」

「ああ、ルビィネルちゃんの言う通り、“非公式の魔女”だ。んで、モルダバの、今の魔炎強化研究の実験台」

ポンドの言葉に、マルクがより一層、険しい表情を見せる。先程までのルビィネルの話の聞いていれば、エメラルディアが、モルダバによる違法実験の実験台であることは、容易に想像がつく。マルクとそう年も変わらないように見えるエメラルディアが、そのような目に遭っているのかと思うと、マルクの胸は、ひどく軋んだ。

「モルダバの野郎、とっ捕まえて、とっつとこいつを、自由にして

やりたかったんだけどなあ」

エメラルディアを見つめるポンドの瞳が、どこか切なげに瞬く。ポンドとエメラルディアの様子を見つめ、真剣な表情を見せたマルクが、気合いを込めるように、きつく右拳を握り締めた。

「モルダバの研究所に行こう、ポンド」

「は？」

いきなりのマルクの言葉に、ポンドが間の抜けた声を漏らす。

「証拠見つけて、デイルハム様に見せて、モルダバ捕まえて、エメラルディアを自由にしよう！」

「あんなあ」

決意に満ちた表情で、次々と言葉を繰り返すマルクに、ポンドが困ったような表情を向ける。

「お前、自分の立場、わかっただけなのか？んなことして、もし親父に見つかったら、今度こそお前、コーラルさんと一緒にヤールを出されるぞ？」

「それでもいいよ」

ポンドの問いかけに、マルクは間髪入れずに答えた。

「コーラルもきつと、“いい”って言うと思う」

「……っ」

迷いのない、晴れやかな笑顔を見せるマルクを見て、ポンドが困ったようなその表情から、口元を緩め、つられるようにして、笑う。「やっぱ、敵わねえや。お前には」

微笑んだポンドは、マルクに聞こえないほどの、小さな声で呟いた。

ヤールの郊外、アラールネル家が持っているという広大な土地の一角に、今はモルダバが魔炎研究に使っているという、大きな研究施設があつた。真つ白な壁には、最小限の窓しかなく、その窓の内にも黒いカーテンがかかつており、建物内部を極端に見えにくくしている。鉄の格子で周囲を囲っており、厳戒態勢に見えた。

「ここが、モルダバの研究所」

「見張りの者も居るようだな」

鉄格子の外側の、少し離れた木の陰から、内部の様子を見つめ、ルビィネルがそつと眉をひそめる。

「けど、エメラルディアだけ、屋敷に残してきて良かったの？」

「ああ。メルの奴、研究所に来ると、嫌そうな顔するし。たぶん、いい思い出がないんだろうな」

マルクの問いかけに、ポンドが少し難しい表情で答える。研究所に行くことを決め、屋敷の者に見つからないように、ひっそりと部屋を出たマルクたちであつたが、ポンドがエメラルディアに、ポンドの部屋に残るよう指示したのである。

「ま、あいつ、常に無表情だから、それに気付くのに、数ヶ月かかっただけ」

ポンドの言葉を聞きながら、マルクが目を細める。

「エメラルディアが、ポンドが心に決めた、“たった一人の魔女”？」

遠慮がちに問いかけるマルクに対し、ポンドが一瞬、表情を曇らせた後、穏やかな笑みを浮かべる。

「最初、モルダバと一緒に屋敷に現れた時は、あいつもモルダバの仲間だと思つてたんだよ。あいつ、表情無いし、言葉も変だし、怪しいっちゃ怪しかったから」

過去のことを思い返し、ポンドが懐かしそうに笑う。

「けど、モルダバが来て一ヶ月後くらいに、モルダバの研究所忍び込んだ時に、研究記録見つけてさ」

「研究記録？」

「ああ、魔炎強化研究の記録。実験台の名前のところには、メルの名前があった」

続くポンドの話に、マルクは徐々に、その表情を曇らせていく。

「そこに、書かれてたんだ。“魔炎強化実験後、笑顔見られず。実験の影響で、感情表現能力を損失したもよう”って」

その言葉に、マルクとルビィネルが同時に、厳しい表情を見せる。「たった二行で、すっげえ簡潔に書いてあったけど、俺、それ読んだ時、頭真っ白になっちまってさ」

ポンドがわずかに声を震わせ、自嘲するような笑みを浮かべる。

「あいつは、感情が損失しちゃうほどの実験やらされてたのに、なのに俺は、何も知らずに、無表情で無愛想で、ただの怪しい奴だと思ってたんだと思うと、自分に腹立ってさ……」

「ポンド」

悔いるように言葉を続けるポンドを、マルクがどこか、心配するように見つめる。

「だから俺が、何とかしてやりたいんだよね。もう一度、あいつが、笑えるようにしてやりたい」

優しく微笑みながら、それでも並々ならぬ決意を滲ませるポンドを見つめ、マルクがそっと笑みを浮かべる。

「それに、勿体ないだろお？ 折角の可愛い女の子が、笑顔も作れないなんてさあ」

「意外とフェミニストなのだな、そなた」

「俺はいつでも、女の子の味方よお？ ルビィネルちゃん」

いつもの軽い調子の言葉遣いに戻り、ルビィネルと気さくなやり取りをして見せるポンドを見て、安心したように微笑むマルク。エメラルディアのことで、思い悩んではいるものの、追い詰められていない様子はないようだ。

「んじゃ、早速、潜入するか」

「うん。ポンドはいつつも、どうやって潜入してるの？」

「鉄格子乗り越えて」

「普通だな」

ポンドの言葉に、マルクが思わず呆れた表情となる。

「けど、今回は三人だからなあ。三人で乗り越えてたら、いくら何でも目立つよなあ」

「“移り火”を使えば、すぐに建物内部に入れる」

「あ、そっか。あ、いや、でも」

ルビネルの言葉に一度は頷いたマルクだが、すぐさま気難しい表情となつて、考え込む。

「お前、方向音痴じゃん？ 下手に“移り火”使つて、思いっきり違う場所に出ちゃったりしたら、ヤバいだろ」

「何を言っている。私は、方向音痴ではない」

「いやいやいやいや、お前が何言つてんの？」

自信を持って主張するルビネルに、引きつった表情を向けるマルク。

「じゃあ、マルクが誘導すればいいんじゃないかねえの？」

「へ？」

突然のポンドの言葉に、マルクが目を丸くする。

「小っせえ頃、一回、一緒に研究所入ったこと、あつただろ？ だから、マルクが誘導すれば、上手いこと、中まで移動出来るんじゃないかね？」

「それは、俺が並みの魔士だったらの話だろ？」

提案するポンドに、どこか非難するような目を向けるマルク。

「最下級魔士の俺に、そんな器用な芸当、出来るはずが……」

「いや、可能性はあるな」

思い当たつたように言うルビネルに、マルクとポンドの視線が集まる。

「“燃焼”を使うんだ」

「燃焼を？」

「ブラッドスが言っていただろう？ 赤炎は、そなたの体に馴染んでいるのだと。燃焼を使った状態で、そなたが建物内部を意識し、そこに私が補助して、移り火を使う。そうすれば、もしかすれば」「そんな賭けみたいなこと」

「今、私たちがやるうとしていること自体、賭けのようなものではないのか？」

「それは……」

ルビィネルの鋭い問いかけに、思わず口ごもるマルク。フレイヤを追放されたほどの魔族を相手に、その尻尾を、たかが魔士が掴もうとしているのだ。確かに、これは、賭けに近い。

「たまには、自分を信じてみたらどうだ？ マルク・クラウド」

自信に満ちたルビィネルの笑みが、マルクへと向けられる。共にマフレイヤに行こうと言われた時に、マルクが断ることの出来なかった、力強い笑みだ。

「わかったよ」

そう頷いて、マルクが、開き直ったような顔を見せる。

「その代わり、失敗しても文句言っなよな」

「そりゃ言っだろ」

「うん、言っな」

「言っなよ！」

ポンドとルビィネルに文句を言いながら、マルクが、自身の右手を、ルビィネルの差し出した左手へと向ける。魔紋の刻まれた二人の手が、静かに重なった。

「目醒めよ、我が赤炎」

ルビィネルが魔唱を口にし、二人が魔炎を共有する。

「燃焼だ、マルク」

「ああ」

ルビィネルの言葉に頷くと、マルクが目を閉じ、集中し始める。ほどなくして、マルクの全身に、淡い赤色の光が帯びた。その光景

を、ポンドが驚いた様子で見守る。

「いつの間に、こんなに……」

最下級魔士であるマルクの成長ぶりに、思わず目を見張るポンド。  
「建物内部を強くイメージしろ、マルク」

「わかつてる」

目を閉じたままのマルクが、さらに集中しているのか、険しい表情を見せる。そんなマルクを見つめながら、ルビィネルもまた真剣な表情を見せ、重ね合わせていたマルクの右手を、強く握り締めた。  
「行くぞ」

「ああ」

二人がしっかりと頷き合い、重ねた両手から溢れる炎を、強めていく。

「“移り火”」

赤い炎が三人を包むと、その場から、三人の姿が消えた。

赤い炎が辺りを包み込んだかと思うと、次の瞬間、視界に現れたのは、対照的な暗闇であった。薄明りに照らされた狭い部屋には、いくつかの棚が並んでおり、そこに並べられた箱は、大量の埃を被っている。

「ここ、は？」

「んー、見た感じ、地下倉庫っぽいな」

ルビィネルの問いに、周囲を見回し、棚に貼られたラベルや、箱の中身を確認しながら、ポンドが答える。

「人の気配もないし、なかなかナイスな誘導じゃねえの」

「昔、一緒に研究所入った時、中の人に見つかりそうになって、ここに隠れただろ？ その記憶が、残ってたからさ」

「成程ねえ。ガキの頃の悪戯も、役に立つことがあるわけだ」

マルクの答えに、ポンドが嬉しそうな笑顔を見せる。

「じゃ、とつとと行くか。見つからねえうちに」

ポンドの言葉に、マルクとルビィネルは、しっかりと頷いた。廊下に見張りが居ないことを確認し、地下倉庫を出ると、三人は素早く移動して、非常階段へと向かった。階段を音を立てずに上り、三階まで移動すると、また人の気配を確認して、廊下を進む。

「一体、どこに向かつてるんだ？」

「モルダバの部屋。最上階の最奥に、あいつ専用の部屋があるんだ」  
さすがは何度か忍び込んでいるだけあって、ポンドは勝手知った様子で迷いなく進み、やがて、重い鉄の扉で閉ざされた、一つの部屋の前へと辿り着いた。

「ここ。ここが、モルダバの部屋」

「けど」

マルクが、鉄の扉の横に設置されている機器のようなものを見つめ、眉をひそめる。明らかに、この機器で何かをしなければ、この扉は開かないように見えた。

「これは、魔力認証計。モルダバの魔力に反応して、扉が開くようになってる」

「では、どうするのだ？」

「大丈夫、大丈夫。ちゃんと準備、してきたから」

「準備？」

マルクたちが戸惑いの表情を見せる中、ポンドがズボンのポケットを探り、シンプルなデザインの、金色のリングを取り出す。

「何、それ？」

「模倣環<sup>もほうかん</sup>。記憶させた魔族の魔力を、一瞬だけ使えるっていう代物」  
リングを自身の指に通したポンドが、リングをした右手で、扉の横の機器へと触れる。

「こういうこともあるだろうと思って、この前、うちに闇商人が売り込みに来た時、買っと思ったんだよなあ」

「何か俺、ちよつと、お前が怖いよ……」

何の躊躇いもなく話すポンドに、マルクが少し引きつった表情を見せる。闇商人が家に来ることも、その闇商人から物を買うことも、

普通の人間にはなかなかない経験だろう。マルクが引いている間にも、機器がリングからモルダバの魔力を察知し、短い機械音の後にゆっくりと重い扉が開いていく。

「よっしゃ」

リングを外しながら、開いたばかりの扉から、部屋の中へと入っていくポンド。ポンドの後に続くようにして、マルクとルビィネルも、部屋へと侵入する。三人が入ると、部屋の扉は、重い音を立てて、またゆっくりと閉まった。一定時間が立てば、閉まるようになっていくのだろう。

「ここが、モルダバの部屋か」

周囲を見回しながら、ルビィネルが真剣な表情を見せる。そう狭い部屋ではないのだろうか、両面の壁には本棚がきちきちに並べられており、その間には、いくつもの机が並び、その机の上すべてに山盛りの本やら紙やらが積み上がっているためか、その部屋は、妙に窮屈に見えた。窓もなく、薄暗いため、ポンドが、机の上に置かれた、小さな照明灯を点ける。

「この中から何か、違法研究の証拠を見つければいいんだよね？」

「ああ。モルダバは親父と出掛けたみてえだし、数時間くらいは大丈夫だと思うけど、長居は出来ない」

「そうだな。とにかく、手分けして探そう」

互いに頷き合うと、三人は部屋に散り散りに分かれた。マルクは左右の壁の本棚をあたり、ポンドとルビィネルは、数ある机の上に乗っかっている、本やら書類やらに、次々と目を通していく。莫大な数の資料のすべては、魔炎に関するものであった。聖魔院の図書室にすら置いていないような本や、貴重とされている古書まで、幅広く置かれている。その一つひとつを確認していくうちに、どんどんと時間は流れ、すべての資料に目を通して行く間に、二時間程が経っていた。

「確かに、魔炎研究や、その実験に関する書類は、山ほどあるが…

…」

手に持っていた書類を、机の上へと戻し、ルビィネルが険しい表情を見せる。

「違法研究のデータや、その証拠となるようなものは、一切ないな」  
ルビィネルの言葉に、同様の結果を得ていたのか、ポンドもまた、  
厳しい表情となる。

「ここまでないとすると、証拠となるものはすべて、別にして、他の場所に隠している可能性の方が高いのではないか？」

「だよなあ、やっぱ」

困ったように頭を抱え、ポンドが深々と肩を落とす。

「あ、そういえば、ポンドが見つけたっていう、エメラルディアが対象の研究記録。あれは？ 違法研究の証拠になるんじゃない？」

「あの記録も、あくまでメルを観察記録で、実験方法やら結果については、一切記載がなかったんだ」

「そっか」

ポンドの言葉を受け、マルクも困った表情となる。

「けど、他に隠すって言ったって、一体、どこに……」

「何の相談かね？」

「……っ！」

突然入って来る、三人の者ではない声に、マルクたちの表情が強張る。緊張感を走らせた表情で、マルクたちが一斉に振り向くと、重い鉄の扉が、ゆっくりと開き始めた。開いていくその扉の向こうから、黒い法衣を纏った、不気味な男の姿が現れる。

「モルダバ……」

男の名を口にし、ポンドは額から、一筋の汗を流した。

黒い法衣を纏ったモルダバは、昏間遭遇した時のように、頭から法衣は被っていないかった。よく見えるようになったその顔を見れば、モルダバは、思っていたよりも年老いている。髪は白く、顔にはいくつも皺が入っており、首も細い。だが、その赤く輝く瞳は、相手を気圧すような、そんな力を持っていた。見つめられているだけで、居心地の悪くなる瞳だ。モルダバが目の前に現れてから、マルクたちは、一言も発することが出来ず、ただ、その場に立ち尽くしていた。

「懲りないお坊ちゃんだ。何度、父上の顔を潰せば、気が済むのかね？」

「親父の顔、潰してんのは、そっちだろ」

落ち着いた口調のモルダバに、ポンドも負けじと言葉を返すが、その表情は強張ったままで、明らかに気圧されているのがわかる状態だった。

「私は、君のお父上に、協力しているだけだよ」

そんなポンドを見透かすかのようになり、モルダバがそっと微笑む。

「君のお父上は、私の魔炎強化の研究に、非常に興味を持たれている。強い魔炎の力を手にし、ヤールに潜む魔族たちを排除したいぞうだ」

モルダバの言葉に、一気に厳しい顔つきとなるマルク。デイルハムは昔から、ヤールから魔族をすべて追い出そうとしていた。マルクの屋敷にも、何度も、従者を送り込んで来てはいたが、言葉で出て行けと言うだけで、実力行使をすることはなかった。

「その為には、いくらでも資金援助するとも言ってくれている」

「くだらねえ」

不快感を露にし、吐き捨てるように言うポンド。

「今、捕まっちゃってなあ、俺は絶対、諦めねえぞ！ 何度だって忍

び込んで、いつか必ず、お前の尻尾を掴んでやる！」

「ほお」

身を乗り出し、堂々と叫びあげるポンドを、モルダバが感心するように見る。

「ではそろそろ、消しておかねばならないね」

「え……？」

そう言つて、ポンドへと右手を突き出すモルダバ。モルダバの右手から巻き上がる赤炎に、ポンドの表情が凍りつく。

「赤突火せきとつか」

大きな赤炎の塊が、まっすぐにポンドへと飛んで行く。

「ルビイネル！」

「ああ！」

互いに頷き合い、ポンドの前へとやって来たマルクとルビイネルが、魔紋の刻まれたそれぞれの手を重ね、向かってくる炎へと突き出す。

「赤壁火せきへきか」！

赤い炎の壁を張り巡らせ、やって来たモルダバの赤炎を、跳ね返すマルクとルビイネル。モルダバは落ち着いた様子で、戻って来た自身の炎を、右手を絡めるようにして掻き消した。

「ほお、魔女か」

興味深く、モルダバがルビイネルを見つめる。

「どうだい？ 私の研究材料にならないか？」

「丁重にお断りしよう」

モルダバからの誘いを、ルビイネルが大きく笑つて、あっさりと断る。そのまま二人は、重ね合わせた手を掲げた。

「“ 移り火 ” ！」

赤い炎が包み込むと、そのまま、部屋の中から、三人の姿が消える。静まり返った部屋に一人残り、モルダバはそっと、眉をひそめた。

「逃がしは、しないよ」

「って、ここ、まだ研究所の中じゃないかよお！」  
建物の外は外であるが、鉄格子に阻まれた、研究所領域の内部に居ることを確認し、マルクが非難するように声をあげる。

「おかしいな。私の予定では、ポンドの家まで飛ぶはずだったのだが」

「この方向音痴！」

首を傾げるルビィネルに、マルクが強く怒鳴りあげる。

「ああー、俺は今日、ここで捕まるんだあ！ 実験台にされたりしたら、どうしよおー！」

「最下級魔士じゃ、実験台にもならぬだろう」

「どうせ俺は、実験する価値もない奴なんだよおー！」

マルクとルビィネルが、騒々しいやり取りを繰り返しながら、共に移動してきたポンドは、どこか深刻そうな表情で、深々と俯いていた。

「悪い……」

ポンドの口からそつと零れ落ちた言葉に、マルクが嘆きを止めて、振り向く。

「ヤールを追い出されるくらいじゃ、済まなくなっちゃった……」

モルダバから追われる立場となったことに、責任を感じているのか、厳しい表情を見せるポンドを見て、マルクがそつと目を細める。

「そうだね、どうしよつか」

軽く頷いて、笑みを浮かべるマルク。その笑みは、決して悲観したものではなかった。ルビィネルも、マルクと同じように、笑顔を見せる。

「魔炎で攻撃されたのだ。悪意ある証拠には、ならぬか？」

「ん、先に部屋に侵入したの、こつちだからなあ。正統防衛になるんじゃない？」

追い詰められた状況であるというのに、特に焦った様子もなく、

のんびりと会話を続けるマルクとルビィネルを、ポンドが、どこか茫然と見つめる。ルビィネルはともかく、ネガティブなマルクであれば、このような状況になれば、ひたすら頭を抱え、嘆くのが普通である。それが、ポンドの知っている、マルクという人間だ。

「もう俺は、死ぬしかないんだあ」とか、言わねえのか？ マルク

「ん？ ああ、何か最近、色々あり過ぎて、この程度じゃ、あんまり焦らなくなってきたよ」

「どんな“最近”を、過ごしてたんだよ……」

惚けたように笑うマルクに、思わず突っ込みを入れるポンド。

「何だ。まだ、こんなところに居たのか」

聞こえてくる声に、一瞬にして険しい表情となるマルクたち三人。すぐさま声の方を振り向くと、そこには、モルダバと、モルダバと同じように黒い法衣を纏った、数名の男たちが立っていた。男たちは皆、一切表情が無かった。

「とつくに外に出たと思って、捜索隊を出してしまったよ」

「そうだろうと思ひ、内に潜む作戦だったのだ」

「嘘をつけ」

得意げに話すルビィネルに、マルクが冷たい視線を送る。

「まあ、助かったよ。これで、死体を運ばずに済む」

物騒な発言をするモルダバに、マルクとルビィネルが険しい表情を見せる。モルダバが軽く右手を挙げると、それが合図だったのか、モルダバと共にやって来た男たちが、一斉に右手を、マルクたちへと向けた。

「目覚めよ、赤炎」

「青炎」

「紫炎……」

男たちは次々と魔唱を口にし、それぞれの色の魔炎を目覚めさせる。

「あいつ等、皆、魔族かよ」

「魔族追い出すために、こんだけ大勢の魔族に侵入されてちゃ、親父も形無しだな」

魔炎を持つ男たちを見て、驚いたように言い放つマルク。その横でポンドが、父を嘲笑うかのような言葉を吐く。だが、その表情は険しく、少しも笑ってはいなかった。

「やれ」

モルダバの合図と共に、男たちが一齐に、色取り取りの魔炎の塊を、マルクたちへと放ってくる。マルクはすぐさま、ルビィネルと手を重ね、前方へと突き出した。

「“赤壁火”！」

赤い炎の壁を作り、やって来た魔炎のすべてを受け止めるマルクたち。

「う……！」

「マルクっ」

魔炎が壁へと当たった瞬間、マルクの右手に、大きな衝撃が走った。思わず表情をしかめるマルクを、ポンドが心配するように見る。

「重っ」

ポツリと言葉を落とすマルク。確かに、数名の者の魔炎を受け止めたことなど、今までにないが、やって来た魔炎の一つひとつが、非常に重く押し掛かってきた。トゥーパの全力の放出を止めた時も、ここまでの衝撃はなかった。あの魔虎と戦った時の、衝撃波ほどの重さである。

「俺、もうそんなにもたないよ！ ルビィネル！」

「わかってる」

自己申告するマルクに、ルビィネルはすでに理解している様子で頷いた。ルビィネルも、受け止めている魔炎の重さには気付いているようで、その表情は険しい。

「衝撃に備えろ。蹴散らすぞ」

「え？」

ルビィネルの言葉に、マルクは嫌な予感でも走ったのか、その表

情を曇らせたが、ルビィネルはそんなことは気にせず、左手に魔炎を集中させた。

「赤爆火<sup>せきばつつか</sup>」！」

「うわ！」

壁のすぐ後ろで炎を爆発させ、ルビィネルが自身で張っていた壁もろとも、受け止めていた男たちの魔炎を、辺りへと吹き飛ばす。だが、その爆発は、魔炎だけでなく、マルクたちまでも吹き飛ばした。吹き飛んだマルクたち三人が、力なく地面に倒れ込む。

「痛たたたた」

「マルク！」

右肩を押さえながら起き上がったマルクに、すぐ傍で起き上がったポンドが、駆け寄っていく。爆発の瞬間、マルクはポンドを庇い、爆発の影響を受けたのだ。

「ポンド、大丈夫？」

「俺は無傷だ。どう見ても、お前の方が大丈夫じゃねえだろうがっ」  
問いかけるマルクに、ポンドが少し怒った様子で答える。マルクが庇ったため、ポンドは傷一つ負っていないが、マルクの右肩からは、赤い血が流れ落ちていた。

「あんな爆発に、どう備えろって言うんだよ」

「魔炎を食らうよりは、マシだろう」

文句を言いながら、右横を振り向くマルク。二人の右横には、マルクと同じように、左腕に傷を負ったルビィネルが座り込んでいた。傷を負ってもなお、冷静に会話を続けるマルクとルビィネルに、ポンドがどこか、置き去りにされてしまったような心情で、眉をひそめる。

「今の魔炎、ただの魔炎ではないな」

その場で膝を立たせながら、鋭い視線を、モルダバへと向けるルビィネル。

「魔炎から、異質な魔力を感じた。“放出”にしては、威力も異常だしな」

「ほお。なかなか有能な魔女だ」

ルビィネルの言葉を聞き、モルダバが感心したような笑みを浮かべる。

「そう。この者たちこそ、我が魔炎強化研究の、偉大なる研究結果だよ」

モルダバが得意げに胸を張り、両手を広げ、男たちを紹介する。だが、ルビィネルとモルダバの会話を聞いていても、男たちは皆、眉一つ、動かさない。まるで、会話が聞こえていないようだ。その姿に、ポンドが、エメラルディアのことを思い出した。

「そいつ等の感情も、消したのかよっ……」

わずかに声を震わせながら、ポンドが必死に、言葉を発する。

「メルみために、そいつ等の感情も笑顔も、お前のくだらない研究のために消したのかよ!？」

「ポンド……」

立ち上がり、声を荒げるポンドを、マルクは険しい表情で見上げる。

「ああ、あの魔女の観察記録を読んだのか。まったく、つくづく抜け目がないねえ、君は」

ポンドの言葉を受け、モルダバが困ったように肩を落とす。

「くだらない、とは心外だね。魔炎強化は、この世で最も尊い研究だよ」

冷たく微笑んだモルダバが、一瞬も自分の言葉を疑うことなく、主張を始める。

「その尊い研究の材料となれるんだ。感情の一つや二つ、別に失くしたところで問題はないだろう」

モルダバのその言葉に、ポンドが大きく目を見開く。

「ふざけんじゃねえ!!」

研究所中に届くのではないかと思えるほどの大きな声で、ポンドが勢いよく怒鳴りあげる。

「メルもそいつ等も、お前の玩具じゃねえんだぞ!？」

ポンドが身を乗り出し、モルダバへと必死に言葉を向ける。

「なんで、そんなっ……そんな、お前のくだらない研究なんかのためにっ……!!」

「くだらない」……」

ポンドが放った言葉を繰り返し、モルダバがそつと、声を低くする。

「また、言ったね。実に心外だよ」

冷たい表情で、モルダバが右手の人差し指を、ポンドへと向ける。

「赤突火」

モルダバの右手から放たれた赤炎が、まっすぐにポンドを貫いた。

「……っ!」

その光景を目の前で見て、マルクが大きく目を見開く。赤炎に焼かれたポンドは、叫び声をあげることもなく、静かに、後方へと倒れ込む。

「ポン、ド……?」

茫然とした表情で、倒れたポンドへと、ゆっくりと視線を移していくマルク。全身にひどい火傷を負ったポンドは、深く目を閉じたまま、指一本、動かすことはなかった。すぐさま、ルビィネルがポンドのもとへと駆け寄り、厳しい面持ちで、様子を確認する。

「マズイな。魔療水をっ……」

ルビィネルが、服のポケットから、透明な液体の入った瓶を取り出すと、中の液体を、ポンドの火傷した部分へとかけていく。液体がかかると、すぐさま火傷した皮膚が修復され、傷が塞がり始めた。「一旦、退こう、マルク。もう一度、移り火を」

「……っ」

「マルク?」

ルビィネルの言葉など、聞こえていないかの様子で、立ち上がったマルクが、ゆっくりと前方へと歩き出していく。ルビィネルは止めたかったが、ポンドの治療を止めることも出来ず、ただ戸惑うように、マルクの背を見つめた。

「三人まとめて、燃やし尽くせ」

モルダバが指示を出すと、男たちがまた一斉に右手を前へと突き出し、色取り取りの魔炎を放った。放たれた魔炎は、まっすぐに、マルクへと向かっていく。

「マルク！」

魔炎の迫るマルクに、思わず身を乗り出すルビィネル。だが、マルクは、その場から逃れることはせず、表情もまるで崩さずに、ただ、その場でそっと、魔紋の刻まれた右手を振り払った。

『うわあああ！』

「え……？」

マルクが右手を振り払った途端、マルクへと向かっていた魔炎たちが、マルクの右手に弾かれるようにして、放った本人のもとへと戻っていく。戻ってきた自らの魔炎を受けた男たちは、あつという間に全員、後方へと吹き飛ばされた。あまりに一瞬の、だが予想もしていなかった出来事に、ルビィネルとモルダバがそれぞれ、驚きの表情を見せる。

「な、何だ……？」

後方の、倒れ込んだ男たちの方を振り返り、戸惑いの声を漏らすモルダバ。

「“燃烧”で弾き返した、のか……？ それにしたって、あんな強い魔炎を、何個も同時になんて……」

ルビィネルも戸惑うように、マルクの背を見つめる。

「まあいい。所詮は、ただの試作実験の結果共だ」

切り捨てるように言い放ち、モルダバが再び、マルクの方を見る。その間にも、マルクは歩を進めており、モルダバとの距離を数メートルとしたところで、その足を止めた。マルクが向けるまっすぐな視線を受け、モルダバがあらさまに表情をしかめる。

「君も、私の尊い研究の邪魔をする気かね？」

「あんたに、何が尊いかなんて、わかるはずがない」

試すように問いかけるモルダバに対し、マルクは、はっきりとした口調で言い放つ。

「あんたには、この世で一番尊いものが、見えてないんだから」

マルクその言葉に、モルダバが眉をひそめる。

「まったく、生意気なお坊ちゃんの間は、同じように生意気というわけか」

そつと微笑むモルダバであつたが、その表情は明らかに引きつっていた。前方に立つマルクへと鋭い視線を向け、モルダバが右手を、前へと突き出す。

「では仲良く、灰になるといい」

モルダバの口元が、そつと歪む。

「“赤突火”！」

真つ赤な炎が、マルクへと迫り来る。

「……………」

だがマルクはまた、逃げることなく、向かつてくる魔炎を迎えに行きように、自分の右手を突き出した。マルクの右手が、モルダバの赤炎に接触した瞬間、炎が強く瞬いたかと思うと、次の瞬間、魔炎が、マルクの味方をするように、マルクの右手に纏わりつく。

「何！？」

「あれはっ」

その光景に、同時に目を見張るルビィネルとモルダバ。モルダバの放った魔炎を、逆に右手に纏ったマルクは、勢いよくその場を駆け出していき、まっすぐにモルダバへと向かつていく。

「グ……………」

「モルダバあああ……………！！！」

次の魔炎を放とうと身構えるモルダバに、マルクが、魔炎を纏った右手を、勢いよく繰り出す。

「ぐ、ぐあああああ！」

モルダバが次の魔炎を放つ前に、マルクの炎を纏った拳が、モルダバの左頬へと直撃する。拳の威力が相当のものだったのか、モルダバは、すでに倒れている男たちよりも遙か後方まで、あつという間に吹き飛ばされていった。

「ハア、ハア」

赤炎の消えた拳を下ろし、マルクが少し、乱れた呼吸を零す。

「今、のは“てんが転化”に、“しんたいそつてん身体装纏”……………」

そんなマルクの様子を、どこか茫然とした表情で見つめるルビィ

ネル。

「高難易度の炎技を、二つも？ 奇跡、か……？」

「んんっ」

「あっ」

戸惑いきった表情で、首を傾げていたルビィネルが、下方から漏れ聞こえてくる声に気付き、視線を落とす。ルビィネルのすぐ傍の地面に倒れ込んでいたポンドが、ゆっくりとその瞳を開いたのであった。

「あれ？ 俺っ……」

「気が付いたか」

「ルビィネルちゃん」

声を掛けたルビィネルを、ポンドが戸惑うように見上げる。

「モルダバの魔炎による傷は、魔療水で塞いだ。もう大丈夫だ」

「ありがとう。助かったよ」

ルビィネルへと笑顔を見せながら、ポンドがゆっくりと体を起こす。起こした途端、ポンドは、目の前に広がる光景に、何度も目を瞬かせた。

「え、えっ！？ マルクが倒したのか！？」

「んー、まあ、私も原理は、よくわからぬのだが……」

驚きの表情で問いかけるポンドに、ルビィネルが歯切れ悪く答える。

「ク、クソっ……」

マルクに殴られ、左頬を真っ赤に腫れ上がらせたモルダバが、今までで最も険しい表情を見せながら、その場で体を起こす。起き上がったモルダバを見て、眉をひそめるマルク。

「小癪な魔士が！」

「あやつ、まだっ……」

同じようにモルダバを見つめ、ルビィネルが、警戒するように身構える。

「最早、手加減はせん！ ここで全員、燃やし尽くしてやっ……！」

「そこまでだ、モルダバ」

モルダバが再びマルクを攻撃するため、立ち上がるうとしたその瞬間、凜々しく声が響き渡ったかと思うと、モルダバの周囲に何人もの人間が現れ、あつという間にモルダバを拘束した。

『あつ！』

数名の従者を連れ、その場へと現れたその人物に、マルクたちが皆、大きく目を見開く。

「お、親父！？」

その場へと姿を見せたのは、ポンドの父、デイルハムであった。

「な、なんで親父が、ここにっ……………」

戸惑うポンドになど見向きもせず、デイルハムが、拘束されたモルダバのすぐ前へと歩み寄り、高々とモルダバを見下ろす。

「貴様の違法実験の数々、その証拠品はすべて、我々が押収した。

この品共々、貴様を、フレイヤへ引き渡す」

「デイルハムっ……………！」

モルダバが必死に顔を上げ、デイルハムを睨みつける。

「何故だ！？ お前は……………！」

「すべては、貴様の尻尾を掴むため、資金援助をする振りをしていただけだ。私は貴様のことなど、初めから、一瞬も、信用などしていない」

「グ……………！」

はつきりと言い放つデイルハムに、反論の言葉も持たず、モルダバが黙り込み、唇を噛み締める。

「連れて行け」

『はっ！』

デイルハムの言葉に頷くと、従者たちは、拘束したままモルダバを連行していった。倒れていたモルダバの研究結果である魔族の男たちも、従者により運ばれていく。その光景を、どこか啞然とした表情で見つめるポンド。

「まったく、また勝手に家を抜け出して。こちらの計画が、お前の

せいで狂っただろう」

非難するような目で、ポンドの方を振り返るデイルハム。

「お前が部屋で大人しくしておけば、すべては順調に片付いたんだ」

「だ、だって俺、親父がモルダバに誑かされて、トチ狂ったんだと思っ……！」

「馬鹿を言っな」

身を乗り出して訴えるポンドの言葉を、デイルハムがそっと遮る。

「私が、魔族など、信用するはずがないだろう」

デイルハムが、何の迷いもなく、はっきりと断言する。

「じゃあ、ポンドを軟禁したのは……」

「これに、これ以上、勝手なことをさせないためだ。モルダバの奴もいい加減、痺れを切らす頃だろうと思っ……いたからな」

マルクの問いかけに、デイルハムが振り向くことなく答える。

「痺れを切らせたのは、予想通りだったな。まったく、本当に、手を煩わせてくれる」

「す、すみません……」

呆れ果てた様子で言い放つデイルハムに、ポンドはただ、大人しく謝った。デイルハムが視線を動かし、マルクと、いつの間にかマルクの傍まで歩み寄って来ていたルビィネルの方を見る。傷を負っている二人を見つめ、そっと目を細めるデイルハム。

「息子が世話になったようだな。礼を言う」

「え……？」

デイルハムの思いがけない言葉に、マルクが戸惑ったような声を漏らす。

「だが、あの魔女に、ヤールから出て行けと伝えることは、忘れなように」

釘を刺すようにそう言うと、デイルハムはあっさりと二人に背を向け、その場を立ち去っていった。従者もデイルハムの後に続き、その場に、マルクたち三人だけが取り残される。

「俺、ポンドの親父さんに対する見方、変わったかも」

「お、俺も……」

思わず呟いたマルクに、しみじみと賛同するポンドであった。

翌日。アラールネル家、デイルハム自室。

「じゃあ、モルダバはもう、フレイヤに引き渡したのか？」

「ああ。フレイヤで、正式に処罰されるだろう。実験台にされていた者たちも皆、フレイヤ政府が保護するそうだ」

「そっか」

事の顛末を聞きにきたポンドが、デイルハムの言葉に、ホツとしたように肩を落とす。これで、モルダバの研究も終わり、犠牲となる者も居なくなるだろう。

「これに懲りて、これからはもつと、私の言うことを聞くんだな」

「悪かったって思ってるよ、今回は。反省してる」

デイルハムからの小言に、ポンドがうんざりした表情を見せる。

「じゃあ俺、行くわ。もう、魔院に行ってもいいんだろ？」

「ああ」

ポンドがデイルハムに背を向け、デイルハムの部屋を出て行くこととする。

「ポンド」

「ん？」

扉を開けようとしたところで呼び止められ、ポンドがゆっくりと振り返る。

「お前が魔士になるといっているのであれば、それを止めはしない。だが、友人は選べ」

デイルハムの言葉に、ポンドが眉をひそめる。

「マルクのこと？」

「あれは、魔女の子だ。魔族も同然。魔族に関わると、ろくなことにはならん」

はつきりと言い放つデイルハムの、その頑なな発言に、ポンドがどこか困ったように肩を落とす。

「俺、最初、マルクと仲良くしたの、親父への反発だったんだよね」  
懐かしむように微笑むポンドに、デイルハムが訝しむように、眉間に皺を寄せる。

「あれこれ、うるさい親父の言うことを、とにかく聞きたくなくて、そんな対抗心で、俺は、マルクと友達になった」

俺、ポンド！ 俺と友達になろうぜ？ マルク！

えっ………？

くだらない対抗心から、始まった友達。

「けどマルクは、そんな俺の、くだらない対抗心に、あっさり気付いて、なのになら変わらず、ずっと友達で居てくれた」

ポンドがまつすぐにデイルハムを見つめ、そして、誇らしく笑う。  
「だからあいつは、今の俺の、最高の友達なんだ！」

何を気にすることもなく、堂々と言い放つポンドのその笑顔を見て、デイルハムが少し目を細める。

「ってわけで、行ってきます！」

笑顔のまま、軽く手を振り上げ、挨拶を済ませると、ポンドはデイルハムの部屋を出て行った。部屋に一人残ったデイルハムが、深々と肩を落とす。

「まったく、仕方ない息子だ」

デイルハムのその言葉は、困ったような、諦めたような、そんな呟きであった。

同刻。アラールネル家、正門前。

「へえー、じゃあ正式に、レイルルから承認してもらったんだ」

「うん………」

マルクの言葉に、小さく頷いたのは、エメラルディアであった。その首元には、今までなかったはずの緑色のリボンが、しっかりと巻かれている。そのリボンは、エメラルディアが“非公式の魔女”から、“公式魔女”になった証であった。

「魔院、にも……通、える……」

「へえー、良かったな」

「ルビィ、頼んでくれた、お陰……」

「ルビィネルがあ？」

エメラルディアの言葉を聞いたマルクが、戸惑うように、すぐ横に立つルビィネルを振り向く。

「一日でそこまで手続き済ませるなんて、お前、どんなパイプライン、持ってたんだよ」

「ま、まあな。ハハハっ」

少し疑うような視線を向けてくるマルクに対し、乾いた笑いを見せるルビィネル。

「けど、本当に良かったね」

「うん。良かった……」

マルクからの呼びかけに、エメラルディアが深々と頷く。

「マルクたちの、お陰……あの時、マルクたち、ポンドのところに、連れて行って、正解、だった……」

「そっぴや、何で、俺たちを連れてってくれたんだ？ ポンドから聞いたって言っても、話聞いたくらいじゃあ」

「マルクの話、する、時……」

戸惑うマルクに、エメラルディアがゆっくりと、言葉を紡いでいく。

「ポンド……一番、楽しそうな顔、してた、から……」

「……っ」

思いがけないエメラルディアの言葉に、マルクが思わず、口ごもる。

「清き友情だな」

「うるさい」

からかうように微笑みかけるルビィネルに、マルクが少し照れ臭そうに言い返す。

「今朝、ポンド……すごく、嬉しそうだった。マルクの、お陰、だと思っ……だから」

エメラルディアがまっすぐに、マルクを見つめる。

「ありがとう、マルク」

「え……？」

優しい微笑みを浮かべるエメラルディアに、マルクが思わず、目を見開く。それは、感情を損失したはずのエメラルディアが見せた、初めての笑顔で、その笑顔は、何とも美しかった。

「あ、いや！ あ、そのっ……！」

無表情からの笑顔が、何とも美しく、マルクは頬を赤く染め、言葉をさまよわせる。

「あああー！！」

そこへ、屋敷から出て来たばかりのポンドの絶叫が、割って入った。

「なんで！ なんで、初めての笑顔が、俺にじゃなくて、マルクになんだよあー！！」

「え……？」

すぐに笑顔から、もとの無表情へと戻って、少し不思議そうに首を傾げるエメラルディア。頭を抱え込んだポンドは、相当ショックだったのか、玄関先で座り込んでいる。

「俺、結構、頑張ったのよあ！？俺の一途は、どこで報われたら、いいのあ！？」

「あの、ポンド、その、何か、ごめん」

嘆くポンドに、少し呆れつつも、謝罪の言葉を向けるマルク。

「ポンド……何、落ち込んで……？」

「さあな」

エメラルディアに問いかけられ、ルビィネルはどこか、楽しげに

微笑んだ。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5593x/>

---

彩炎の魔女

2011年10月29日02時10分発行